



2017年度

教師海外研修報告書

独立行政法人 国際協力機構北陸支部 (JICA北陸)

フィジー



はじめに

この報告書は、2017 年度に JICA 北陸が実施した「教師海外研修」についてまとめたものです。

「教師海外研修」は開発教育・国際理解教育に関心のある教師及び教育委員会指導主事を対象に実施している国内と途上国での研修です。研修を通し開発途上国の現状、日本との関係や国際協力について理解を深めて頂き、その成果を次世代を担う児童・生徒への開発教育・国際理解教育に役立てて頂くことを目的としています。

JICA 北陸では 2017 年度、北陸地方の小中学校、盲学校、高校、工業高等専門学校からご応募頂いた 11 名の先生方にご参加頂き、金沢市での国内研修を経た後に大洋州のフィジー共和国で海外研修を実施しました。

フィジーは、美しい海に囲まれた観光業が盛んな国である一方、経済発展に伴い様々な課題を抱えています。大らかな気質や家族間の強い結び付きなど魅力的な側面も多い反面、海外からの影響で変化した食生活や“土へ帰らない”ゴミの増加により、高い糖尿病の発生率や自然環境の悪化といった問題が近年顕在化しています。フィジーの「国の発展」の結果生まれてきた課題や望ましい「国の開発」を様々な側面から学ぶ為、参加教員は JICA の技術協力プロジェクトの現場や青年海外協力隊の活動先、現地 NGO、民間企業、教育省、学校などを視察し、意見交換を行いました。また、フィジー人家庭でのホームステイも体験してきました。

そして帰国後は参加教員全員が、国内研修と海外研修で得たこと、学んだことを活かし、国際理解教育の実践授業の計画、実施、結果の共有と改善を繰り返してきました。

2018 年 2 月 24 日には一般公開による総合報告会を開催し、今年度の一連のプログラムを締めくくりますが、参加教員には開発教育・国際理解教育への継続的かつ果敢な取り組みが期待されます。

今年度のこのプログラムにご参加頂いた 11 名の先生方のあふれる熱意と真摯な取り組みに敬意を表するとともに、所属学校の校長先生はじめ関係の皆様のご理解とご支援に心から感謝申し上げます。

本書が、開発教育・国際理解教育に関心をお持ちの、または関わっておられる全ての教育関係者の皆様にとり有用な参考の書となることを願っております。

2018 年 2 月

独立行政法人国際協力機構
北陸支部長 仁田 知樹

目 次

はじめに

研修概要・・ 1

海外研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

実践授業報告

1) 石川県立金沢泉丘高等学校 石尾 和彦 教諭
「フィジーの現状から考える『援助』のあり方」・・・・・・・・ 20

2) 石川県立金沢商業高等学校 前田 昌寛 教諭
「地球規模での気候と環境」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

3) 石川県立金沢辰巳丘高等学校 助田 清華 教諭
「フィジー大研究から大切なことを考える」・・・・・・・・ 39

4) 加賀市立作見小学校 田中 美伎 教諭
「フィジーに行ってみよう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

5) 福井工業高等専門学校 千徳 英介 教諭
「日本のエンジニアに求められること」・・・・・・・・・・・・ 60

6) 金沢市立森本小学校 金曾 涼子 教諭
「見つめよう 世界との絆 ～幸せとは～」・・・・・・・・・・・・ 67

7) 高岡市立能町小学校 奥井 千里 教諭
「おいでよ!フィジーまつり! ～フィジーはかせになろう～」 76

8) 白山市立東明小学校 倉 さくら 教諭
「フィジーをたんけんしよう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

9) 石川県立盲学校 箸本 淳也 教諭
「自分や日本、フィジーのよい所を知ろう!伝えよう!」 97

10) 石川県加賀市立動橋小学校 小濱 瑤子 教諭
「フィジーの果てまでイッテ Q」・・・・・・・・・・・・・・・・ 109

11) 金沢市立中村町小学校 武原 義典 教諭
「世界の中の日本 幸せの国フィジー ～きみのためにできること～」 121

JICA 開発教育支援事業案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136

教師海外研修とは

≫ 研修のねらい

独立行政法人 国際協力機構(以下JICA)では発展途上国で起こっている様々な「国の発展」を巡る問題、望ましい開発の在り方を私たち一人ひとりが理解し考え、共に生きることが出来る公正な地球社会づくりを促進していく為、「開発教育」支援事業を展開しています。その一環として教師海外研修は学校の先生方を対象に、国内と途上国で研修を行い、その経験を次代を担う児童・生徒の為に国際理解教育・開発教育に役立ててもらうことを目的として実施しています。

国際協力に従事する方々の現地活動の視察やホームステイ先家族との交流、同じ想いを共有する教員間での意見交換を通して、途上国の置かれている現状や課題、日本との関係、国際協力の実情について理解を深めます。そして、国際社会をこれから生きていく児童・生徒に何を伝えるか、何を学んで欲しいか、試行錯誤しながら授業案を作成し、実践していきます。

また、研修参加後はJICA北陸と協力し、各県の教育現場で開発教育・国際理解教育を推進する中核となって頂くことも期待しています。

≫ こんな先生方におススメ！

- グローバル教育、国際理解教育を今後実践していきたい方
- 既に国際理解教育を実践しているが、実体験が十分ではなく教育する立場としての説得力が不足していると感じている方
- 途上国や国際協力についてきちんとした理解や知識を入れ、実体験と合わせて授業をしたい方
- ますます重要になる英語力やESD(Education for Sustainable Development/持続発展教育)に加え、最近教育業界でも取り上げられるようになったSDGs(Sustainable Development Goals/持続可能な発展)など現代の流れに沿った知識や実体験を求めている方
- 教員としてこれからも成長していく為に、国際理解教育について他校の先生達と一緒に学び合いたい方

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



SDGs:国際社会が2030年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するため設定された重要な世界共通の目標。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

≫ JICA 北陸のイチオシポイント

- 本研修では、「国の発展」や「国の課題・問題」「国際協力方法」を多面的に学ぶため、JICAが行っているプロジェクトの現場を訪問するだけでなく、NGOなど他アクターの国際協力現場も訪問します。
- 本研修で考察する分野も教育だけに限定せず、環境、医療、ビジネスなど色々な方面からアプローチします。
- 海外研修ではホームステイプログラムを入れることにより、現地の方々と交流し普段の生活を実際に体験することが出来ます。そして、日本とは大きく異なる現地の方々の視点、考えも知ることが出来ます。
- 国際理解教育に関心のある、北陸3県(富山・石川・福井)の先生方のネットワークの場にもなります。

「国の発展」「国際協力」を様々な分野から、色んなアクターの視点から学ぶことが出来ます!!

≫ 応募資格

- 1) 北陸3県(富山・石川・福井)の国公立、私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員
(海外研修後、児童・生徒に国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員)
- 2) 原則として、応募締切り時点で年齢が満50歳以下の方
(年齢については考慮される場合がありますので、事前にご相談下さい)
- 3) 所属する学校の校長もしくは教頭(教育委員会であれば所属長)の推薦のある方
- 4) 過去に本研修、JICAボランティア、JICA専門家、ODA民間モニター等、JICAから海外に派遣された経験のない方

参加者一覧(順不同/敬称略)

NO.	氏名		学校名	担当教科 (担任学年)	県名
1	田中 美伎	タナカ ミキ	石川県加賀市立作見小学校	2年生	石川県
2	奥井 千里	オクイ チサト	富山県高岡市立能町小学校	1年生	富山県
3	小濱 瑤子	コハマ ヨウコ	石川県加賀市立動橋小学校	2年生	石川県
4	武原 義典	タケハラ ヨシノリ	石川県金沢市立中村町小学校	6年生	石川県
5	助田 清華	スケダ セイカ	石川県立金沢辰巳丘高等学校	英語・中国語 2・3年生	石川県
6	前田 昌寛	マエダ マサヒロ	石川県立金沢商業高等学校	英語 2年生	石川県
7	石尾 和彦	イシオ カズヒコ	石川県立金沢泉丘高等学校	地歴公民 1～3年生	石川県
8	倉 さくら	クラ サクラ	石川県白山市立東明小学校	特別支援学級	石川県
9	箸本 淳也	ハシモト ジュンヤ	石川県立盲学校	中学部・高等部	石川県
10	千徳 英介	セントク エイスケ	独立行政法人 国立高等専門学校機構 福井工業高等専門学校	機械工学科	福井県
11	金曾 涼子	カネソ リョウコ	石川県金沢市立森本小学校	6年生	石川県
12	瀧沢 浩一	タキザワ コウイチ	JICA北陸	課長	石川県
13	武田 さやか	タケタ サヤカ	JICA北陸	開発教育支援事業	石川県
14	船木 愛	フナキ アイ	JICA北陸	富山県推進員	富山県

1年間の流れ & 2017年度の研修日程

国内 事前研修

1回目 2017年6月17日(土)

2回目 2017年7月15日(土)

海外研修

2017年7月25日(火)

～2017年8月4日(金)

国内 事後研修

2017年8月26日(土)

実践授業

9月～12月

報告会

2018年2月24日(土)

海外研修に向けた準備

知識・渡航準備編

JICAが提示する研修のテーマを中心にODAやJICA、国際協力、海外研修の訪問先について学びます。

訪問国に派遣されていた元青年海外協力隊の経験談や過年度参加者との交流を通し、訪問する前に知っておくべきこと、準備が必要な内容を共有します。



途上国での実体験

実体験編

海外研修ではJICAの国際協力プロジェクト現場やNGO、青年海外協力隊の活動先などを訪問し、実際に働いている方々と意見交換を行います。訪問国の現状、途上国を取り巻く課題などを様々な視点から捉え、考察します。見学先は訪問国・研修年度によって変わります。



学校訪問の様子 訪問先の先生と

実践授業に向けた準備

経験整理と授業案作り編

海外研修を通じて考えたこと、学んだこと、感じたことを参加者間で振り返り、整理します。また、自分が立てた授業案をもとに、実践に向けて改善点などを意見交換しながら、児童・生徒に何をどう伝えるか考えます。授業に使える国際理解ワークショップも体験します。



ワークショップの様子

学校で体験・学びを還元

実践編

研修成果の還元として、収集したデータや資料などを使って、訪問国が抱える課題や国際協力、日本の役割について考える授業を9月から12月にかけて実施します。



現在までの学びを一般市民に向けて発表

成果報告編

「海外研修で何を学び、どう授業に生かしたのか」、「その授業を受けた児童・生徒が何を感何を感じ、どんな変化がみられたのか」「実践を通じてさらに何を考えたのか」など国内外での研修の成果を報告します。参集した方々の質問やコメントもさらに学びを深めます。

海外研修報告

≫ 研修国概要

フィジー共和国

Republic of Fiji



1970年に英国から独立したフィジーは、330の島や環礁からなる国土を有しています。人口の約6割が先住のフィジー系、約4割が英国統治時代に移住したインド系です。フィジーの主要産業は、観光、繊維および砂糖です。国土が広大な地域に散らばり、国内市場が小さく、国際市場から地理的に遠いなど、太平洋島しょ国に共通する開発上の困難を抱えています。また自然災害や海面上昇など気候変動の影響を受けやすく、様々な脆弱性を抱えています。これらの課題の克服がフィジーの社会・経済発展には不可欠であり、太平洋島しょ国の経済活動の中心的な役割を担っているフィジーの安定と発展は地域全体にとっても重要です。

基礎データ

- 面積 18,270平方キロメートル(四国とほぼ同じ)
- 人口 約89.2万人(2015年)
- 首都 スバ
- 民族 フィジー系(57%), インド系(38%)
- 言語 国語は英語, フィジー語, ヒンディー語
- 宗教 キリスト教, ヒンズー教, イスラム教
- 政体 共和制
- GNI 一人あたり4,800米ドル(2015年)
- 経済成長率 3.8%(2014年)
- 失業率 8.1%(2013年)
- * 特に注がない場合は外務省ホームページをもとに記載。

略史

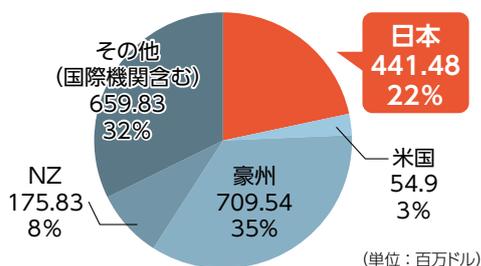
- 1643年 蘭人探検家タスマン、フィジー諸島の北部発見
- 1874年 英国植民地となる
- 1970年 英国より独立(立憲君主制)(国名:フィジー)
- 1987年 英連邦から離脱し、共和制へ移行
- 1990年 フィジー系を優遇する改正憲法発布
- 1997年 英連邦再度加入
- 1998年 民族融和を目指す新憲法発効(国名:フィジー諸島共和国)
- 2006年 バイニマラマ国軍司令官による無血クーデター
- 2007年 バイニマラマ司令官が暫定首相に就任
- 2011年 国名を「フィジー共和国」に変更
- 2013年 新憲法公布
- 2014年 総選挙によりバイニマラマ首相再任

援助実績

スキーム	額(累計) / 人数(延べ)
円借款	22.87億円 (2014年度までの累計)
無償資金協力	189.40億円 (2014年度までの累計)
技術協力	277.96億円 (2014年度までの累計)
青年海外協力隊	537人 (2016年7月までの延べ人数 2016年7月時点で24人)
シニア海外ボランティア	142人 (2016年7月までの延べ人数 2016年7月時点で10人)

フィジーへの援助総額は2014年度までに累計490.23億円

出典: ODA国別データブック2015
青年海外協力隊事務局統計(平成28年6月末)



フィジーへの主要ODA供与国(1972年~2014年累積) 出典: OECD/DAC

フィジーと日本の比較

	フィジー	フィジー ランキング	日本	日本 ランキング
平均寿命	69.9歳	113位 183ヶ国	83.7歳	1位 183ヶ国
1人当たり 名目GDP	US\$5,357	92位 191ヶ国	US\$38,883	22位 191ヶ国
人口1千人当たり 5才未満の死者数 (死亡率)	24人	108位 191ヶ国中	3人	3位 191ヶ国中
世界幸福度 (主観的な幸福度調査)	92ポイント	1位 55ヶ国中	54ポイント	18位 55ヶ国中

【データ出典】(データは同じベースで比較する為、同じ年度で比較しています)
◆平均寿命: WHO 世界保健統計 2016年版 ◆1人当たり名目GDP: IMF 2016年
◆人口1千人当たり5才未満の死者数(死亡率): 世界保健機関(WHO) 2013年
◆世界幸福度: 「世界幸福度調査 2018」
(米国の世論調査会社ギャラップ・インターナショナルとWINによる共同調査)

人的つながり

項目	人数
フィジーにおける 在留邦人数	464人 (2015年10月時点 外務省海外在留邦人数調査統計)
在日フィジー人数	209人 (2015年6月時点 法務省在留外国人統計)
フィジーから日本への 留学生数	41名以上 (2015年6月時点 法務省在留外国人統計)
日本からフィジーへの 観光客数	5,888人 (2014年 日本政府観光局)

2017年度 JICA 北陸 教師海外研修日程

日程			時間	項目
1	7/25	火	18:30	成田空港 出発
2	7/26	水	PM	ニュージーランド オークランド経由、フィジー ナンディ到着 ナンディから首都スバへバスで移動
3	7/27	木	AM	フィジー事務所訪問 ・フィジーの国概要講義 ・フィジーでのJICA事業概要紹介 ・安全対策ブリーフィング、ホームステイガイダンス ・フィジーでのスポーツ振興状況の説明
			PM	青年海外協力隊の活動内容紹介 職種:高齢者介護 活動先:福祉施設 低所得家庭の児童を支援する現地NGO(FENK FIJI)を訪問 上記NGOの運営者が代表を務めるセカンダリースクール訪問
4	7/28	金	AM	プライマリースクール 訪問
			PM	特別支援学校 訪問
5	7/29	土	終日	ホームステイ
6	7/30	日	終日	ホームステイ
7	7/31	月	AM	JICA技術協力 生活習慣病対策プロジェクト視察
			PM	レストランを展開する日系企業、 パシフィックインターナショナル株式会社 訪問 教育省 訪問
8	8/1	火	AM	スバからランバサ島へ飛行機で移動 ①青年海外協力隊 訪問 職種:医療機器 視察先:病院
			PM	②青年海外協力隊 訪問 職種:環境教育 視察先:職場、マーケット、 ごみ処理場 青年海外協力隊員との懇親会
9	8/2	水	AM	ランバサ島からスバへ飛行機で移動 フィジー事務所での成果発表会
			PM	南太平洋大学とフィジー博物館 見学 フィジー事務所スタッフとの懇談会
10	8/3	木	AM	首都スバからナンディ空港へ移動(バス)
			PM	ナンディからニュージーランドのオークランドへ移動 オークランドで一泊
11	8/4	金	AM	オークランドから日本へ移動(成田空港)

フィジーという国の概要

研修日	I日目 2017年7月27日
訪問先	JICA フィジー事務所

フィジー事務所の方々から、フィジー共和国の概要、途上国から中進国に移行していること、二つの民族が生活していること、発展と阻害要因、スポーツの振興状況について講義をして頂いた。そのあと、高齢者施設で青年海外協力隊として活躍されている竹内隊員から活動の様子を教えて頂いた。

フィジーには、インド系フィジー人と原住系フィジー人が生活しており、二つの民族には経済格差や権利の違いがあったり、インド系にはセーフティネットが少なかったりと様々な問題があると知った。インド系は、移住してきて、土地がないから稼ごうとするが、フィジー系はお金がなくても暮らしていけるから経済格差が生まれるという話に納得できた。二つの民族は、言語や宗教も異なるので、これからフィジーという国で研修をするにあたって、理解しておくべきことだと感じた。また、現在のフィジーの強い経済成長の背景に、阻害要因として民族間の異なる考えや都市と地方の生活格差、天災などへの脆弱性があることも分かった。観光業で発展している一方で、様々な課題を抱えていることが理解出来た。

竹内隊員の話から、日本人とフィジー人の働くことへの姿勢の違いについて考えた。現地の方々が必要と思ってくれないと、こちらから提示しても向き合ってもらえないのだということを感じた。竹内隊員が、協力隊として活動するきっかけが「日本とは違う笑顔の秘密を探すため」だと話していたことが、とても印象に残った。

記 田中 美伎 (加賀市立作見小学校)



(左上) 活動報告をしてくださった竹内隊員
(右下) 竹内隊員から活動報告の話を聞く参加教員

「Fenc Fiji」 とセカンダリースクールを訪問して

研修日 | 1日目 2017年7月27日

訪問先 NGO団体「Fenc Fiji」 / ナシヌーセカンダリースクール

午後は、NGO団体「Fenc Fiji」を視察した。「Fenc Fiji」は、虐待にあった子供や低所得の家庭の子供など様々な事情を持った子供の教育をサポートする施設である。そこは、子供達が宿題をすることができる場所、遊べる場所などがあり、子供達が安心して過ごせる環境だった。他にも、服が用意されていたり、遊び道具が置いてあったりするなど、子供一人一人を大切にしている工夫が施されていた。「Fenc Fiji」の所長は、国の発展のために支援のあり方を勉強しに日本を訪れたことがあると話していた。フィジーには、貧富の差があり、経済的に苦しんでいる子供がいることを知った。そのような子供を支援する場、温かい心をもった先生がいるということは、大切だと思った。同時に、そんな子供達のために自分自身ができることはないのかと強く思った。その後、「Fenc Fiji」の先生方が、私達のために食べ物や飲み物を用意してくれた。先生方との交流を通して、フィジーの人の温かい人柄に触れることができた。

その後、Fenc Fijiの運営者が代表を務めるナシヌーセカンダリースクールを訪問した。校長先生は、フィジーの教育制度の概要と学校の状態を説明してくれた。教室や寄宿舎を見せてもらった。図書室があったり、「DO NOT RUN」などの掲示がしてあったり、部活動があったりするなど日本の学校と似ている所もあり、驚いた。一番印象的だったのは、ある教室の机の上にあった貼り紙である。その貼り紙には、児童を励ますメッセージが書いてあった。素晴らしい支援のあり方だと感じた。日本とフィジーの学校の相違点に気付くことができ、もっとフィジーの教育制度を知りたいと深く思う機会となった。

記 奥井 千里 (高岡市立能町小学校)



Fenc Fiji]の概要を話す所長

日本の小学校とフィジーの小学校を比べてみて

研修日 2日目 2017年7月28日

訪問先 マハトマガンジーメモリアル プライマリースクール

インド系フィジー人、原住民系フィジー人という昔あった括りがなくなり、現在は「フィジアン」という言葉がフィジーの人達の総称となっている、という説明を事前に受けてからの小学校訪問となった。また、インド系の人達はインド系の学校、原住民系の人達は原住民系の学校へ行かなくてはならない、という括りもなくなったそうだ。

今回訪問した小学校はインド系の学校だったが、インド系の子どもも、原住民系の子どももいた。みんなが鬼ごっこをして仲良く遊んでいた。子どもたちは赤、青、黄色、緑いずれかの色Tシャツを着ていた。縦割りで活動するために分けているそうで、日本の学校と同じように縦割りの関係作りも大事にしていることが分かった。日本では人間関係などを考慮して縦割り班を作ることが多いが、この学校では、入学時に色が決められるそうである。これを聞いて、参加者全員が驚いた。集まったら、仲がよくも悪くも、コミュニケーションをとり、人間関係作りの場になるし、無作為に色が決められればそれはそれで面白いかもしれないと思った。

校長先生の話聞きながら、ミルクティーと軽食をいただいたあと、8年生(日本での中学2年生)のクラスに入って交流をした。まず、導入で、参加者メンバーの一人が弾くウクレレに合わせて「おおきなうた」を子ども達と一緒に歌った。ラジオ体操や、大きな活動として折り紙工作も行った。

中学2年生といえば、日本では反抗期を迎えている時期の子どもたちである。メンバーの中に中学校教員がいなかったこともあり、どの様に振る舞えばいいのか、受け入れてもらえるのか、とても不安で緊張した。導入担当のメンバーが「おおきなー」と歌を歌い始めたら、「おおきなー」と続けて歌い、みんなが楽しそうに参加してくれた。ラジオ体操も、見よう見まねで、声を掛け合いながらすることができた。みんなが歓迎の雰囲気迎え入れてくれて、フィジアンホスピタリティ(もてなし)に通じるものがあるのかなと感じた。子どもたちの目がとても輝いており、学ぶ楽しさを知っている、また、これから始まる活動を期待したわくわくした目だと感じた。この目を日本でも何度も見たいと、教師としての使命感を感じた。子どもたちの目が輝く授業を作っていかなければならないと改めて感じた。国境を越えても、私は子どもが大好きで、教えてあげたい、一緒に学びたいという気持ちは強く、変わらないのだと思った。

工作では、折り紙で紙飛行機を作るブース、手裏剣を作るブース、新聞で兜を作るブースに分かれて行った。みんな手先が器用で、初めての作業とは思えないほど、端と端を合わせて丁寧に折ることができていた。そこで、私が驚いたことが2つあった。1つ目は折り紙の手順を覚えることが早いことである。1度一緒に作ったら、今度は誰に頼るでもなく、一人で順を追って黙々と作っていた。

2つ目は観察力である。私は手裏剣を作るブースにいた。私と向かい合っていたのに、2つの異なるパーツをととても正確に作っていた。一度見せた折り方を左右上下反転させておることができ、またそれを友人に教える姿も見られた。それが学校教育で培った能力なのか、もともと持つ才能か、もしくは中学生の持つ器用さかは分からない。しかし、その観察力や記憶力をさらに伸ばし続け、その能力を将来何かに活かすことができれば、将来的にフィジーはもっと変わっていくかもしれない、と思った。今後の学校教育の重要性を感じた。

授業の後は、昼食の時間だった。給食はなく、お弁当を食べる子と食べない子がいた。持ってきたお弁当をのぞかせてもらうと、ポテトチップスが入っていたり、カップヌードルだったり、「昼食」といえるようなものではなかった。お弁当といっても色々な食材が入っていて、給食のように栄養バランスが取れているものではないことが分かった。また、グランドには、日本では当たり前前にグランドにある鉄棒や、ブランコはなく、ただ芝生が広がっているだけだった。私は日本でいう「こおりおに」の遊びに入れてもらい、広い芝生と一緒に遊んだ。給食がある、遊具があるという学校環境の当たり前が、当たり前であることの有難さを感じ、恵まれた環境で学校生活を過ごしているという感謝を子どもたちに伝えたいと思うと同時に、教師として自分を振り返り、考え、学ぶ機会となった。

記 小濱 瑤子 (加賀市立動橋小学校)



校庭で

愛情こそが何よりもの支援

研修日	2日目 2017年7月28日
訪問先	マリストシャンペンセカンダリースクール

フィジーにいくつかある、発達障害を持つ子どものためのセカンダリースクールに急遽訪問させてもらえることになった。フィジー系だけでなくインド系、その他の民族出身の子どもも在籍し、共に学び合っている学校である。驚くべきことにキリスト教系の学校で、職員の中には牧師さんやシスターがいた。学校に着くと校長先生が笑顔で出迎えてくれ、学校を案内してくれた。1クラスに約20人の子どもがおり、その状態に合わせて3つのグループに分け、それぞれに先生がついて教える3人制での教育を行っていた。医療機関などで発達障害の診断を得ることができないこともあるフィジーにおいて、この学校では入学時にきちんとアセスメントを受けた上でレベル別にクラス分けし、個に応じた教育を行っている。フィジーの中でも特別支援教育の進んでいる場所だと感じた。一方で日本の就学時検診のように知的や情緒面でのアセスメントを多くの子に実施することがさらなる特別支援教育の発達につながるのではないかと思った。

子どもたちは試験が終わり、スポーツやダンスに取り組んでいる真っ最中であった。特にダンスは次の大会に向けて練習に熱が入っており、すごい盛り上がりで、色んなジャンルのテクニカルなダンスを見ることができた。ダンスやスポーツは子どもたちにとって最高の楽しみであり、男女共通して取り組める目標であることが分かった。セカンダリースクールで居場所を失い、すがる思いでこの学校にやってきた彼ら、彼女らにとって温かく迎えてくれる教員や、仲間と共に協力して取り組める目標は生きがいであり、希望であると感じ

た。関わりの難しい子どもたちなので、一緒に遊ぶことや積極的に関わることは控えなければならなかったが、一緒に歌い、ラジオ体操を踊る機会を得ることができた。安心できる居場所があれば子どもはのびのびと活動することができるというのは国を問わず大切なのだ。問題はどのように居場所を作るかである。

交流後に先生たちに質問し、意見を交流した。話の節々からこの学校の先生たちがいかに子どもたちを愛し、個々へ愛情を注いでいるのを感じることができた。「今までできなかったこんなことができるようになった」「こんなかわいいことがあって」「私の服をほめてくれて」など、子どもたちの様子を話す先生はとても楽しそうであった。ここの子どもたちがとても素直で良いところをいっぱい持っており、その良さをきちんと評価し愛情を注いでいると感じた。そういう子たちが自分ではどうすることもできない障害によって居場所を失うことがあってはならない。それは日本でも同じことがいえると思う。私が担任してきた学級の中にも、診断はなくとも特別に支援を要する子はたくさんいた。ある意味では全員の子どもたちがそれぞれに苦手なものを抱え、それぞれに必要な支援を要しているようにさえ思う。全員に個々の対応・支援が必要で、それだけ教師は個々の特性を理解しなくてはならない。この学校の子どもたちは学校が好きだと話していた。シスターは「子どもに対する愛情が一番大切で、一人一人のことを愛してほしい。そうすれば学校に来たくないと思う子はいなくなると思う。」と話してくれた。この学校のような学校がフィジーや日本でもっと増えたらいいと思う。そして、ここで学んだことは日本に足りていない個々への愛情だと学ぶことができた。私たちが日本の教員はもっと個々への手立てや働きかけをしなければならないと感じた。

記 武原 義典（金沢市立中村町小学校）



歌う先生方

絆が深まった二日間

研修日	3～4日目 2017年7月29日～2017年7月30日
訪問先	ビチレブ島 ワイブー村

【概要】

- ・ワイブー村でホームステイ体験。週末に亘って村人の生活等を体験。

【学んだこと】

- ・村人の考え方、生活習慣、食事の内容や作り方、食事の仕方等。
- ・ライフスタイルや家族の付き合い方等も学んだ。

【活動】

- ・村の入り口で青年男子何人かに迎えられて、盛大な歓迎セレモニーが始まった。初対面なのにお互い笑顔で挨拶し、自己紹介を交えながらカバと呼ばれるフィジー独自の飲み物を飲み、踊りを教わった。その後、各自のホームステイ先で家族と過ごした。
- ・村から町までバスで1時間かかる。タロ芋、ココナッツ料理以外の食料品を町から調達していた。村には、売店がいくつかあり、魚、ビスケット、飴、煙草等日用品が売られていた。
- ・コンパクトな家屋には、水洗トイレが付いている家もある。大家族で大きい一区切りの家に住んでいるが、それぞれの居場所があり、それぞれ家庭での役割を果たしている。満足しているように見える。
- ・日曜日は教会に出かけ、牧師の情熱のこもったスピーチを村人が静かに聞いていた。毎週行われる一大行事にアイロンをかけた正装で出席していた。お別れの際に、ホームステイ先の全家族が勢ぞろいして村の入り口で見送りをしてくれた。村長の温かい見守りの中、名残惜しい涙とまた再会する約束の中、笑顔で別れた。

記 助田 清華 (石川県立金沢辰巳丘高等学校)



- (左上)主食として食べているタロ芋。
(右上)研修メンバーが日本料理を作る。
(左下)コンパクトな家屋。
(右下)別れの笑顔。

フィジー生活習慣病対策プロジェクト

研修日 5日目 2017年7月31日

訪問先 スバのマーケット

フィジー生活習慣病対策プロジェクト(NCDプロジェクト)として任務にあたっている、ヘルスプロモーション専門家・栄養管理士の入江由紀氏より話を伺った。入江氏によると、フィジー人の死因の80%がNCD(Non-Communicable Disease:非感染症)であり、フィジー人の3人に1人が糖尿病であるという。入江氏は動機付け支援として「減量キャンペーン」を行い、面接カウンセリングや電話指導、ズンバ教室、徒歩計による活動量モニターなどを通し、フィジー人に「なぜ太り過ぎは良くないのか」「NCDにかかるるとどんな負担になるのか」を指導している。今回この研修に参加した私たちも、実際に身体計測を行い、身長・体重・血圧を測り、BMI(体重kg÷身長m÷身長m)を算出してみた。その後、フィジーの食文化を見るために市場へ向かった。市場にいる売り手の皆さんはとても明るく、食べ物は果物や野菜類を中心にとても豊富だった。このNCDプロジェクトのお話を通して、実際に身体測定をして自分の目で数値を確かめたり、市場に出向いてフィジーの食文化を肌で感じるたりすることの大切さを学んだ。というのも、フィジー人の多くの人が太っていたり、食事も食べ物のサイズが大きく量が多かったりするのだが、太り過ぎや運動不足の危険性を頭では分かっているにもかかわらず、どこかで他人事と思う傾向があるそうだ。入江氏のプロジェクトでは、自分のこととして実感してもらえるよう、理論的な指導だけではなく、相手の生活や現状に寄り添い肌で感じられる活動を行っていることが分かった。

記 前田 昌寛 (石川県立金沢商業高等学校)



(左上)とても明るくフレンドリーな市場の皆さん
(右上)市場に並ぶ豊富な食材
(左下)血圧測定を行う教員たち
(右下)入江さん指導のもと身体計測を行う

教育行政から見るフィジー教育の現状

研修日 5日目 2017年7月31日

訪問先 教育省

【概要】

・ 教育省の初等教育の責任者であるヘム・チャンド氏から約30分間フィジーの教育行政全般に関する話を聞くことができた。オフィスが狭いため、代表4人のみの訪問となった。

【学んだこと】

・ この部署では、毎日の教職員の出勤状況の把握から、人事異動、評価といった業務、さらには、共通のカリキュラムに基いたテストの作成まで行っている。フィジー全体の幼稚園・小学校の数や生徒数・教員数などの概況を教えてもらった。

【考察】

・ 質疑応答を通して、何がフィジーにおける教育の強みであるかを問うたところ、初等教育が無料であることと話していた。13歳までは教科書までが無償(制服や食事は対象外)である点は、日本と同様である。その一方で、教育における問題点を問うたところ、「何も無い。優れている。」と自信をもった回答が返ってきたが、この答えをどう受け止めるべきか戸惑ってしまう。教育行政の担当者として、対外的に自らの仕事の成果を強調しているものなのか、あるいは、本気で問題点がないと分析しているのか。後者である場合、見方を変えれば、課題意識の欠如ともとることができる。自己肯定感が高く、現状を肯定的にとらえる傾向が強いフィジー人の生き方は、幸福感を高める点で見習うべき面がある一方で、課題を分析し、より良いものに改善・発展させていくということにつながらない可能性を持っている。このはざままで、私たち日本人はどうあるべきなのか、ということを考えるきっかけになった。

記 石尾 和彦 (石川県立金沢泉丘高校)

フィジーで「和の心」を伝える

研修日 5日目 2017年7月31日

訪問先 大黒レストラン 林様

フィジーやニュージーランドなど大洋州で日本食レストランを運営されている林さんに講義していただいた。林さんは、18年間で1000人以上の従業員を指導してこられた。前日まで、学校訪問やホームステイなど、フィジーの人々の温かさに触れ合った。けれど、フィジー人を雇って日本食レストランを運営するというビジネスの側面から同じ国民性を見直すと、逆にそれが困難さを生みだすことが分かり、衝撃を受けた。林さんの講義で印象に残った言葉が2つある。

一つ目は、「何が問題かを考えましょう。」という言葉である。林さんは、日本のおもてなしの心を伝えるために、フィジーの人たちに根気強く指導されていた。接客のマナーを分かりやすいイラストで示したものの、決まりを箇条書きにしたものなど、様々な方法を使って、指導に取り組んでおられた。「魚をあげるのではなく、魚の取り方、魚の多くいる場所の見つけ方を教えている。」と言われていたように、従業員の今後を考えた育成方針は、まるで職業訓練校のようだと感じた。指導内容は、学校教育に共通する点が多くあり、相手にとって新しいことを0から教える難しさを感じた。

二つ目は、「日本人にしかできないことをしたい。」という言葉だ。林さんは、日本人の強みは「和の心」、話合って一致点や相違点を見つけていき、妥協して解決策を見つけていくことだと話されていた。文化や生活、多くの点が異なる人と仕事をするには、精神的に厳しい。自分の譲れない価値観を持つことも大切である。でも、それを一方的に押し付けるのではなく、お互いに納得できるまで話をするのが理想であると感じた。

その日の昼食にいただいた大黒レストランのお弁当はとても美味しく、接客もとても気持ちのいいものだった。20年働かれているインド系の方がお弁当を作ったと聞いたときには驚いた。林さんが積み上げた成果は着実にできていると感じた。林さんは、従業員も日本食の材料も十分ではない厳しいフィジーの環境で、世界に通用する人材を育てるために、信念を持って働かれていた。長年働かれてきた苦労は、私には計り知

れないものである。フィジーで、フィジーの人と共に仕事を続けていくためには、多くある現状の課題を見極めて、その中から優先的な課題を解決しながら成長していくことが大切である。

記 倉 さくら (白山市立東明小学校)



(左上)「仏」のような林さん
(左下)フィジー人シェフによる美味しいお弁当
(右下)丁寧な接客

坂口隊員の活動とフィジーの医療現場

研修日 6日目 2017年8月1日

訪問先 ランバサ病院

バヌアレブ島の中心都市ランバサにあるランバサ病院を訪問した。ランバサ病院はこの島にある3つの病院の1つである。ここでは、バイオメディカルエンジニアリング部門に所属する坂口涼子隊員(医療機器)の活動の様子を視察した。さらに病院のマネジャーより、病院について説明を受けた後、病院内を見学した。

坂口隊員が所属する部署は、病院内だけでなく、近隣の島々の医療施設の医療機器の保守と修理を担っていた。部署の説明から、メーカーの直接的なサポートを受けられないために医療機器を自分たちで修理しなくてはならないことや、保守部品を手に入れる際も送料を節約するためにまとまった注引量になるまで発注できず半年~1年先まで届かないことや、島では壊れた機器をゴミとして処理ができないことなど、フィジーという国の地理的な問題が垣間見えた。

また、ここでは機器の保守部品や消耗品などが多く保管されているが、坂口隊員が来た当初は、棚の整理整頓がなされておらず、どこに何があるのか全く分からない状態だったため、棚の整理や棚へのラベリングなどに取り組んで在庫管理の効率化を行ったそうだ。さらに日本の「5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)」活動を取り入れて、掲示板に5S活動のポスターを貼るなど、現地のスタッフにも伝える活動をしていた。この活動も、最初はなかなか伝わらなかったが、粘り強く伝えることで、現地スタッフからも5Sという言葉が聞こえるようになったようだ。

病院のマネジャーは、フィジーは薬や入院が無料になるなど医療面ではかなり手厚い保障を行っている一方で、大学が少なく年間に50~60人程度しか医師になる人がいないために医師などの人的リソースと資金の不足がフィジーの医療面での課題であるとお話されていた。

病院の見学では、歯科や糖尿病のための棟などを周ったが、全体的に古い設備が多いように見えた。しかし見学中に見かけた病院スタッフ、患者などにはどこか明るい雰囲気漂っているのが印象的だった。

記 千徳 英介 (福井工業高等専門学校)



- (左上) 5S活動ポスター
- (右上) ラベリングされた棚
- (左下) ランバサ病院ツアー
- (右下) 坂口さんとスタッフと一緒に

高野隊員からフィジーの環境教育を学ぶ

研修日 6日目 2017年08月1日

訪問先 ランバサ マーケット / ゴミ処理場

青年海外協力隊としてランバサで活動をする高野勝郎隊員の話から、フィジーの環境問題の現状や課題を知ることができた。

視察を通し、高野隊員が近くのマーケットの人との関わりの中でゴミの分別を呼びかけたり、ポスターを掲示してもらったりと地域に密着しながら活動を進めていることが分かった。マーケットの通りには2、3mおきに緑と赤のゴミ箱が設置されており、緑が生ゴミ、赤がその他のゴミを入れるようになっている。始めは、現地の人々に対して分別の大切さやごみ処理に関する思いが中々伝わらず辛く苦しい時期もあったそうだ。時には、高野隊員が一人でトングと手袋を持ち、ゴミ箱一つ一つを回りながら分別をしていた時期もあったと聞いた。そのような中で、高野隊員はマーケットの現状を把握したり現地の人に何が必要であるかを考えたりすることで、自分の存在意義を見出し、活動を続けてきた。他にも、近隣の学校に向かい環境教育出前授業を行い、リユースやリサイクルについて広める活動も行っている。『いなくてもよかった存在である自分はここで何ができるのか』高野隊員の言った言葉はこれまで自分達がフィジーに到着してから行ってきたことを振り返らせる大きなきっかけとなった。

ゴミ処理の方法は埋め立てが主であり、1日に20回以上、収集トラックが埋め立て場にゴミを運ぶ。生ゴミはコンポストで肥料にし、古紙はリサイクルしティッシュにする。その他のものはプラスチックバックや電子機器も全て埋め立てることが分かった。ちょうどこの日が新年度ということで、買い物時のプラスチックバックが有料になった日でもあった。フィジーの人々の環境問題に対する考えを知ることができた一日となった。

記 金曾 涼子 (森本小学校)



(左上) 赤と緑のゴミ箱について説明する高野隊員
(中上) タイヤのリユース
(右上) マーケットの人と仲良し
(左下) 高野隊員と
(右下) 1日に20回以上トラックがごみを捨てに来る

現地研修報告会

研修日 7日目 2017年8月2日

訪問先 JICA フィジー事務所

JICAフィジー事務所にて、参加教員が現地研修の成果を2チームに分かれて発表しました。フィジー事務所からは、所長、次長をはじめ今回の教師海外研修にご尽力下さった方々に参加頂きました。

1チーム目は、「HAPPY」をキーワードとし、研修中に体感した多種多様な“フィジーの幸せ”を発表しました。フィジーの方々の考え方や社会の状況、生活の様子を知るうちに、“本当の幸せとは何か”と考えるようになり、日本の経験や知識、物資を共有することで、フィジーの方々に“もっとHAPPYになってもらいたい”という思いが大切なのではないかと問いかける内容でした。

2チーム目は、「心の揺らぎ」をキーワードとし、心踊る体験だけでなく今まで持っていた価値観が揺さぶられる経験から生まれた気づきや葛藤について発表しました。ホームステイ時に大きく心を揺さぶられた出来事を具体例として、“自分達は日本人として一体何が出来るのか”“国の発展とはどういうことなのか”“国や民族それぞれの幸せや考えがあること”など非常に短い期間での体験ではあったものの深く考察したことを参加者全員と共有しました。チーム内で「心の揺らぎ」について話し合い、葛藤し、真摯に向き合ったことが伺えた内容でした。

「JICA」の“C”はCooperationを表していますが、CO【共に】OPERATION【活動する】という語源があり、JICAはAssistance(援助)ではなく、Cooperation(共に活動する)という思いを持って、世界中で活動をしています。2チームの発表を受けて、榎水尾次長より、Cooperationの真意に近づく教師海外研修になったのではないかと、との印象的な講評を頂きました。

記 船木 愛 (JICA北陸 富山デスク)



(左上)「心の揺らぎ」について発表する参加者
(右上)魅力的なイラストを使っでの発表
(左下)1チーム目の発表
(右下)2チーム目の発表

博物館でフィジーの歴史と文化を堪能!

研修日 7日目 2017年8月2日

訪問先 フィジー博物館

【概要】

・ 閉館間際の時間帯でしたが、サーストン庭園(Thurston Garden)の東寄りにあるフィジー博物館を見学することが出来ました。閉館時間を超過しながらも、ギャラリーアテンダントさんの丁寧な説明を受けながら、館内を回りました。受付を通ると、模型とは言え、迫力のあるDrua (Fijian canoe)が出迎えてくれました。建物の中を進むと、フィジーの先住民の生活用品から動物昆虫の標本、新旧の武器、新興宗教の資料、双胴船などフィジーの歴史や文化を伝える実物や写真、資料などが展示されていました。ヨーロッパ人が到着する以前の「先史」時代からのフィジーの歴史と生活の様子を学ぶことができました。

【学んだこと】

・ 一番の驚きは、フィジーの歴史の中でカニバリズムの時代があったことです。フィジーでは、19世紀前半まで部族がお互いに血で血を洗い流す戦の世界が存在していました。明るく、フレンドリーなフィジーの人たちの暗い過去を知ることができました。人を食べる時に使用したフォークの実物が展示され、土産物屋にインテリア用として沢山売られていました。また、鯨の歯は、かつて部落の酋長たちが首飾りにしていたもので、今でも宝のように扱う人もいるということを知りました。フィジーの文化において、鯨の歯は重要視され、結婚式、葬式の他、酋長の間でのいさかいを収めたりする際にも、人々の間で交換された貴重なものでした。

【考察】

・ コミュニケーションの中で、「相手を理解し、受け入れる」ことは、言葉と同じように大切なことです。今回、フィジーの歴史や文化を学ぶことで、より深くフィジーという国を理解し、コミュニケーションを図ることができたと思います。

記 箸本 淳也 (石川県立盲学校)



(左上) Drua, Domodomo (マストヘッド)の前で、ギャラリーアテンダントさんと記念撮影。

(右上) 重い…。Steering Oarsは動きませんでした。

(左下) 19世紀前半まで、部族間の戦いが続いていました。

(中下) 貴重な鯨の歯の装飾品が数多く展示されていました。

(右下) 船は、貝殻で細かい装飾が施されていました。

実践授業報告

フィジーの現状から考える『援助』のあり方

氏名	石尾 和彦	学校名	石川県立金沢泉丘高等学校		
担当教科	地理・歴史科	実践教科	総合的な学習の時間		
時間数	3	対象学年	2年	人数	22名

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標：国際協力の意義とあり方を考える

フィジーでの視察報告を通して異文化理解を深めるとともに、先進国日本が途上国に対して行う「援助」が、どうあるべきなのかを多面的に考え、答えのない問題に最適解を見出そうとするグローバルリーダーとしての必要な資質を養う。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	考察課題に対して関心を持ち、主体的に議論に参加している
(イ) 思考・判断・表現	多面的に課題を捉え、自分の言葉で表現できる
(ウ) 技能	提示されたデータから読み取るべきことを抽出できる
(エ) 知識・理解	様々な情報を統合し、テーマについて理解を深めることができる。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

本校生徒のうち対象となるSGコースは、課題研究や様々な研修プログラムを通して、グローバル課題に関心が高い生徒が多い。また、ディスカッションなどお互いの考えを表現することにも慣れており、積極的に取り組む傾向がある。その一方で、深い洞察や多面的な視点から物事をとらえる力については、開発を進める余地がある。

教材は、今回の海外研修で収集した情報や写真をもとに作成した資料であり、自らの研修テーマにもとづいて提示資料やワークシートを編集した。

授業にあたり、単なるフィジーでの体験報告といった異文化理解を主としたものではなく、あくまでもフィジーを入り口として途上国に対する援助のあり方やその必要性にまで考察を深めさせたいと考えた。授業者が伝達することよりも生徒同士の議論によって、多面的な視点から課題にアプローチすることで、問題の本質に気づき自らの意見を形成していく機会にできると考えている。

04 | 展開計画（全3時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	フィジーの現状から考える「援助」のあり方を議論の中から考察する (1) フィジーの概要と課題	フィジーの概要を各種データをもとに紹介したうえで、教師海外研修での体験報告を通して現状を理解する。また、フィジーの抱える課題とそれに対する援助のあり方についてグループで議論し、考察する。	1. パワーポイント 2. ワークシート

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
2 本時	フィジーの現状から考える「援助」のあり方を議論の中から考察する (2)途上国への援助のあり方	4人グループをもち、ディスカッションを通して、検討課題に対して考察する。検討課題は、「幸福の条件とは何か?」「先進国日本の行うべき援助とは?」「なぜ援助が必要なのか?」といったテーマであり、国際協力の意義やあり方について多面的に考える。	1. パワーポイント 2. ワークシート
3	ふりかえりとアンケート	授業を通してのふりかえりをワークシートに記入。意識の変容等についてアンケートに回答。	ワークシート アンケート用紙

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (15分)	1. 本時の学習内容の説明 2. グループ分け 3. フィジーの概要説明 ・位置(地図)・イメージ ・言語・民族・産業	<ul style="list-style-type: none"> EXCEL で作成したルーレットを使用し、ディスカッショングループを抽選で決定 質問を通して生徒がすでに持っている知識から推測させる。 	1. パワーポイント 2. ワークシート
展開1 (15分)	4. 途上国フィジーの課題と必要な援助とは(ディスカッション) 5. 途上国の分類	<ul style="list-style-type: none"> ここまでの少ない情報をもとに、グループで推測させ、出た意見を全体で共有する。この場合、途上国に関するステレオタイプもあえて容認し、答えを修正しないでおく。 途上国にも大きなレンジがあり、それぞれの課題や必要とする援助が違うことを説明。加えてフィジーが「中進国」であることも確認。 	
展開2 (20分)	6. フィジーの視察報告	<ul style="list-style-type: none"> 体験的に得た情報を写真とともに整理して伝え、肯定的側面を中心に紹介。 	
展開3 (15分)	7. 幸福についての考察(ディスカッション)	<ul style="list-style-type: none"> 2つの幸福度ランキングやフィジーの客観的データを提示した上で、幸福の条件、その功罪についてグループで議論し、全体で共有。 	
展開4 (20分)	8. 先進国日本の行うべき援助についての考察(ディスカッション) 9. 1枚の写真(ごみの写真)から援助について考察	<ul style="list-style-type: none"> 現在発展中のフィジーに対して日本が行う援助のあり方はどのようなものかをグループで議論し、全体で共有。あえて対立する意見を拾い、問題提起を行う。 村に捨てられたお土産のごみの写真から、援助のもつ危険性について考えさせる。 	

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
展開5 (15分)	10. 日本が援助を行う理由についての考察(ディスカッション)	・なぜ援助をする必要があるのかをグループで議論、全体で共有。 ・その後、日本の人口減少社会についてのデータから、日本が将来援助される側となる可能性をもつことを指摘。援助が国際社会での共生のために必要なことに気づかせる。	1. パワーポイント 2. ワークシート
まとめ (5分)	11. ふりかえり	・この授業を通して、学んだことや考えたことを、次回ワークシートにまとめることを予告。	

▶▶ 授業実践の様子

教材1 パワーポイント (一部抜粋)

途上国フィジーに必要な援助とは？

- ・どんな「課題」を抱えていて、どんな「援助」が必要なのだろうか？

グループで推測(7分)
全体でシェア(10分)

フィジーで見た現状

首都スバ
意外と都会

古き良き日本の原風景

フィジーで見た現状

WAIVOU村

古き良き日本の原風景

フィジーで見た現状

ホームステイ中の食事風景

古き良き日本の原風景

フィジーで見た現状

- ・笑顔があふれ、フレンドリーな人たち Bula Vinaka!
- ・首都の町は日本と同じように発展
- ・村で見たのは古き良き日本の原風景

人のつながり
「共有」の文化「ケレケレ」
伝統と慣習

世界一幸せな国

世界幸福度ランキング2017			世界幸福度ランキング2017		
順位	国	幸福度	順位	国	幸福度
1	フィジー	89%	2位	ノルウェー	7.537
2	中国	79%	10位	デンマーク	7.522
3	フィンランド	79%	14位	アイスランド	7.504
4	ベトナム	77%	5位	スイス	7.494
5	インドネシア	77%	12位	フィンランド	7.469
25	日本	55%	28位	日本	5.920

調査対象国46か国 各国内1,000人にアンケート調査
調査方法: 自分が幸せと思うかを5段階で
(1)とても幸せ (2)幸せ
(3)幸せでもない (4)不幸でもない (5)とても不幸
経済幸福度(1) (2) (3) (4) (5)
スイス「WIN/Gallup International」調べ

調査対象国155か国
ギャロップ社のアンケート調査をもとに統計分析
調査方法: 以下の項目をポイント化
①「幸せ」はGDP「社会的支援」
②「健康な平均寿命」
③「人生の満足度」(他)「他」の平等性
④「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑤「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑥「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑦「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑧「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑨「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑩「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑪「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑫「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑬「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑭「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑮「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑯「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑰「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑱「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑲「人生の満足度」(他)「他」の平等性
⑳「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉑「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉒「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉓「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉔「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉕「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉖「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉗「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉘「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉙「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉚「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉛「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉜「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉝「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉞「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㉟「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊱「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊲「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊳「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊴「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊵「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊶「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊷「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊸「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊹「人生の満足度」(他)「他」の平等性
㊺「人生の満足度」(他)「他」の平等性

考えてみよう

「幸福」とは何か？ 幸福の条件は？
なぜ、フィジーの人たちは「幸福」と感じるのか？ 幸福度第1位はいいこと？

グループで議論(7分) 全体でシェア(10分)

肯定: 足るを知る。恵まれていることに感謝する。
・人とのつながり、共有の文化
・「テクトー」を許容

否定: 現状に満足しては進歩がない(問題意識の欠如)
・経済的豊かさが必要
・より良い社会を創造する努力

フィジーの現状

フィジーは、かつての日本

かつての日本: 地方(農村) → 都市
今のフィジー: 地方(農村) → 都市
今の日本: 地方(農村) → 都市

発展

考えてみよう

先進国として、日本にできることは何か？
何をすべきか？

グループで議論(7分)
全体でシェア(10分)

日本の行くべき援助とは

ホームステイをした村で・・・
喜ばれる日本のお土産

翌日、村には日本のゴミが・・・

日本が、「援助」をするのは何故なのか？

人口大激減時代の到来

内閣府HPより

すでに人口減少が始まる(経済手厚と違って、人口予測は極めて精度が高い)

日本が、「援助」をするのは何故なのか？

日本はいつまでも「先進国」であり続けるわけではない。
「立場」を変えてみる発想

グローバル・リーダーに求められるものは？

授業の様子



【写真1】
全体へ問いを投げかける中で、
頭と心を揺さぶる



【写真2】
グループでの対話の中で、
自らの考えにも気づく



【写真3】
全体での共有を通して、
視野を広げ深める

06 | 本時の振り返り

2時間連続の特別授業として行ったが、盛りだくさんの内容にもかかわらず、生徒は前向きに取り組み、問いに対して期待した以上に深く考察してくれたようである。南の楽園というだけのフィジーのイメージは予想通りであったが、そこから中進国として発展し続けている現状を理解させ、それ故に先進国日本が抱えているのと同じ問題に直面し始めていることを伝えた。その上で、日本の行い得る援助のあり方を考察させた結果、教師海外研修に参加した私たちと同じ気づきや洞察に至ったことは、ねらいが達成できた点といえる。数多いディスカッションの中で、多面的な視点からの意見が交わされていたが、それが対話を通してどんどん深い学びに発展していったのを実感することができた。例えば、フィジーの豊かな自然を保護し、開発を抑えておくべきであるという意見に対して、それは先進国のエゴであり、発展し経済的に豊かになる権利は保障されなければならないのではないかという反論が生まれ、さらに課題先進国としての知見を日本が持っているのであり、その失敗を生かした援助をすべきであるといった弁証法的な議論が展開されていったのは、その実例である。

ただ、特別授業として、この2時間しか確保できなかったため、多くの考察課題を盛り込まざるを得なかったことで、ややあわただしい展開となってしまったことは否めない。

07 | 単元を通じた児童生徒の反応 / 変化

授業のふりかえりのワークシートから読み取れる、今回の授業を通して生徒が気づいたり考えたりしたことは、次の3点であったといえる。

第1に、途上国や異文化に対する自分の偏見やステレオタイプに気づいたこと。

第2に、自らの発想や視点が、無意識のうちに日本の立場から見たものになっていて、相手の立場に立っていないことに気づいたこと。

第3に、そうした自らのバイアスを認識した上で、改めて「援助」のあるべき姿について考察しようとしたことである。

1点目の、途上国や異文化に対する自分の偏見やステレオタイプについては、あえて最初にほとんど情報を与えない段階で、生徒が持っているであろうイメージを前提として、途上国フィジーの課題と具体的な援助について考えさせた。その上で、私自身の実体験を通じた現状を伝えていく中で、その思い込みに気づき修正させていくというプロセスを経た。以下、生徒の感想の一部を紹介する。

◇今回の授業を通して、今まで自分がどれほどのステレオタイプや偏見に縛られて世界を見ていたのかが分かった。冒頭でフィジーが中進国であると知り、(首都の写真を見て)意外にも都会的であったことにまず驚いた。

◇私は、今回の授業を受ける前、フィジーに対しては「リゾート地」以外のイメージは特になかった。しかし、授業の中でフィジーはかつての日本のように都市が拡大し、急成長し始めてきており、将来的に今の日本と同

じような問題を抱えることも考えられると知り、一気に身近な存在として感じられた。

◇今までのフィジーに対して抱いていたイメージが大きく変わった。元々は南国の貧しい国だと思っていたが、現状は、固定観念のままではいけないことを感じた。

授業の前半に、生徒の中にあるフィジーに対するイメージがフィジーの一面でしかなく、データや現地での写真を通して途上国の中でも中進国として発展してきていることを新たに知る機会を提供したことで、生徒にとって学びの準備が整えられたようである。今回の授業では、いかに“当たり前”を改めて考え直すことができるかが、多面的で深い学びに導くことのカギであると考えていたため、その準備として成功であったと思う。

2点目として、知らず知らずのうちに自分の意見や発想が、日本のみの視点や傲慢な視点になっていることに気づいたということが挙げられる。やむを得ないことではあるが、どうしても私たちは自分の立ち位置から物事を見ていることを忘れがちである。異なった視点や立場があることに気づかせることが、多面的に物事を考える上では絶対に必要なことであり、自らの思考のフレームに気づかせるために、あえて「先進国」日本が途上国フィジーにどのような支援ができるのか、すべきなのか」という問いかけをした。

◇私は、幸福が人ととのつながりと大きく関係しているのではないかと思いました。フィジーの村のような皆で支えあうコミュニティーが日本にもあったらいいなと感じました。…私は、フィジーはあまり発展してほしくないと思っていたけれど、それは日本で豊かな生活をしているから言えることだと指摘されて、自分が自分のことしか考えていないことに気づかされました。

◇今回の話を聞いて、いろいろなことを考えさせられました。私は初めフィジーに援助をすることでフィジーが今の日本のように発展してしまうことに反対でした。仮に世界中のどこの国も先進国のように発展してしまうと残すべき個々の文化の多様性が失われ、同じようなところばかりになってしまうと考えたからです。しかし、(議論の中で)“フィジーの国民が日本のように発展したいというのなら、先進国のエゴでそれを止めるのはおかしい”という意見を聞いて、ハッとしました。

これらの感想は、日本がフィジーに対してどのような援助をすべきなのかを考える過程の中で行われた議論で生まれたものである。対話を通して、自分の意見や思考の立ち位置に気づき、それを相対化する中で、改めて自らの意見を考察し、再構築するということを生徒は学んでくれたと感じる。

3点目として、これら自分自身の思考のメタ認知の上に、援助や発展について、そのあるべき姿を多面的に模索したことである。すでにこの段階では生徒は、グループでの対話、そして自らとの対話を通して、自らの思い込みや思考を検証しながら、弁証法的に最適解を見出そうとしている様子が見えてくる。

◇今回の授業を通して考えたことは、途上国は先進国のように発展することが本当に良いのだろうか、ということ。…歴史上にも、先進国の意向で無理やり伝統的な暮らし方を奪われ、世界中のどこにでも見られる風景になってしまったという国も多いはず。国民は少なくとも幸せを感じている以上、幸福と発展のバランスは難しいと思いました。

この意見からは、私たち先進国が、発展とひきかえに失ってしまったものや生じた問題を踏まえて、発展そのものに懐疑的な検討を試みた思考の跡が読み取れる。

◇そもそも援助を必要としているのか、そしてもし援助が必要であるならば、どういうことが必要なのかを現地の人と十分に話し合うことが大切だと思いました。そして、その話し合いや自分の目で現地の様子を見ることは、援助が、する側のエゴや押し付けの親切ではなく、現地の人々の幸せにつながる第一歩になるのではないかと思います。また、目の前のことを改善しようとするのも大切だが、それが未来に生きる人々にとってどのような影響を及ぼすのかを考えていく必要があると思いました。

この意見の中には、援助の質について、机上の空論ではなく現地でそのあり方を探る必要性が語られており、援助をする側とされる側の二つの乖離のリスクを感じ取っていることが伺えるとともに、長期的な時間軸で問題を捉えようとする姿勢も見いだせる。

◇日本から持って行った包装が道に捨てられ、新たなゴミを生み出してしまったと聞いて、自分たちが良かれと思ってしたことが実際はマイナスの影響を与えてしまうことがあると分かった。他国を援助するときは、そうした危険性を考慮しつつ、本当に必要な援助とは何なのかを見極める必要があると感じた。また、途上国の発展の過程で世界の環境に悪影響を与えてしまうので、先進国が適切な援助をすべきだという視点は自分の中になく、納得させられた。

今回訪れた村で渡したお土産の包装紙等がゴミとなって村に捨てられている写真で、援助のあり方について

問題提起を行ったが、全体への問いかけの中からは、引き出したかった答えは出てこなかった。“このゴミの写真から、どんなことを考えるか”というオープンな発問であったこともあり、“マナーが浸透していないのではないか”“土に還らないゴミがなかったため、そのまま捨てる習慣が残っているのではないか”といった回答までが精一杯であり、現地を理解した上での援助のあり方を考えることまで生徒たちだけで答えを導き出すことはできなかった。しかしながら、振り返りの中で、その指摘はしっかりと伝わっていることが読みとれる。

◇フィジーが日本や他の先進国と同じように、過疎化や高齢化といった問題を抱えているということに驚いた。これについて、日本は支援するというより、共に答えを探していく立場なので対等な立場で協力していかなければならないと思った。

授業の終盤に、ここまで積み重ねてきた議論と考察をあえてもう一度覆す内容を入れた。それは、「なぜ、日本が援助をする必要があるのか」という問いに対して、生徒たちは様々なことに配慮しながら援助を受ける人々の立場に立って考えた上で、“先進国としての責務がある”“課題先進国として伝えられることがあるのだから経験を共有すべき”“援助をすることが将来的に帰ってくるので国益に通じる”“援助をしていることを国際的にアピールする”等の答えが出ていた。

いずれも、自らの考えが傲慢ではないか、一面的ではないかを十分慎重に吟味しながら出したものである。それを確認した上で、もう一段次のような仕掛けで気づきを求めた。

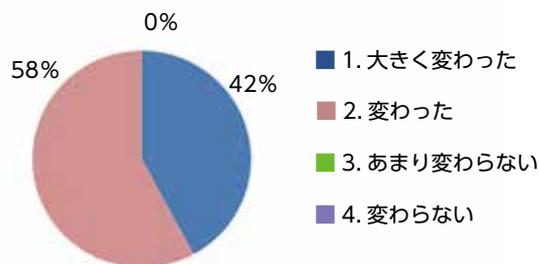
日本が人口減少社会にすでに突入していること、それが現在の先進国としての快適な生活が将来にわたって保障されないことにつながる可能性を示した。かなりセンセーショナルな宣告として、先進国としての地位を失う可能性を表現したが、今の日本の立場から逆の立場に転換させる体験を通して、グローバル社会の中で支え合うことが“お互い様”であることに気づかせたいという狙いは達成できたようである。やや、センセーショナルすぎて、日本が途上国になることが必須であるという誤解を招いてしまったことも否めないが、異なる立場に立つことで見える景色が変わることを知ってほしかった。

◇日本が途上国になるかもしれないと聞いて、日本が援助される側になった時を考えると他人事ではられないし、国際援助の重要性を感じた。

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

事後のふりかえりからは、国際理解における自らの考えや視座を知り、あるべき国際関係や援助のあり方について多面的に考えようとする姿勢の変化が見られた。「対等な立場で考えるべき」「相手の立場に立った支援」「価値観の押しつけはダメである」「実際に現地で何が必要なのかを知る必要がある」など、従来の自分たちの考えの不十分さを理解し、もっと深く考える必要があると考察できたことは、この後の学びや実践においても、生きてくる姿勢となると考えられる。また、「もっといろいろな国や文化について知りたくなった」「もっと国際関係について学びたい。知らないことがたくさんあると感じた」といった学びに対する意欲が高まった感想も多く見受けられた。事後アンケートからも、そうした意欲や態度は証明できている。

国際理解に対する意識・学習全般への意欲



≫ 途上国・異文化への意識の変容について

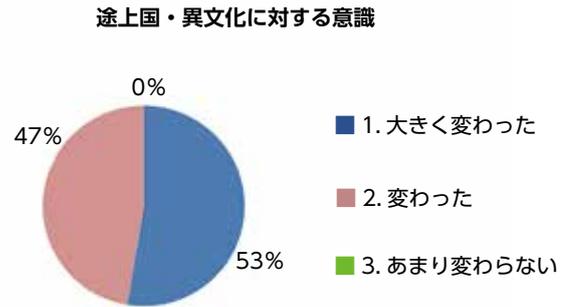
(授業前)

途上国をひとくくりにして、画一的な視点とステレオタイプで想像する傾向があったし、そもそも持っているイメージが、インフラや教育が整備されていないといった程度の情報でしかなかった。

一方で、対象となった生徒は、すでにJICA地球ひろばでの研修の機会を得ていたため、SDGsや開発途上国への援助の必要性の一般論については、多少理解は出来ていた。

(授業後)

途上国に対して「上から目線」で捉えていたという自らのバイアスに気づいたといった感想や、途上国と一口に言っても様々なレベルがあることや、先進国と同じような課題を抱えていることを知ったといったことなど、その実情についてわかっていないといったことに気づいたといった感想が多く見られた。事後のアンケートでは、「途上国・異文化に対する意識の変化」において、大きく変わった52.6%、変わった47.4%であった。



08 | 自己評価

1 苦勞した点

どのような問いを設定すれば、多面的な視点からの議論となり、対話を通じた気づきが得られるのかに悩まされた。授業者の価値観の押しつけになってしまったり、議論が拡散してしまい収拾のつかないものになってしまうこと、逆に一面的な答えしか出ようのないものになってしまうことを避ける必要があったため、“ひろがり”と“深み”の生まれる問いの工夫に苦勞した。また、授業全体のねらいを達成するために、それぞれの考察を発展的に結び付けていく展開づくりには留意をした。

2 改善点

複数の考察課題を設定したため、1回1回のディスカッションの時間がやや短くなってしまった。事後アンケートでも、「もっと話し合いをしたかった」という意見も見られ、ディスカッションでの考察が深まれば深まるほど、自分たちで対話を通してより深く学ぶ楽しさを感じていたようであり、そうした要望が出てきたのだと思う。そういった意味で、段階的で数多くのディスカッションで、授業全体のテンポは生まれた反面、グループ内での弁証法的な深まりは不十分であったのかもしれない。その課題は、全体での共有において、各グループの発表を通して、授業者が主導して深めていく方法でカバーしたが、欲を言えば、全体での共有の場面で、生徒同士でさらに反論等を通して深めていくことまでできれば、より高いレベルでの学びとなったであろう。

3 成果が出た点

今回の授業の最大のねらいは、生徒の頭と心を揺さぶり、答えのない問題に対して考え続けていく姿勢の大切さを学ばせることである。

そのためにも授業の中でも何度か“当たり前”を壊すことを通して、多面的な視点を獲得することの重要性を生徒が学んでくれたと確信している。事後アンケートの中でも、『『援助』ということがいかに難しいか、いかに自分たちが安易に考えていたかを知る機会となった』という意見が見られた。本当の意味で、価値観を変えるためには、心を動かす必要があり、常識についてあえて本当にそうなのかと問うことで頭を揺さぶることが必要であると考え。ある意味、センセーショナルな問いかけも有効であろう。「幸せであることは、本当にいいことなのか?』という挑発的な問いはその一環であるが、生徒は思考停止に陥ることなく、クリティカルに考え続けることが、今後求められていく資質であると実感してくれたようである。

4 備考（授業者による自由記述）

自らの海外での体験を単にプレゼンテーションとして報告するのではなく、授業として自らの体験を生かすというミッションに取り組むのは、想像以上に困難を伴うものであった。しかしながら、自らの体験に基づいたものであるからこそ、何に気づき、どのような課題やジレンマに自分なりに答えを出していかなければならないかといったことが、自分自身の軸として持った上で授業づくりをすることができたのだと思う。

【添付資料】

パワーポイント「フィジーの現状から考える『援助』のあり方」(オリジナル資料)

【参考資料】

- ・永崎裕麻 著(2015年)「世界でいちばん非常識な幸福論」いろは出版
- ・毛受敏浩 著(2017年)「限界国家」朝日新書
- ・JICA北陸 教師海外研修第2回事前研修パワーポイント資料
- ・Fijian Walker (2017年10月20日最終閲覧) <http://fijianwalker.com/happiness/>
- ・Sustainable Japan(2017年10月20日最終閲覧) <https://sustainablejapan.jp/2017/04/04/world-happiness-ranking-2017/26267>

所感

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

フィジーは開発途上国の中でも中進国という位置付けであり、途上国から先進国へと国の発展が徐々に進む中で、過渡期的な“発展”の現状と問題を抱えている社会であると事前研修で認識をしていた。私自身、途上国の現状を肌身を持って知ることと、途上国に対する援助のあり方を探ることを主たる目的として、この研修に参加した。先進国として、何をすべきなのか、どんな援助が有効であるのかといったことを見つけ、高等学校におけるグローバル教育にその視点をどのように取り入れていくのかを探ることが、個人としてのテーマであった。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

教師の海外派遣ということで、当然ながら「教育」に関する訪問先を数多く組み込んでいただいていたが、本研修は、“教師の使命感や子ども達を育てることこそが未来を生み出す力となるということは国を越えて共通するものである”、と改めて認識する機会となった。フィジーでは国の政策として、教育が非常に高い優先事項として位置づけられていると教育省でも話を聞いたが、共感できることである。

一方で、大きく自らの価値観が揺さぶられたことがある。

第一に、進歩・発展と幸福の両立は可能なのかどうかといったことである。フィジーは毎年、「幸福度の高い国」の上位にランキングされていることで有名であるが、それは、客観的な事実や要素から導き出されたものではなく、国民の主観的な要素を調査した結果である。今回の研修でも、“足るを知る”ことから、現状を肯定するマインドや楽しさを是とする発想に、ある意味のうらやましさを感じたり、理想的な心のあり方を示してもらったりした部分もある。しかしながら、それとは裏腹に、その課題意識の低さについて、それで本当に良いのだろうかという疑問も生じたのは事実である。

糖尿病患者が多く、足の切断まで余儀なくされる現実を前にしても、“自分事”として向き合うことなく、高カロリーの食事や運動不足を改善しようとしめない国民の多さには、たしかに悲壮感はないものの、向上心に劣るという見方もできるのではないだろうか。

教育省を訪問した際にも、教育に関する問題は何かないと自信を持って答える姿に違和感を覚えたのは、日本人だからなのだろうか。また、自給自足を基本とする村でのホームステイで、伝統的な社会のあり方を身

をもって体験する機会も得たが、ここでも何も困っていることはないという回答を笑顔で誰しもが返してきたことは、古き良き日本の村社会への憧憬を呼び起こす一方で、発展のための改善の努力不足を感じさせた。「自己肯定感の高さ」か「課題意識の高さ」か、この二項対立の命題の間で目指すべき社会のあり方に揺れ動くことになった。

第二に、先進国の援助は、本当に途上国のためになっているのだろうかといった疑問である。フィジーを訪れて、一部都市化が進んできているものの、この現状は、かつての日本社会のあり方と重複するものであるとの認識を得ることとなった。発展や開発に向けた援助は、古き良き社会やコミュニティのつながりを失わせることに手を貸すことになるのではないだろうか、あるいは、個人が自己実現の可能性を持つことと引き換えに「自己責任」という名の社会的転落のリスクや国家によるセーフティネットの必要性を生み出していることになっているのではないだろうか、と考えるにいたった。

先進国である日本は、「社会的孤立」や「格差」「都市化と過疎化」といったように、すでに様々な社会問題を抱えている。発展によってもたらされた豊かさは、決して人々の幸福感に直結しているとはいえない状況であるように思える。そうした状況に対するアンチテーゼとして、古き良き日本が実態以上に美化され称賛されていることも否めないが、明らかに、かつての日本や現在のフィジーには現在の日本が失ってしまったコミュニティの機能と支え合いのシステムが存在している。

先進国の援助が、そうした機能を低下させ、現在の日本が抱えている問題を助長することにつながるのだとすると、それ自体が正しいことなのかどうか分らなくなってきた。

しかしながら、そうした疑問を研修の中で自問自答し、議論を繰り返していった中で、腑に落ちたのは、グローバル化の流れは止められないし、その影響のもとで進展していく都市化や発展は不可逆的に進行する現象であり、誰しもが豊かさを享受したいという欲望を否定することはできないという考えであった。先進国が途上国に対して、未開発の状態にとどめることを求めることは、ノスタルジーにもとづく単なるエゴである。だとするならば、私たち先進国は、社会課題の先進国として、その発展のもたらす負の側面を示し、その解決策や改善策をもって貢献するという新しい援助のあり方を模索すべきではないかと考えるに至った。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

教育に携わる一人の教員として、フィジーの教育現場にほんの少しだけ接する機会をいただいた中から、改めてこの仕事の素晴らしさを実感することとなった。

誰かと心を通わせたいと純粋に望む子ども達の屈託ない笑顔や、何かができるようになりたいと素直に願う子供の心に内在する成長への気持ち、未知の世界への好奇心や達成したときの喜び。いずれも国や人種とは無関係に、子供達に、あるいは人間に共通することであると、子ども達と直接触れ合い、コミュニケーションをとる中から再確認した真理である。と同時に、それを育み、人として社会の中で幸せな人生を構築する力を磨く大人としての教師の役割も共通であり、私たちは重要な責任を担っていることを、日本からいったん離れたフィジーで認識する機会を持てたことは大きな収穫であった。私たちは、子どもの未来に触れている、そう再確認する機会であった。

どんなに文明が進歩しようと、人間にとって大切なことは人とのつながりである。誰かが相手のことを大切に思い、誰かが人を支えるために手を差し伸べてくれる。そんな当たり前のつながりこそが、人間にとって一番大切なことであると、子ども達に伝えたい。そのつながりを、家族から友人、地域社会、そして国を超えた見知らぬ人たちへと広げていくことが、人間の持つ素晴らしい資質の発露である。そんな考えは、決して今の日本の子供たちにとって現実離れた理想論として拒絶されるものではないように感じている。特に、3.11を経た日本社会の中で、つながりを求め、つながりを基盤とした社会を再構築しようとする志向を、若者は素直に受け入れる土壌を持っていると確信している。

私自身の成長は、様々な実体験を通して、途上国の現状や援助のあるべき姿を考える機会を得たことである。机上の論理ではなく、ほんの一部ではあるものの実際に目で見て、話を聞いた見聞は財産である。それ

にも劣らず、今回の研修で同行した多種多様な校種・年代の教員と時間をともにし、議論できたことは私自身の大きな成長につながったことは間違いない。私一人では気づき得なかった視点に何度も驚き、自らの考えを広げ深める役割を果たしてくれた仲間感謝したい。改めて、ダイバーシティ(多様性)の持つ重要性を認識させられたといえる。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について (構想)

今回の研修で私自身が考えた二項対立的な問いについて、主権者として社会に参画する準備段階の高校生には、授業を通してつねに問いかけていきたい。これまで形成されてきた思考の枠組みを揺さぶり、ある時には崩して再構築するような哲学的な問いかけを、授業の中に取り入れていくことは今後実践していきたい。

また、今後も課題研究の指導を通して、途上国の持つ問題と日本の持つ問題を対比させながら、多面的に物事を見る力を育てていきたい。それは、実際に途上国を含めた海外に目を向け、留学や研修に一步踏み出すマインドを養成することにつながるはずである。それが、ひいてはグローバルリーダーを育成する一助となると考えている。

5 研修に関する全般的な所感

今回の研修は、全体を通して様々な角度からフィジーという途上国の抱える問題点と良さを感じ、知るプログラムで構成されていたと感じた。プログラムの順序も、そういう意味では計算され尽くしていたのかもしれないと推察する。前半はフィジーのもつ陽の部分が無邪気を感じていたが、やがて生まれた疑問をもとに、しだいにそのマイナス面が見えるようになっていった。多面的な視点を獲得するとともに、JICAに携わる方々が日々自問自答している迷いや葛藤、さらにそれを乗り越える使命感までもを知ることができたものであった。ただの表層的な観光では絶対に考え得ない体験を、アレンジしていただいたことに深く感謝している。

6 JICA に対する要望・提言

今回の研修に関しては、上述のとおり、ただただ感謝の気持ちしかない。各方面との折衝も、日本におけるものと比べてもはるかに困難さを伴うものであったと推察している。そうした事情を踏まえて、唯一、実現したらよかったと思うのは、小学校・高校での実際の授業の様子を1時間でもいいので、参観させてもらうことであつた。おそらく、その中から現場における教育の実態や問題が見えたのではないかと思う(もちろん、当初計画には入れていただいていたようなので、先方の事情であることは十分承知の上での要望である)。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

絶対に価値のある研修に参加できることは間違いないので、自分の目と頭と心で、見えないものをも観察しようとするのが大切。自分一人では見えないものも、同行の仲間がいれば、その分確実に広い視野を得られるので、意見交換や議論をどんどんしていくことが有益。楽しみながらも、充実した研修にできるかどうかは、自分次第である。幸いにも私たちは、楽しむときと真剣に議論するときのスイッチをしっかりと切り替えて研修に臨むことのできる仲間恵まれた。学校での企画の準備、研修後のプレゼンの準備など、協働でアイデアを出し合い、形にしていくことが求められることがあるが、建設的で受容的な話し合いができるかどうか、研修の充実度を左右するのではないだろうか。少なくとも私たちは、そうであったと自信を持って言える。しっかりと、事前に自分自身のやりたいことや見たいことをもって、準備をしていくことで、研修は有意義なものになるはずだ。

地球規模での気候と環境

氏名	前田 昌寛	学校名	石川県立金沢商業高等学校		
担当教科	外国語(英語)	実践教科	コミュニケーション英語Ⅱ		
時間数	9時間	対象学年	2年生	人数	20人

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標：国際協力の意義とあり方を考える

A【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとすることができる。

B【外国語表現の能力】

話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えることができる。

C【外国語理解の能力】

聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解することができる。

D【言語や文化についての知識・理解】

言語や運用についての知識を身につけ、背景にある文化を理解することができる。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	・自然環境の大切さについて自分の意見を持ち、コミュニケーションを図ろうとすることができる。
(イ) 思考・判断・表現	・自然環境とごみ問題について、その解決方法までを考え、適切な状況を判断し、それを英語で表現できる。
(ウ) 技能	・屋久島の自然環境について、読んだ内容を英文でまとめることができる。
(エ) 知識・理解	・世界遺産の屋久島の環境と屋久杉について細部まで正しく理解することができる。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

(1) 生徒観

男子2名、女子18名の習熟度応用のクラスである。1年生から英語による授業を受けてきており、また、毎時間さまざまな機会にトピックを与えて話す時間を設けている。しかし、単語レベルの応答が多いので、今後は、まとまりのある文レベルで意見が表現できる生徒の育成を図りたい。

(2) 教材観・教材選定の理由

このレッスンは屋久杉の紹介を通して自然財産の保護の重要性を扱っている。フィジーの自然保護と合わせて自分の意見を英語で表現させることを意図している。

(3) 指導方針・方法

年度当初より、メッセージのやり取りを重視した授業を行っている。自分自身のことと重ね合わせたり、ペアワークでコミュニケーションをさせたりしながら理解を深めさせている。また、言語活動をとおしてペアで考え、その考えたプロセスを発表させるアクティブラーニング型の指導に力を入れている。

04 | 展開計画 (全9時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	○自然保護の重要性を考えさせる。青年海外協力隊の活動として「ゴミ」問題に取り組む高野さんの様子を伝え、海外で日本人が開発援助に活躍する姿を紹介する。	○グループを作り、ゴミ処理問題という点で、日本が貢献できることを話し合い、英語で発表する。	写真、 フィジューのテキスト
2・3	<Part1> ○自然遺産である屋久杉の秘密を読み取り、なぜ屋久杉は長生きするのかを考える。	○自分の意見を考え、それを英語にして伝える。ペア、グループ、全体と自己表現する場を広げていくことで、抵抗感なく生徒が英語を使って意見を述べられるよう工夫する。	教科書、 ハンドアウト
4・5	<Part2> ○島の人たちが自然を保護し、屋久杉をどのように扱ってきたかを考える。	○自分の意見を考え、それを英語にして伝える。ペア、グループ、全体と自己表現する場を広げていくことで、抵抗感なく生徒が英語を使って意見を述べられるよう工夫する。	教科書、 ハンドアウト
6・7	<Part3> ○屋久杉の特徴を理解し、有名な屋久杉にはどのようなものがあるか学ぶ。	○自分の意見を考え、それを英語にして伝える。ペア、グループ、全体と自己表現する場を広げていくことで、抵抗感なく生徒が英語を使って意見を述べられるよう工夫する。	教科書、 ハンドアウト
8・9	<Part4> ○屋久杉が伐採から守られた経緯を読み取り、人間にとって大切なこととは何かを考える。	○自分の意見を考え、それを英語にして伝える。ペア、グループ、全体と自己表現する場を広げていくことで、抵抗感なく生徒が英語を使って意見を述べられるよう工夫する。	教科書、 ハンドアウト

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	○自然が豊かで人々が幸せな写真と、自然が破壊されて人々が困っている写真など、2枚の対照的な写真を見せ、交互にペアの相手が英語でそれを描写する。もう一方の生徒はその英語を聞いて絵を描く。 ○森林が破壊されている問題をまとめたビデオクリップを視聴する。	○本文を読むときのイメージ作りに役立つ写真を提示する。ペアワークで間違いを恐れず積極的に自分の考えを話したり、また相手の考えなどを聞いたりして絵を完成させる。絵が描けたところで、元の絵を確認し2枚の絵のねらいを考える。 ○人間にとって森林破壊がもたらす問題について考えるきっかけを与える。	○写真(2枚)

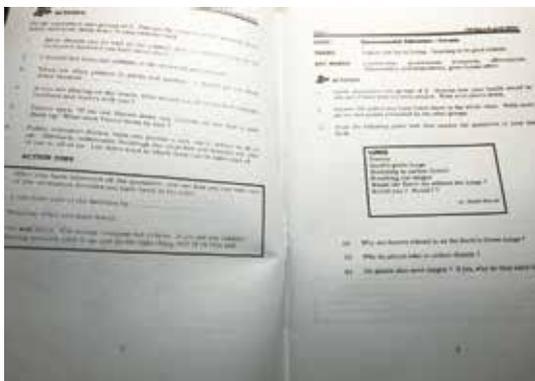
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
展開 (25分)	<p>○フィジーのテキストにある“how your health would be affected if there were no trees around”という問いについて考える。</p> <p>○フィジーのテキストにある詩を読み、問題に答える。</p> <p>○フィジーのゴミ集積場の現状を表す写真を見て、このゴミが増え続けたらどうなるかを考える。</p>	<p>○生徒が考えたアイデアを全体で共有するため、グループで討議させた後、代表の生徒に、1つアイデアを板書させる。</p> <p>○森林が人間もたらす恩恵を詩から読み取らせる。</p> <p>○ゴミが急増すれば、森林を伐採し埋め立てるしかない現状を訴えかける。</p>	○フィジーの Health Science テキスト
まとめ (15分)	○グループを作り、ゴミ処理問題という点で、日本が貢献できることを話し合い、英語で発表する。	○青年海外協力隊の活動として「ゴミ」問題に取り組む高野さんの様子を伝え、海外で日本人が開発援助に活躍する姿を紹介する。	○写真

▶ 授業実践の様子

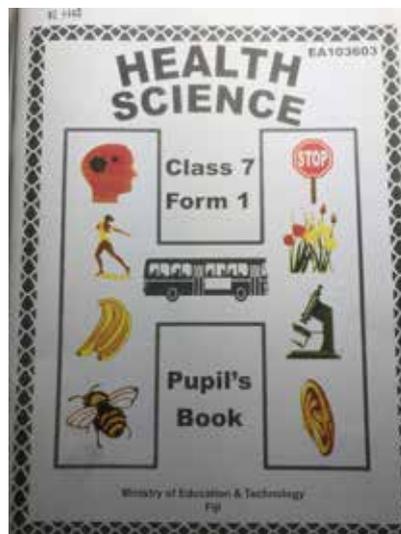
○生徒たちはペアやグループ活動を中心として、意見を交換しながら、活発に議論を深めていた。



自分たちができる国際貢献について考えている生徒たち



生徒が授業で学んだテキスト



フィジーで購入したテキスト
『HEALTH SCIENCE』
(Ministry of Education & Technology Fiji)

06 | 本時の振り返り

○本校「英語科」はシラバスに基づいて、かつ検定教科書を基にして授業が行われるため、この教師海外研修で学んだことを1回限りの特別な授業として行うのではなく、普通の英語の授業へどのように応用していくかが課題であった。本時は、教科書のテーマが「屋久島の自然環境」に関するものだったので扱いやすかった。自然災害は地球規模で起こっており、環境保護問題は日本(屋久島)をこえて、世界規模で考えなければならない問題であることを、フィジーでの実体験に基づいて、本時の授業によって生徒に伝えられたと思っている。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

○普通の教科書による英語学習をこえて、フィジーの文化や教師の実体験を、生徒はとても好意的にかつ能動的に受け取っていた。生徒の顔が良く上がり、またグループでのディスカッションも普段以上に活発であった。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

○途上国とは何か、異文化とは何かがぼんやりとしかわからない状況であり、「途上国とはどんな国のことだと思う?」との授業前の問いにもはっきりとした意見を持てる生徒はほぼいなかった。

(授業後)

○フィジーに関するクイズ(国旗、人口、主要産業など)も織り交ぜたが、答え合わせをするたびに歓喜の声があがった。高校生にとっては遠い国であったフィジーが、少しずつ情報が手に入り、そして写真を見て身近に実感するようになった。

○そのフィジーで、石川県出身の先生が青年海外協力隊員として活躍されている様子を知って、生徒は頼もしく感じたようである。「こんな身近な人が、外国で頑張っているのを知って嬉しかった」という声が聞かれた。

○英語学習や海外文化に興味を持つ生徒も多く、「先生、この授業楽しかった」「次はいつですか?」とさらに異文化に対して興味を持ってくれたことが分かる声も聞かれた。

08 | 自己評価

1 苦労した点

○学習活動が展開する中で、生徒が既に持っているイメージや知っているニュースが邪魔をして「日本人として国際貢献に何ができるのか」という問いに対してステレオタイプの考えしか出ない生徒がいたり、また複雑に考えすぎて英語で表現できない生徒への指導に苦労した。

2 改善点

○「日本人として国際貢献に何ができるのか」というテーマが大きすぎたため、「高校生にとって身近な国際貢献とは何か」など、高校生が自分と世界をつなげられる仕組みをもっと作るべきだった。

○学校(生徒会など)として取り組めること、社会(町内会など)の一員としてできること、など具体的な場面や立場を明確にして議論しないと、とてつもなく大きな構想が出て現実離れしていたり、逆に全く思いつかなかったりすることが分かった。

3 成果が出た点

- 開発途上国の様子をまず生徒に伝えられたこと、そしてそのことにより、「さらに知りたい」という気持ちをもった生徒が出てきてくれたことが大きな成果である。
- 実体験に基づいた授業だからこそ、臨場感をもって生徒に伝えることができ、また生徒からの疑問にも経験したことを基に答えることができた。

4 備考 (授業者による自由記述)

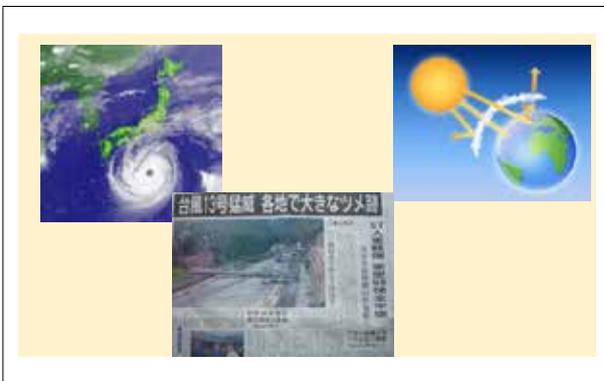
○【6】の本時の振り返りでも述べたが、高等学校は教科担任制であり、シラバスや検定教科書によって、授業内容の自由度には限りがある。したがって「特別な授業」を行うのではなく、普段の授業の一環としてフィジーで学んだことを活かした。○生徒の声からも好評だったことが分かったが、授業を行った私自身も「世界規模」で物事を考え、途上国支援という視点で世界規模の問題をとらえる視点を持つことができた。この視点を持つことを今後も継続していきたい。

【添付資料】

①HEALTH SCIENCE (Ministry of Education & Technology Fiji)

②パワーポイント自作教材

■スライド1



“What do you think about this picture?”という問いかけから入り、We have had a lot of big typhoons this year. という気球規模での異常気象に目を向けさせる。
“Why do you think this happens on the earth?”と異常気象が起きている原因について考え、話し合わせる。

■スライド2 【Person A】



生徒を Person A と Person B に分け、一方は写真を英語で説明し、他方はそれを聞いて絵を描かせる。ジェスチャーもまじえながら、自己の伝えたいことが上手く伝わるかゲーム感覚で活動に取り組ませる。
ここではのちの活動の目的に結びつけるために、一方の写真は森林の中で楽しそうにキャンプをしているものを、そしてもう一方は森林を伐採して何かを立てようと話し合っている写真を選んだ。

【Person B】

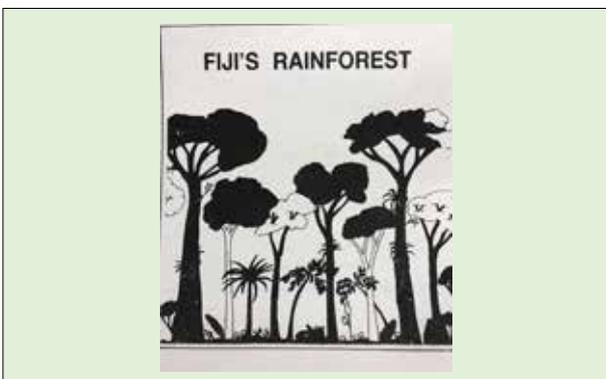


■スライド3



生徒に “What did you learn from those two pictures?” というように、2枚の写真から気が付くことを尋ねた。この活動のねらい通り「森林が人間の手によって破壊されている」という考えが生徒から出たので、スライド3にある「フィジーのごみ処理場（写真右）」を紹介した。

■スライド4



フィジーで購入した教科書 “HEALTH SCIENCE Class 7 Form 1” にある “FIJI'S RAINFOREST” を導入し、フィジーで問題になっている森林伐採とごみ処理問題をテーマに授業は「展開」に入った。

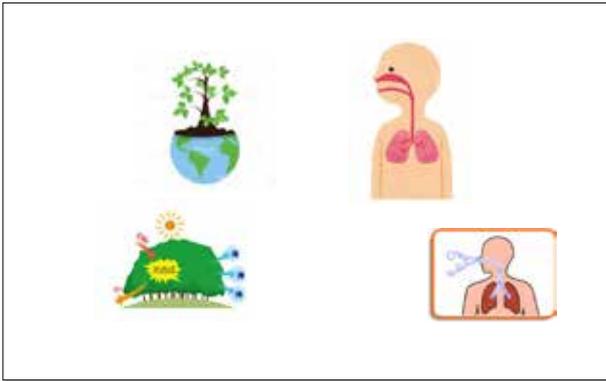
■スライド5

Today's goal:

Let's think about what we can do to contribute to solving the world issues.
(日本人としてできることを考えよう！)

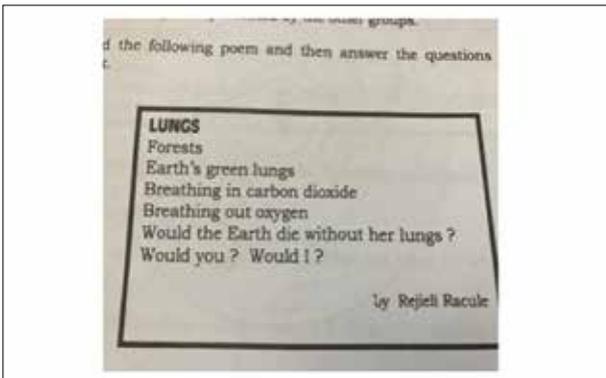
本時は「英語科」の授業なので、学習指導要領の目標に合致するよう「英語を通して」「コミュニケーション力を育成」するために、そのコミュニケーションの内容として本時では「日本人として国際貢献に何ができるのか」考え、最終的に英語で発信させる。

■スライド6



教科書“HEALTH SCIENCE Class 7 Form 1”にある「森林の役割」を考えさせる英語を通して理解させるには多少難しいテーマであるので、人間で言う「肺」の役割を例に出して理解を促す。

■スライド7



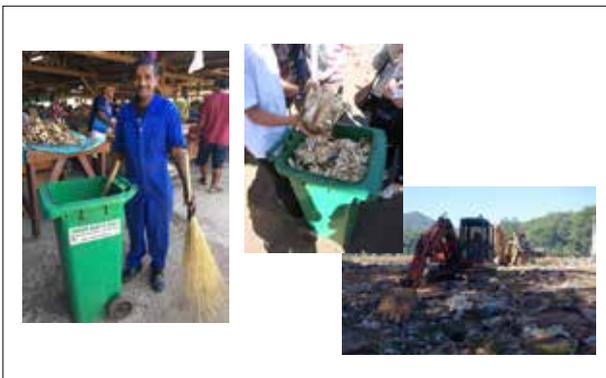
教科書“HEALTH SCIENCE Class 7 Form 1”にある“LUNGS”という詩をみんなで朗読して、「肺のない地球」とはどのような意味なのか考えさせる。

■スライド8



本時のねらいである「日本人として国際貢献に何ができるのか」を考えさせるときに、実際にフィジーで、ごみ処理支援プロジェクトで活躍されている青年海外協力隊の高野さんの様子を伝え、自分にできることは何かを考えるきっかけをつくる。

■スライド9



高野隊員の取組がフィジーの人々にも徐々に受け入れられ、そして支持されるようになり、結果としてごみの総量の減少やごみの適切な処理が期待されることを紹介する。

【参考資料】

HEALTH SCIENCE (Ministry of Education & Technology Fiji)

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

教育の観点から「幸せ」とは何なのかを再考すること。日本は先進国と言われているが、教育という視点で見ると、まだまだ足りない部分があるのではないかと考えていた。概して日本の高校生は、眠い目をして朝から疲れているように見え、午後からは夏は涼しく冬は暖かい教室で眠さに耐え、そして部活動でへとへとになり、宿題や受験勉強に追われて毎日を過ごしている。教育環境としても、高校では教師1人に対して生徒40人、教師は重いプロジェクトとスクリーンを肩に抱え教室に向かっていく。日本の教育は本当に幸せなのかを考えたいと思った。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

途上国では「システム」が上手く構築できておらず、物事の「交通整理」ができていないと感じた。その一方で、現状に満足している感じであり、将来を見据えてとか、目標に向けてという考え方をしないように感じた。研修中、フィジー人の自己肯定感はとても高いという話があった。日本人の自己肯定感は低いと報道されていたことと重ねたのだが、これまでは「自己肯定感が低い=幸せではない」という短絡的な見方をしていたことに気がついた。たしかに概してフィジーの人々は自己肯定感が高く、人々を見ていても明るく幸せそうに映る。しかしそれは「知らない幸せ」なのではないかと思った。例えば、ゴミの処理をとっても現状は埋め立てるしかなく、その汚染処理も魚を池に放して元気に泳いでいけば水は綺麗だという現状肯定である。ゴミの量が急増して埋め立てが追いつかなくなった場合や、魚が徐々に毒に対して耐性をつけ人体への影響が認められるレベルの毒になっていた場合。発見が遅れるなど、リスクの可能性を「知らない」ので、現状が「幸せ」なのではないかという思いがした。このような「知らない幸せ」が「知ってしまった不幸せ」に変わることが途上国にとっていいことなのか、それとも良くないことなのか疑問に感じた。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

家族を大切にしたり、大人が子供にしついたり教育をしたり、そして食事や会話を楽しんだり、同じ人間として先進国でも途上国でも変わらない部分が多くある一方で、集団(国民)としての考え方や慣習でとても大きな違いが出てくることを子供たちに伝えたい。たとえば学校訪問をとおして感じたのは、日本人ならば「このような力をつけさせるために(目標)、このようなことをさせ(手段)、結果をこのように測ったり分析したりする(振り返り)」をセットで考える癖がついているが、フィジーでは「この時間必要なのはこれだ」という考え方に基づいているように感じた。それは時間割表が教室に貼られていなかったし、生活習慣病が多いのに体育がカリキュラムに効果的に組み込まれていない部分から感じた。ただし、子供たちに伝えたいのは、違いは違いでしかなく、違うからと言って善悪をすぐに決めることはできないということである。そしてさらに大切なことは、その「違い」に気が付く感性を磨くことであり、違いから生じる不利益を改善させたいと思うならば、今回の研修でお話を伺った入江さん、坂口さん、高野さんのように信念と粘り強さを持って任務に当たることの大切さを伝えたいと思う。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について (構想)

上記の3でも述べた、「違いは違いでしかない」「違いに気が付く感性を磨く」「違いを改善する忍耐強さ」を指導していくことは教師を続ける限り、生徒に指導していきたい。ただし、フィジーという中進国である1カ国を切り取って概念化するのは危険なことなので、後進国も含めた途上国の現状を勉強し、そしていつかまた自分の目でみて、日本という先進国の1カ国ができることという視点を今後の教育活動に活かしたい。具体的には、私

の担当科目は英語なので、「もしも、これが〇〇という状況ではどうだろう」といった、異なる考えを生み出す質問を英語で生徒に投げかけ、考えさせる授業を目指していきたい。

5 研修に関する全般的な所感

自分の心の変化と、研修プログラムの進行がとても合致していた。プログラムの前半は、学校を訪問したり、ホームステイをしたりと「自分で体験」することが多かった。事前研修などを通して目的意識を高め、明確にして研修に参加したが、この「体験」を通過していく中で、事前の予想や考えていたことと違うことが多々出てきてモヤモヤした気持ちになっていた。それが後半になると、現地で活躍している隊員の皆さんや企業経営者から生の声を聞いたり、対談の場を持ったりして「なるほど」という霧が晴れていくプロセスが多く出てきた。その途中で、参加した仲間との「振り返り」の時間が何回もあったのがとてもよかった。

6 JICA に対する要望・提言

この研修に参加する皆さんはとても目的意識が高く、熱心で行動力があると感じた。しかし、何がネックになっているかというと、多忙な現場でこのような貴重で価値のある研修に参加する時間がないことだと思う。今回参加した皆さんが口々に言っていたことは「今年しかチャンスがないと思った」ということだった。悉皆研修、受け持ち学年などの条件が今年だけはスケジュールリングが上手くいったということだった。そのような合間をなんとか活用して参加し、多くの成果を上げていると思っている。しかし、石川県では「年次休暇」を使った参加形態が各学校間で統一されているようで、このようにしっかりとした研修内容であれば「職専免」や「研修」という参加形態になることが望ましいと思う。教育委員会の方々にも今回の研修の成果を感じていただける仕組みを作れるのはJICAしかないと思うので、ぜひ成果の周知を組織レベルでお願いしたい。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

訪問する国の歴史について認識を高めてから行くと現地での理解が深まると思う。たとえばフィジーがかつてイギリスの統治下に有り、茶飲文化が砂糖の需要を引き起こし、砂糖製造の労働力としてインド人の移住が起こったことなどを学んでいくと、現在の政権の抱える問題や施策、フィジー街中でのフィジー系とインド系の住民の壁がより理解できると思う。

フィジー大研究から大切なことを考える

氏名	助田 清華	学校名	石川県立金沢辰巳丘高等学校		
担当教科	中国語、英語	実践教科	中国語、異文化理解		
時間数	5	対象学年	2	人数	9

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

フィジーの現状を調べたり、各種資料を活用したり、文化や習慣を比較することを通じて、フィジーにどのように支援するのかを考える。

グループで調べた事と考えた事を発表する。

多面的な視点で国際理解や国際協力の本質とあり方を考える。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	フィジーの文化や生活習慣について関心を持ち、積極的に調べたり、伝えたりする。
(イ) 思考・判断・表現	フィジーの良いところと課題を見つけ、自分の言葉で表現する。
(ウ) 技能	調べたことをPPTにまとめ、発表する。
(エ) 知識・理解	様々な情報を収集、分析して、テーマについて理解を深める。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

〈生徒観〉男子7名、女子2名の選択授業のグループである。男女間の共通会話が少ないものの、この話題になると、一気に雰囲気が変わり、みんな楽しく交流し、自分の意見をはっきり主張し、お互いプラスのアドバイスや意見交換で盛り上がる。三人ずつの三グループに別れ、それぞれの興味、関心が違った中、各自の意見を十分出し合って、共通の作品を作り上げた。この国際理解の授業を通じて、会話が多くなったり、表情も明るくなったりした。お互いの考えを出し合うことで、積極的に取り組んでいた。

〈教材観〉今年4月から中国語授業を初め、これまでにピンインの読み方や簡単な文法を中心とした授業が続いている。高校時代に英語以外の外国語を学んでいることから、外国の文化や習慣及びその背景などを多面的に考えることができ、異文化理解などの違和感が割と少ない。このような国際理解教育活動を通して、外国の文化や生活習慣に興味関心を持ち、他国や相手を尊重する心を育てるとともに現在の自分を振り返り、新たな課題を見つけることが期待される。今回海外研修で収集した情報や写真、ネットで調べた資料などを主に自作教材の材料とする。

〈指導観〉幅広く調べさせ、高校生なりの興味関心のテーマに沿って研修中の教員自らの経験や感想をすべて話した。前置きとして、私が話をすることがフィジーのすべてに当てはまることではないことを伝えた。尚、異文化理解の視点から、文化、価値観の違いやその背景にある要因を考えていく必要があると考えている。生徒が調べたフィジーの現状や生活習慣から、自分なりの支援の仕方を考える中で、支援の本当の意味に気づき、生徒が将来何をすべきかを考えてほしい。

04 | 展開計画 (全5時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<p>研修の経験や紹介を聞く。</p>  <p>スバの市場で購入したおやつ。</p>	<p>事前研修や現地研修などの資料を自作教材にし、PPTを使って紹介する。フィジーのおやつを食べながら食物やスポーツ、学校生活などの話題について教員の話聞く。</p>  <p>教員の研修経験と紹介を聞く。</p>	<p>研修中の写真や動画。 現地のおやつやグッズなど 事前意識調査票 【資料1】</p>  <p>試食したおやつ</p>
2	<p>グループ分けして、発展途上国の現状を調べ、その国の教育、環境衛生、医療などのポイントを絞って問題点を考える。</p>	<p>生徒同士で話し合う。情報自習室で調べる。</p>  <p>情報自習室での調べ学習。</p>	<p>インターネット パソコン</p>
3	<p>発表準備をする。3つのグループに分けて、それぞれの調べた国の状況の発表原稿を作る。発表準備をする。</p>	<p>調べた内容を基づいて発表原稿を作る。</p>	<p>辞書 資料集</p>
4 本時	<p>発表する。 ワークシートに記入する。</p>	<p>発表し、他グループの発表内容も聞く。教員の付加説明や紹介を聞く。</p> <p>多面的な視点で国際理解や国際協力を考える。</p>	<p>ワークシート 【資料3】</p>
5	<p>振り返り。事後意識調査票を記入。教員からの講評など。</p>		<p>事後意識調査票 【資料2】</p>

05 | 本時の展開

〈ねらい〉フィジーの教育、文化、宗教、交通、環境、衛生、経済産業、医療などについて調べ、国の現状を知り、その調査結果を発表し、問題点や解決方法をお互いに話し合い、フィジーへの支援の仕方と必要性について理解を深める。

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	調査結果発表の準備	狙いを提示。 ワークシートを配る。	自作ワークシート 【資料3】

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
展開 (36分)	各グループの発表 (各グループ10分前後) グループA. 教育、文化、宗教、交通 教員の付加え説明(4分) ワークシートにメモを取る グループB. 宗教、文化、経済産業、教育 教員の付加え説明(4分) ワークシートにメモを取る グループC. 文化、医療、宗教 教員の付加え説明(4分) ワークシートにメモを取る	発表がスムーズにできていないグループを支援する。 各グループの発表後に聞いている生徒からの質問に回答する。 アドバイスをする。 教育事情や教育省訪問の際の経験を話し、教育支援の仕方と必要性を話し合う。 経済や産業について、既に行った援助形態、プロジェクトなどについて提案。 食文化による健康問題の発生。医療現場の事情など国の医療の限界。その解決法を探る話し合い。	生徒が作った発表PPTと視覚資料。 生徒が作った発表PPTと視覚資料。 生徒が作った発表PPTと視覚資料。
総評 (5分)	教員からのアドバイスや提案を全体で提示。フィジーへの支援の仕方と必要性について理解を深める。	ネット情報や経験者の話も限界があることを伝え、偏る意見や思い込みにならないように客観的な情報分析や支援法を考える。	
まとめ (2分)	本時の活動について振り返る、自分の出来ることを考えて、グループ内で話し合い、記録する。	ワークシート回収。	生徒の考えや学びを記録する。

▶▶ 授業実践の様子



グループ A の発表風景



グループ B の発表風景



グループ C の発表風景



生徒同士の問いかけや答える風景



ワークシートに取り組む



教員の付加え説明

06 | 本時の振り返り

生徒がJICA職員や校長、教頭、及び他職員の前で、堂々と調べたものを発表した。普段の授業より積極的に前向きな姿勢が見られた。本校のグローバルコースの生徒が色々な国際理解教育、国際交流活動に参加する中で養った寛容性、理解力を今回の授業で垣見ることができた。生徒は前向きに取り組み、多面的な視点から意見が交わされていた。途上国や異文化に対する先入観に気づき、先進国と同じような課題を抱えていることが分かった。

07 | 単元を通じた児童生徒の反応 / 変化

事前意識調査の項目「国際理解や国際協力について、希望していること、理想、不安や悩み」に関し、「発音が上手くない」や「実際に海外に行くのは少々不安」などの意見が見られた。事後意識調査には「機会があったら、フィジーへ行ってみたい」「海外には興味を持つようになった」などの意見が見られた。尚、外国語学習時間が1日30分程度から1日1時間程度へと増え、変化が見られた。

≫ 単元を通じ変容した生徒の態度や学習意欲

事前意識調査や事後意識調査の結果によると、国際理解や国際協力の必要性を強く感じている割合が11%から55%に変わった。学習意欲も上がり、将来海外で働くために必要と思う外国語学習時間は、ほとんどの生徒が週15時間以上だと思う項目を選んだ。尚、現在の外国語学習の中心は単語、文法、リスニングの三項目から単語、リスニング、スピーキングの三項目に変わった。(賛否両論はあるが)

国際理解と国際協力は、偉い大人がすることではなく、高校生でも意識を持って、身近なことから始めればよいと話した。生徒が素直に聞き取り、ワークシート項目「日本人としてできること」に関して「今日から地球温暖化を防ぐために、節水、節電を徹底的にやりたい」や「無駄遣いを辞めたい」といった意見が出た。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

授業前、ほとんどの生徒がフィジーについての興味関心がなかった。途上国と言えば、唯一中国だけと考えていた。異文化についても、中国のイメージが強かった。教員から与えた情報以外には、ほとんど生徒自ら調べようとはしなかった。途上国への支援やその仕方については、全く考えたことがなかった。

(授業後)

授業後、異文化への興味関心が広がった。世界には、約二百の国や地域があり、それぞれの文化や習慣や事情があることに気付き始めた。先進国も途上国も各自の課題を抱えながら奮闘している事が理解できた。援助やその仕方についても深く考えるようになった。高校生でもできることが沢山あることをみんなの話合いの中で理解することができた。エコ活動や社会の取組みの意味も一部分かった。より良い社会を作るには、それぞれの個々の努力が必要だと思うようになった。海外へ視線を向け、国際社会での日本の役割や日本人としてできることなどをより深く理解できるようになった。全体的に生徒の国際感覚が広がった。

1 苦労した点

生徒自らが調べ、考えることに関しては、視点や話題が広がるのが想定できた。一面的な異文化紹介にならないよう適切に修正した。授業全体の狙いを達成するために、それぞれのグループの観点や話題と教員の経験を効率的に結び付けて、有効に展開していくことに留意した。

尚、生徒のPPTづくりへの指導や適切なアドバイス、修正に苦労した。

2 改善点

同年代の生徒同士が日常触れたことのない国の事情や支援の仕方などを調べ、話し合うことは、なかなかイメージが付かない作業となる。手掛かりとなる教員の経験も限界があり、偏見を起こさないように気を付けながら授業を進めていたが、全体図を描くことが難しかった。生徒が調べることとPPTを作ることに時間を使いすぎた。事実を調べた上での考えや整理の時間が必要だった。調べた内容から課題や疑問を出して、それに対する自分の考えを発表したりすると、より良い学習になると思った。

3 成果が出た点

生徒が興味津々に取組んだ事と国際協力への理解が深まったことが挙げられる。日常の学校生活と全く違う話題で生徒同士が調べ学習をし、話し合い、考え、質問をし、答えるなど一連の活動を通じて生徒が成長している。国際感覚も身に付いてきている。テレビ番組やニュースにフィジーや中国の情報が出た時、真っ先に教室で話し合うようになった。これをきっかけに、生徒のコミュニケーション力と国際適応力を高めていければと思う。

4 備考（授業者による自由記述）

「一人の教員の後に二百人の生徒がいる。」それぐらい教員の言動は影響力があると言われている。今回の海外研修に参加し、出会った全ての人々から受け取ったメッセージをそのまま生徒に還元することが私の使命である。授業として、わずか5時間の実践授業しかできなかったが、これからの日常授業や来年再来年の授業に、生かせる経験や資料が沢山ある。

JICAには、このような機会を与えて頂いたことに心から感謝を申し上げる。これからの教育指導にこの貴重な経験を活かしていきたい。

【添付資料】

- ・ 事前意識調査 【資料1】
- ・ 事後意識調査 【資料2】
- ・ ワークシート 【資料3】

【参考資料】

JICA北陸 教師海外研修事前研修資料
 外務省ホームページ フィジー
 JICA ホームページ フィジー
 池田香代子 「世界がもし100人の村だったら」(マジンハウス)
 宮崎大輔 「ぼくのお父さんはボランティアというやつに殺されました」

【資料1】事前意識調査

本意識調査は、統計結果を外部に公表することがあります。その際、皆さんの個人情報は公表しません。

(1) あなたは、国際理解、国際協力の必要性を、どれくらい感じていますか。

⑤ 強く感じている ④ ある程度感じている ③ どちらとも言えない ② さほど感じていない ① 感じていない

(2) 現在の外国語（英語と中国語を含む）学習の時間は、授業時間を除くと、どれくらいですか（だいたい結構です）。

⑤ 週15時間以上 ④ 週10時間以上 ③ 週7時間以上 ② 週3時間以上 ① 前記以下
1日2時間程度 1日1.5時間程度 1日1時間程度 1日30分程度

(3) あなたが将来海外で働くために必要だと思う外国語学習時間は、どれくらいですか（だいたい結構です）。

⑤ 週15時間以上 ④ 週10時間以上 ③ 週7時間以上 ② 週3時間以上 ① 前記以下
1日2時間程度 1日1.5時間程度 1日1時間程度 1日30分程度

(4) あなたの現在の外国語学習は、どの分野が中心ですか（3つまで選んでください）。

単語・語彙 文法 長文読解 リスニング 作文 スピーキング

(5) あなたの外国語力向上の課題は、どの分野ですか（1つ選んでください）。

単語・語彙 文法 長文読解 リスニング 作文 スピーキング

(6) あなたの大学卒業時の理想とする外国語力は、どのようなものですか。

会話力 Native並 Nativeと議論できる Nativeと日常会話が苦にならない 海外旅行に問題がない

(7) あなたは、青年海外協力隊の必要性を、どれくらい感じていますか。

⑤ 強く感じている ④ ある程度感じている ③ どちらとも言えない ② さほど感じていない ① 感じていない

(8) あなたは、青年海外協力隊に参加する計画がありますか。

⑤ 既に計画がある ④ 大学時に行きたい ③ 行けたら行くつもり ② 短期なら ① 行かないと思う

(9) あなたは、海外協力隊に行くとしたら、どれくらいの期間、行きたいと思いますか？

⑤ 1年以上 ④ 半年程度 ③ 1か月程度 ② 2週間程度 ① 1週間程度

(10) 国際理解や国際協力について、希望していること、理想、不安や悩みなどがあれば記述してください（自由記述）

【資料2】事後意識調査

国際理解、国際協力授業

名前 _____

事後意識調査シート（国際理解、国際協力授業を受けた後、ご自分の成長や変化を記録するために答えて貰うもの）

本意識調査は、統計結果を外部に公表することがあります。その際、皆さんの個人情報は公表しません。

(1) あなたは、国際理解、国際協力の必要性を、どれくらい感じていますか。

⑤ 強く感じている ④ ある程度感じている ③ どちらとも言えない ② さほど感じていない ① 感じていない

(2) 現在の外国語（英語と中国語を含む）学習の時間は、授業時間を除くと、どれくらいですか（だいたい結構です）。

⑤ 週15時間以上 ④ 週10時間以上 ③ 週7時間以上 ② 週3時間以上 ① 前記以下
1日2時間程度 1日1.5時間程度 1日1時間程度 1日30分程度

(3) あなたが将来海外で働けるために必要だと思う外国語学習時間は、どれくらいですか（だいたい結構です）。

⑤ 週15時間以上 ④ 週10時間以上 ③ 週7時間以上 ② 週3時間以上 ① 前記以下
1日2時間程度 1日1.5時間程度 1日1時間程度 1日30分程度

(4) あなたの現在の外国語学習は、どの分野が中心ですか（3つまで選んでください）。

単語・語彙 文法 長文読解 リスニング 作文 スピーキング

(5) あなたの外国語力向上の課題は、どの分野ですか（1つ選んでください）。

単語・語彙 文法 長文読解 リスニング 作文 スピーキング

(6) あなたの大学卒業時の理想とする外国語力は、どのようなものですか。

会話力 Native並 Nativeと議論できる Nativeと日常会話が苦にならない 海外旅行に問題がない

(7) あなたは、青年海外協力隊の必要性を、どれくらい感じていますか。

⑤ 強く感じている ④ ある程度感じている ③ どちらとも言えない ② さほど感じていない ① 感じていない

(8) あなたは、青年海外協力隊に参加する計画がありますか。

⑤ 既に計画がある ④ 大学時に行きたい ③ 行けたら行くつもり ② 短期なら ① 行かないと思う

(9) あなたは、海外協力隊に行くとしたら、どれくらいの期間、行きたいと思いますか？

⑤ 1年以上 ④ 半年程度 ③ 1か月程度 ② 2週間程度 ① 1週間程度

(10) この授業を通して、途上国の現状や支援の仕方について思ったことなどがあれば記述してください（自由記述）

国際理解、国際協力 ワークシート

- ねらい： ・ フィジーの研究を通して、国際理解とは何か、国際協力とは何か、考える。
- ・ 国際社会になった現在、日本人としてどう生きていくのかについて考える。
 - ・ 国際理解や国際協力の際の心構え、大切にしたいことは何かを考える。
 - ・ 私たちが出来ることは何か、考える。

わかったこと：グループ A

教育：

文化：

宗教：

交通：

わかったこと：グループ C

宗教：

文化：

経済産業：

教育：

わかったこと：グループ B

文化：

医療：

宗教：

先生の話から分かったこと： _____

大切にしたいこと： _____

日本人として出来ること： _____

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

途上国の教育現状及び児童生徒の生活環境、成長段階と教育の関係について主眼をおいた。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

思ったより状況が良かった。村でのホームステイで見かけた児童生徒は天真爛漫そのものだった。教育省の長官の危機意識のなさ過ぎを少し疑問に思ったが、国の現状に合わせた決断ならば、特に問題がないかと思う。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

他人に対する受容度が大きくなったことは最大の自分自身の成長だ。

生活の不便などを抱えながらも、穏やかに生活している人々。不自由一つない日本の生徒としては、もっと周りに感謝の心を持って、国のため、世界のために頑張してほしいと伝えたい。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

私は、日本の生徒に、もっと視野を外へ向けて、自分の考えを持ち、世界に発信できる日本人になってほしいと思う。日本は、先進国の中でも資源が少ないのに、かなり進んでいる現状がある。教育が進んでない、自然環境が厳しい、病気や紛争に襲われる国や地域で暮らしていても、それを乗り越える現地の人達の姿勢を伝えつつ、自立させる援助を行える人材になって欲しい。

5 研修に関する全般的な所感

途上国と言っても、様々だと思う。フィジーの生活基準や教育現状は先進国に近いレベルだった。もっと深刻な課題を抱えている国が沢山あると思う。尚、日本国が色々な形で沢山の国に支援をしていることが、今回の研修で分かった。本当にその国のために何が必要かをしっかり研究分析し、見分けて支援すべきだと思う。しかし、日本の社会問題解決にも、資金や時間が掛かるので、各資源配分には、一考の必要がある。

6 JICA に対する要望・提言

今回の研修の参加メンバーはそれぞれの目標意識を持って参加したが、定員より人数が多かったため、負担が大きかったと思う。選考等を経て、定員通りにした方が良い気がする。毎年機会があるので、本当に学びたい人は、いずれ参加できると思う。JICA北陸の御気遣いに心から感謝申し上げます。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

事前研修などでしっかりと考え、研究課題を決定してから、本研修に参加した方が良いと思う。漠然として参加するより、見るところを決めてから行くと、有益な結果が得られると思う。

フィジーに行ってみよう

氏名	田中 美伎	学校名	加賀市立作見小学校		
担当教科	算・国・生・学・道・体	実践教科	学活・道徳		
時間数	全7時間	対象学年	2年	人数	65名

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

- フィジーの人々の生活や学校の様子を知り、異なる文化や習慣を理解し合うことは大切だということを考える。
- 青年海外協力隊として活躍する日本人や発展途上国の問題点を知ることを通し、自分の視野を広げる。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	フィジーという国を知ることを通して、異文化に興味関心を持つことができる。
(イ) 思考・判断・表現	フィジーという国の生活や国民性、青年海外協力隊の活躍を学ぶことによって、自分の生活を振り返り考えたことを表現することができる。
(ウ) 技能	青年海外協力隊の方に質問したり資料を活用したりして、青年海外協力隊の方の仕事やフィジーの特色、違いを読み取っている。
(エ) 知識・理解	異なる文化や生活の特色について理解する。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

●単元設定の理由

子どもたちの世界を少しでも広げたいと思ったのでこの単元を設定した。現在担任をしている子どもたちは2年生であるため自分の町より外の世界にあまり出たことがない。自分たちとは異なる文化や生活にも触れる機会が少ない。だから発展途上国のこと、日本とは違う文化のこと、青年海外協力隊の方のことなど、自分が研修を通して学んだことを伝え海外に興味をもってもらい、少しでも子どもたちの将来の職業選択の幅が広がれば良いと考えた。

●児童観

国旗に興味のある児童が多く、自学のノートに国旗と国の名前を書いたり、国旗を書いてクイズを出し合ったりしている姿が見られる。教室に世界地図を掲示した時も休み時間になると地図の周りに集まり「アメリカってこんなところにあったんだ!」「こんな小さい国がある!」などと話している姿が見られた。このような姿から世界に対する関心は高い児童が多いと考える。

また、2年生の各教科において、世界について触れる機会は殆どないため「外国」というだけでワクワクして楽しく学習することができる。これまで出会ったことのない文化や習慣のことを知り、児童が感じたままの言葉を素直に表現させたい。

●教材観

これまで児童は生活科の「町たんけん」で5～6人で1つのグループを作り校区内を探検する活動を経験している。自分の町以外を歩き見つけたもの(建物や植物など)や音・においなど感じたことをメモし、自分の町と比べ考えたことを発表した。本単元ではフィジーという国のことを知り、自分の町や国と比較し、異文化を

理解したり異なる文化を認め合っていくことの大切さに気づいたりすることをねらいとしている。

●指導観

本単元の学習を進めるにあたって、児童の興味関心を大切にしていく。教師が実際に体験したホームステイでの暮らしや現地の学校を見て学んだこと、フィジーという国の面白さなどをクイズ形式で理解させたい。また、実際に触ったり、見たり、体験しながら学ぶことができるよう工夫する。

発展途上国に対する考え方や自分が現地で考えたことを児童に押し付けてしまわないように児童自身の言葉を大切にしながら指導したい。そして学級便りで授業の内容や児童の言葉を保護者に伝えていきたい。

04 | 展開計画 (全7時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 (10/5)	【フィジーのことを知ろう】 フィジーという国について、村の生活の様子を知ることによって、これからの学習に興味関心を持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジーの人口や位置、面積などを日本と比べることによって理解する。 ・クイズ形式でフィジーの文化や生活を理解する。 ・文化を実際に体験する。 ・面白いと思ったこともっと知りたいこととお互いに話す。 	PPT 写真・動画 フィジーの服装や小物の実物 ワークシート
2 (10/12)	【フィジーの学校の様子を知ろう】 フィジーの学校のことを知ることによって、自分達の学校と同じところ、違うところについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ形式でフィジーの学校の様子を理解する。 ・写真や映像を見て考えたことを話す。 ・自分の学校と比べて考えたことを話す。 	PPT 写真・動画 フィジーの教科書 ワークシート
3 (10/19)	【フィジーの町の様子を知ろう】 フィジーの町の様子を知ることによって、日本と異なる食べ物や文化について理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ形式でフィジーの町の様子を理解する。 ・日本にもあるもの、フィジーにしかないものなど、日本と比べて考える。 ・日本と異なる文化があることを理解する。 	PPT 写真・動画 フィジーの教科書
4 (11/10)	【発展途上国について考えよう】 世界には貧しい国があることを知ることによって、自分の生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・写真や実際の数字を見て、世界の貧しい国について考える。 ・「世界がもし100人の村だったら」の視点で貧しい国があることを知る。 ・自分の生活を振り返り、考えたことを話す。 	PPT ワークシート 写真・動画
5 本時 (12/7)	【高野さんに質問したいことを考えよう】 これまで学習してきたフィジーのことを振り返ったり、青年海外協力隊の方の仕事を知ったりすることによって、高野さんに質問したいことや見せて頂きたいことを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで学習してきたフィジーのことを振り返る。 ・高野さん、坂口さんの仕事内容について知る。 ・フィジーと青年海外協力隊、この二点について高野さんに質問したいことや見せて頂きたいことを考える。 	PPT ワークシート
6 (12/12)	【高野さんに質問しよう】 青年海外協力隊の高野さんにフィジーの様子を見せてもらうことによってこれまでの学習を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・Skype を使って実際に高野さんに質問する。 ・高野さんに現地の様子を見せてもらう。 ・Skype をして学んだことや感想を話す。 	PPT Skype ワークシート
7 (12/15)	【フィジーの学習を通して学んだことを伝え合おう】 これまでの学習や高野さんに教えて頂いたことの中から最も印象に残ったことを伝えることによって、学習のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでのワークシートやPPT を振り返り、自分が最も印象に残っていることを新聞に書く。 ・自分の新聞を見せ合いながら、お互いに感想を伝える。 	PPT ワークシート

【一時限目】

(1)ねらい

フィジーという国について、村の生活の様子を知ることによって、これからの学習に興味関心を持つ。

(2)児童の活動の流れ

- ①フィジーの位置や人口、面積、産業などを日本と比較しながら理解する。
- ②映像などからフィジーの正装、カヴァなど独自の文化を知る。
- ③クイズを通して楽しくフィジーの村の生活を理解する。
- ④最も印象に残ったこと、もっと知りたいことを話す。

(3)児童の活動の成果・反応

- ・最初にフィジーの国旗や地図、フィジーの人たちの写真を見せ、これからの学習の見通しを話した。青年海外協力隊の方と電話をしてフィジーのことを伝えてもらおうと考えていると伝えると、「しっかりフィジーのこと勉強しておかなくちゃ。」「すごく楽しみ!早くしたい!」と学習意欲がとても高まった。
- ・「フィジーのバスのびっくりするところは?」というクイズに対し、「①天気がいいときは天井が開く②ボタンを押すとどこでも止まってくれる③運転手さんがいない」という答えから選ぶことができるようにした。児童は「本当にこの中に、答えあるのかな。」と言いながらも一つ選び、手を挙げた。答えを発表し、目的地が学校でも正門と裏門に止まっていたことを話すと、「日本でもそうしてほしい。」「すごく便利。でも日本みたいに時間守れないね。」などとそれぞれ自分の考えを話していた。また、窓ガラスがなかったことや、ボタンの代わりに紐があり、降りるときはそれを引っ張ることなどを話すと、それにも驚いていた。
- ・他にも、村の子どもたちがハンカチ落としをして遊ぶ様子を動画で見たり、なわとびをしている写真を見たりすることによって、身近に感じることもできた。村に牛や鶏などの動物がいること、セブセブの儀式、料理の様子なども動画で紹介した。特にセブセブの儀式は興味関心が高く、授業が終わってからも「飲んで見たい。」「飲むとき緊張した?」など話してくる児童が多かった。

〈児童の振り返り〉

- ・バスがどこでも止まってくれるなんて、タクシーみたいだと思いました。紐を引っ張ってベルなることが面白いと思いました。でも、雨の時、ビニールみたいなものを窓にかけても、絶対雨が入ってくると思ったので、面白かったです。
- ・ぼくもカヴァがどんな味が飲んで見たいです。ココナッツでできたカップの中にカヴァが入っていてびっくりしました。カヴァを飲まないで村に入れないのが面白かったです。
- ・外でご飯を作って、虫が入らないのかなあって思ったけど、フィジーの人はとても楽しそうでした。調味料とかはあるのかなあ。
- ・フィジーの人がくれたお花や首飾りが綺麗でした。
- ・わたしもフィジーに行って、子どもたちに会ってみたいくなりました。

(4)使用した教材

自作PPT(写真、動画を含む)、ワークシート

写真1、写真2

【二時限目】

(1)ねらい

フィジーの学校のことを知ることによって、自分達の学校と同じところ、違うところについて考える。

(2)児童の活動の流れ

- ①フィジーの学校の種類や学習科目などを日本と比較しながら理解する。
- ②写真や映像などからフィジーの学校の様子を見て考えたことを話す。

③クイズを通して楽しくフィジーの学校のことを理解する。

④自分の学校と同じところ違うところについて話合う。

(3) 児童の活動の成果・反応

- ・ 学校の話は児童にとって身近だったため、興味深く学習することができた。
- ・ フィジーの教育課程や教科について話すと日本との違いに驚いていた。
- ・ フィジーに給食があると思うか、授業の開始や終了の合図であるチャイムのようなベルがあるか、フィジーの校長室にも日本のように歴代の校長先生の写真が飾られているか、などのクイズは自分たちの学校と似ていることから意欲が高まった。児童は「運動会はあるのかな」「図工室や音楽室も見てみたい」「フィジーの学校に行ってみみたい」などと、質問や感想を次々に口にしていた。

〈児童の振り返り〉

- ・ フィジーの学校にもチャイムがあるところが同じだったけど、フィジーのチャイムは鐘を鳴らしていた。鐘を鳴らすのがとても楽しそうだったからわたしもやって見たいです。
- ・ ぼくの学校と違ってフィジーの学校には給食がないことがわかりました。自分でお昼ご飯を買うなんてびっくりしました。わけは学校にお金を持って行かないと行けないからです。
- ・ ぼくはフィジーの学校は日本と違って8年生までであることがわかりました。とても長いからびっくりしました。
- ・ わたしはフィジーのみんなのダンスがとても上手で驚きました。フィジーの人もわたしと一緒にダンスが好きなんだなあと思いました。みんなノリノリでした。笑顔もよかったです。
- ・ フィジーにいる人たちもわたしたちと同じ、かけ算のお勉強があっぴょくびっくりしました。
- ・ ぼくたちと同じラジオ体操をしていました。初めてしたのにとっても上手でした。
- ・ 教室に机も椅子もあって、わたしたちと同じでした。フィジーの学校に行ってみたいです。

(4) 使用した教材

自作PPT(写真、動画を含む)、ワークシート

【三時限目】

(1) ねらい

フィジーの町の様子を知ることによって、日本と異なる食べ物や文化について理解する。

(2) 児童の活動の流れ

- ①写真や動画を見てフィジーの町の様子を理解する。
- ②日本にもあるもの、フィジーにしかないものなど、日本と比べて考える。
- ③日本と異なる文化について考えたことを話す。

(3) 児童の活動の成果・反応

- ・ 現地の方の写真を見せると、日本人とは違う顔つきで、また外人に会う機会も少ないため、それだけでも嬉しそうだった。
- ・ 豚の頭がそのまま売っていたり、日本とは大きさの違うバナナが売っていたり、町の歩道に座って新聞を売っていたり、日本では見られない光景に興味深々だった。疑問に思ったことは、今度、高野さんに聞いてみよう、と意欲的だった。
- ・ 魚がそのまま売っていることに対して、驚くと同時に、食べるのこわいなあ、本当に食べられるのかなあ、などと素直な感想も話していた。

〈児童の振り返り〉

- ・ フィジーの人は「写真を撮って。」と言ったら、笑顔で一緒に撮ってくれて優しいなと思いました。わたしだったら「え?」と思います。フィジーの人はみんな幸せそうでした。
- ・ 魚を氷なしで並べるなんて日本と違うなと思いました。ぼくは本当に食べられるのかちょっと心配です。
- ・ フィジーのお店に豚の頭がそのまま売っていてびっくりしました。どうやって食べるのかなと思いました。でも映画館もマックもあって日本と同じだと思いました。

- ・教会がきれいでした。わたしも教会に行ってみたいです。
- ・タロイモって美味しそうです。食べてみたいです。他にも食べてみたいものが色々ありました。

(4)使用した教材

自作PPT(写真、動画を含む)、ワークシート

写真3、資料1

[四時限目]

(1)ねらい

世界には貧しい国があることを知ることによって、自分の生活を振り返る。

(2)児童の活動の流れ

- ①世界の人口、話されている言語、など簡単に紹介する。
- ②「世界がもし100人の村だったら」という観点で、様々な視点から世界を捉える。
- ③世界の貧しい国の写真を見て、世界の問題や写真を見て考えたことを話す。
- ④自分の生活を振り返って、感想を書く。

(3)児童の活動の成果・反応

- ・二年生という発達段階において、貧しい国の話は少し難しかったと感じた。世界という概念が曖昧なのに、割合や数字で示しても理解が難しいのだと感じた。
- ・貧しい国の写真を見せても何を伝えたいのか、考えさせることは難しいと感じた。
- ・言葉の意味も乏しいので、私自身が二年生が分かるように話すことをもっと学びたいと思った。

〈児童の振り返り〉

- ・日本でおいしい給食が出てくることは当たり前じゃないんだなあって思いました。食べ物のない国の人に少しでも食べ物をあげたいです。わたしは残さないようにしたいです。
- ・四秒間に一人の人がなくなってしまうことに驚きました。お金がなくて食べ物がなくてやせてなくなってしまうなんて初めて知りました。みんなが健康でいてほしいです。
- ・電気がなくてマックの光で勉強している子の写真が一番心に残りました。電気がない家があるんだって聞いてびっくりしました。家のことも知りたいです。
- ・これから自分ができることは、すぐに捨てたり残したりしないことだと思います。貧しい国が日本にくれた食べ物や材料も大切にしたいです。
- ・今にも死んでしまいそうな人の後ろに鷹がいる写真が心に残りました。その人のことを知らなくても人が死んだら悲しくなります。

(4)使用した教材

絵本「世界のひとびと」、JICA PPT、ワークシート

[五時限目]本時

(1)ねらい

これまで学習してきたフィジーのことを振り返ったり、青年海外協力隊の方の仕事を知ったりすることによって、高野さんに質問したいことや見せて頂きたいことを考える。

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 10分	1 これまで学習してきたフィジーのことを振り返る。	・これまで学習してきたことで印象に残っていることを発表させる。 ・PPTでこれまでの学習を振り返ることができるようにする。	PPT 掲示
高野さんに聞きたいことを考えよう			
展開 10分	2 フィジーのことについて、高野さんに聞いてみたいこと、またフィジーの人に伝えたいことを考える。	・フィジーの生活、学校、町の様子について、疑問に思ったことや深めたいことをグループで話合わせる。	ワークシート
10分	3 青年海外協力隊の方の活動について知る。	・PPTを使って、青年海外協力隊の方の活動を伝える。 ・活動の内容を聞いて感じたことを発表させる。	PPT
8分	4 青年海外協力隊のことについて、グループで高野さんに聞いてみたいことを考える。	・仕事内容や高野さん自身のことなど、聞いて見たいことを自由に話合わせる。	ワークシート
まとめ 7分	5 高野さんに質問したいことを発表する。	・次時の学習の見通しを持つことができるようにする。	

(2) 児童の活動の成果・反応

- ・グループで意欲的に質問を出し合っていた。グループで考えた質問を、生活のこと、町の様子のこと、学校生活のことに分類することができた。
- ・廊下にこれまでのクイズが掲示してあったので、これまでの学習内容を振り返ることもできた。

(4) 使用した教材

自作PPT、ワークシート、ふせん

写真4、写真5

【六時限目】

(1) ねらい

青年海外協力隊の高野さんにフィジーの様子を見せてもらうことによってこれまでの学習を深める。

(2) 児童の活動の流れ

①Skypeを使って実際に高野さんに質問したり、現地の町の様子を見せてもらったりする。

②Skypeをして学んだことや感想を話す。

(3) 児童の活動の成果・反応

- ・実際に現地の方に現地語で挨拶をしたり、町の様子を見せてもらったりしたことで、とても楽しそうに学習をしていた。
- ・あらかじめ考えていた質問だけでなく、町の様子を見て聞きたくなった質問もどんどん出てきて、高野さんにたくさん答えて頂くことができた。
- ・本やインターネットでは分からない、現地の人にしか分からないような細かいことまで教えて頂くことができた。

〈児童の振り返り〉

- ・フィジーの人と挨拶をすることができてうれしかった。
- ・ずっと気になっていた豚の頭が、フィジーのお肉やさんでは飾りかもしれないということを知って驚いた。

・ フィジーの人は温泉に入らないと言っていたので、温泉を教えてあげたいと思った。

(4)使用した教材

Skype、自作PPT、ワークシート

写真6、写真7

【七時限目】

(1)ねらい

これまでの学習や高野さんに教えて頂いたことの中から最も印象に残ったことを伝えることによって学習のまとめをする。

(2)児童の活動の流れ

①これまでの学習を振り返る。

②自分が印象に残ったことを二つ考え、それについて新聞にまとめる。

③グループで自分の新聞を見せ合い、感想を伝え合う。

(3)児童の活動の成果・反応

・ 第一時から学習してきたことをしっかり覚えていて、自分の書きたいことをすぐに決めることができる児童が多かった。

・ 日本とは違う文化のことを楽しく学習してくれたことが伝わった。

〈児童が作った新聞例〉 写真8、写真9

(4)使用した教材

自作PPT、ワークシート

≫ 授業実践の様子



写真1 木でできた製品を体験する児童



写真2 カヴァを飲むボールを触っている児童



写真3 廊下に掲示したフィジーのクイズ



写真4 ふせんに書いて質問をまとめる児童



写真5 ふせんでグループの質問を整理する児童



写真6 Skypeで高野隊員に質問をする児童



写真7 Skypeを通して見たフィジーでの魚の売り方



写真8 児童が作った新聞1



写真9 児童が作った新聞2

06 | 本時の振り返り

単元を通して、児童はとても意欲的に取り組むことができた。普段の生活では、触れることのない文化について、本で調べるのではなく、実際の映像や写真を通して触れることがとても楽しそうであった。また、高野隊員にSkypeを通して現地の方と挨拶をさせて頂いたり、フィジーのスーパーや町の様子を見せて頂いたり、自分一人では簡単にできない経験を私も児童もさせてもらった。実際に見たことで、児童は新たに考えや疑問が生まれたり、自分も行ってみたい、という気持ちになったりしていた。学習の最後に書いた新聞からは、児童一人ひとりが印象に残ったことや興味があることが伝わってきて、嬉しかった。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

- ・ フィジーの学習を進めていくにつれて、児童一人ひとりが何に興味があるのかが明確になってきた。「フィジーはおもしろそう」などと抽象的に話していた児童が、学校の様子に興味を持ち、「運動会はあるのかな」「授業の合図のベルは先生以外も鳴らしているのかな」など細かいところまで、質問をするようになった。
- ・ 第一限の段階から、写真や映像を見て、日本よりも開発が遅れている、ということ子どもなりに理解したようで、「日本の方が・・・」という視点で考えている児童が多かった。しかし、学習を進めるにあたって、「フィジーの人って親切だね」「フィジーの人ってダンスが好きなんだね。楽しいことが好きなんだね。」などと、良いところや素敵などところを探すようになった。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

- ① 発展途上国の写真を見せたとき、「電気がなくてかわいそう」「自分たちと同じような年齢の子どもがはたらいっているなんてびっくり」と事実に対する感想だけを述べていた。
- ② ただ、外国とだけ聞いて「行ってみたい」と言ったり、自分たちと顔付きの違う現地の方を見て嬉しくなりしていた。また、生活の様子で「バスに窓がないなんて大変」「部屋が二階にあるなんてびっくり」などの感想を話していた。

(授業後)

- ① 発展途上国の産業や特産物を説明し、日本にも発展途上国で作られたものがたくさんあることを学習した。すると、日本も発展途上国から様々な生産物を輸入しており、「自分にできることは、発展途上国からもらったものを大切にすることだ」という振り返りを書いている児童がいた。
- ② 「フィジーの人はダンスが好きだから、私もフィジーの人と一緒にダンスをするために行ってみよう」と異文化に触れてみたいという気持ちが高まっていた。また、「バスに窓がなかったら、雨が降った時どうするのだろう」「どうして部屋が二階にあるのだろう」と異文化のことについて想像したり、理由を考えたりするようになった。

1 苦労した点

- ・ 第四限目で、貧しい国について扱うとき、二年生の発達段階には理解が難しいところも多々あった。「かわいそう」「日本に生まれて良かった」などの感想で終わってしまわないように、言葉に気を付けたり、伝えるべきことと伝えなくても良いことを吟味した。

2 改善点

- ・ 写真を多く使うと児童が理解しやすくなるが、PPTに写真を入れすぎたため、子どもに見せたときに画像が壊れていたことがあった。PPTをいくつかに分けたり、写真の画質を落としたりする必要がある。
- ・ 貧しい国の話は低学年には難しいと感じたので、伝え方を工夫すべきである。

3 成果が出た点

- ・ フィジーの様子をクイズ形式で話したことによって、楽しく学習を進めることができた。また、クイズを廊下に掲示したことによって、他学年の児童も関心を持っていた。
- ・ 生活の様子、学校の様子、町の様子を紹介したが、すべて自分たちの生活と比較したり、あらかじめ予想したりして、学習を進めた。そうすることによって、児童が身近に感じられ、分かりやすく伝えることができた。
- ・ 学習を進めるにあたって、グループやペアで考えを伝え合う機会を多くもったことにより、児童が自分の考えを深めたり、広げたり、新たな視点に気付いたりすることができた。

4 備考（授業者による自由記述）

子どもたちが意欲的に取り組んでくれたのでとても嬉しかった。フィジーがテレビで映っていると、次の日学校で教えてくれたり、クイズを出してくれたりした。子どもたちの世界を広げることができたと実感している。自分自身もとても勉強になった。素敵な機会をありがとうございました。

【添付資料】

マーケットPPT(自作PPT)より一部抜粋 資料1

【参考資料】

絵本「世界のひとびと」ピーター・スピア

ウィキペディア フィジー

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A3%E3%82%B8%E3%83%BC>



資料 1

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

今回の研修で、主眼をおいた点は二点ある。

一つは、日本の子どもたちの世界を少しでも広げたいということである。現在担任をしている子どもたちに発展途上国のこと、日本とは違う文化のこと、青年海外協力隊の方のことなど、自分が研修を通して学んだことを伝えたいと考えた。自分自身、小学生の頃から発展途上国や海外の暮らしなどに興味関心はあったが、実際に海外に行って学ぼう、と行動を起こしたのは、社会人になってからであった。海外が遠い存在であるように思っていたからである。しかし、社会人になった今、海外に出たいと思っても中々都合がつかずなかなか、仕事を辞める勇気がなかったりする。小さいうちから、もっと身近に海外のことを学んだり、知ったりする機会があれば違ったのかもしれないと思うようになった。英語もしっかりと勉強したいと思うようになった。だから、目の前の子どもたちに、日本以外の国に触れる機会を与えたり、世界には青年海外協力隊のような活動があることを伝えたりしたいと思った。まだ、二年生なので、すぐに行動を起こすことは難しいと思うが、私が話をするだけで、将来の職業選択の幅が広がれば良いと考えた。まずは子どもたちに海外に興味を持ってもらうために、研修の間、日本とは違って「面白い」「なぜだろう」と思うことができるものを探した。私も異文化に触れた時、それを体験した時、ワクワクする。そのワクワクを子どもたちにも伝えたくて、写真や動画に納めた。例えば、フィジーのバス一つとっても、外観、乗り方、降り方、周りの風景など様々なことが日本とは異なり、子どもたちにとっては新しい文化であると考えた。

もう一つは、海外の人たちの温かさ、明るさ、優しさなどの理由が知りたいと思ったことである。また、触れることによって、自分自身のことを見つめ直すことも出来る。協力隊の竹内隊員が「日本と違う笑顔の秘密を探すため」にここに来たと話されていたことが印象的で、すごく共感した。私は、人見知りで人とのコミュニケーションには自信がない。でも、これまで二度海外でホームステイをした時、言語も違う、知らない人、知らない土地なのに、私は日本にいる時よりも積極的にコミュニケーションをしていた。自分にこんな力があつた、と知らない自分に沢山気付くことができた。ホームステイ先の家族だけでなく、街に出ると全く知らない人が親切にしてくれたり、挨拶をしてくれたりする。自分が受け入れてもらえているという安心感で、どんどん自分も積極的になっていくのがわかった。そして、自分も相手を幸せにできる、温かさを与えられる人になりたいと強く思った。日本では触れることができない温かさに触れたい、相手を幸せにしてくれる海外の方々の秘密を知りたい、と考えて研修に参加した。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

研修に行く前は、事前研修で発展途上国のことを学んだことや、自分の勝手なイメージで、私たちに何ができるのだろうか、と考えていた。お土産を選んでいる時も、こんなものはきっとないだろう、どんなものが喜ばれるだろう、と考えていた。しかし研修に行き、自分たちの立場が上で、色々なものを持っていると思っていたこれまでの考え方が恥ずかしくなった。途上国には、日本では見られない温かさ、日本が忘れてしまったような幸せなどが沢山あつた。どちらが幸せなのかわからなくなった。

私はホームステイに行った時、ステイ先の洗濯物を干す手伝いをしていた。ステイ先には、幼い子どもが二人おり、使い込んだ子ども服をお母さんと私で干していた。その中に私の好きなキャラクターの洋服があつた。遠く離れた国でも人気なんだ、と思うと同時にたまたまその時、私とそのキャラクターのタオルを持っていたので、これをあげたら子どもは喜ぶかな、と考えた。でも、すぐにその考え方はおかしいということに気付いた。私がそれを与えることをステイ先の方たちは本当に望んでいるのだろうか、初めて来た人がこんなものは持っていないだろう、と考えて与えることはとても失礼なことなのではないか、と考えた。ものがないから不幸だとは決して言えない。そんな風に思うのは、他にもっと便利なものがあることを知っている

から、比べてしまうからだと思う。そもそも知らなかったら、比べる必要なんてない。それどころか、フィジーの人たちは、どんなものもみんなまで分けたり、共有したりしていた。大学を訪問した時、たまたま通りかかった学生のグループがランチをしていて、一緒に食べよう、と席を空けてくれた。WAIVOU村の方も作った料理や採れた野菜などを近所の人とシェアしていた。夜になったら、親戚みんなが集まって、カヴァを飲んだり、ダンスをしたりして楽しんでた。人の付き合いを強く感じた。日本と比べると、電気もないし、お湯もない、水道もない、トイレのない家もあった。しかし、フィジーの人たちはみんな幸せに毎日を過ごしていた。私が勝手に色々とものを与えても、自己満足に過ぎない。この人たちはもうすでに幸せだ、と考えるようになった。

では、支援とはどうすることなのだろう、と疑問を持つようになった。今回の研修で、フィジーの教育、医療、環境、など様々な分野について学ぶことができた。教育では、情操教育にあまり力を入られていないこと、教師の教え方に問題があること、などを学んだ。青年海外協力隊の坂口隊員が活動されているところを見ることによって、医療では部品が不足していること、透析などの診療にはお金がかかり医療を十分に受けられないこと、また生活習慣病の問題があることがわかった。高野隊員の活動では、ごみを分別する意識が低いことや焼却の技術が低いことなどの問題がわかった。これらの問題を勝手になんとかしようとするのではなく、まずはこちらが相手のことを理解し、そして相手が本当に必要だと思ってから、共に改善していくことが重要だと考えた。大黒のオーナー林さんが「当たり前を変えるのは大変」と言っていたことが心に残った。いくら支援といっても相手の生活や周りの環境のことを大切に思う気持ちを一番に考えないといけないのだと思った。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

自分の成長に繋がったと思うことは、沢山ある。教師として、一人の人間として、自分を客観的に見て、様々な観点で成長できたと感じる。教師として自分に自信が持てたことがある。私は、大学の頃から特別支援教育に携わりたいと強く思っていた。しかし、現在その考えはあまり受け入れられず、それどころか「特別支援学校の子どもを選ぶということは、通常の学校の子どもと区別しているということである」と言われたことがある。その時、私は自分がなぜ特別支援が必要な子どもたちと関わっていきたくいのかわからなくなった。自分が思っているような理由では、特別支援教育に携わってはいけないのだろうか、と考えた。でも、マリスタシャンプーンの教諭に特別支援が必要な子どもたちの魅力を尋ねると、次から次へと私が共感できる答えを返してくれた。子どもが素直で表現豊かなところ、毎日何か面白い出来事が起こること、昨日まで出来なかったことが今日突然出来てその成長に大きな喜びを感じられること、などであった。この答えを聞いて、私は自分の思いに自信が持てた。こんなに遠いところで、自分を理解してくれる人がいるということが、とても心強かった。これからも自分の気持ちを信じて、夢を諦めずにいたいと強く思った。また、一人の人間として、今回自分を含め、十一人もの先生と研修に参加したことによって、自分が気付くことのできなかった様々な観点から途上国を見ることができた。先生方と話すことによって、新たに考えたい問題が出てきたり、自分の考えがぐちゃぐちゃになってわからなくなってしまったり、研修の間ずっと自分と対話していたように思う。とても勉強になった。最後に、色々な方とコミュニケーションをとる中で、自分を客観的に見たり、人から言ってもらったりして、自分に自分が知らなかった新たな一面があることに気付くことができた。そして、もっともっと自分の内面を磨きたいと思うようになった。フィジーの方たちのように、どんな人にも温かく、いつも明るく、人に幸せを与えることのできる人になりたいと思うようになった。

子どもたちに特に伝えたいことは、途上国の人たちも元気に生活をしている、自分たちと同じように将来の夢を持ち、勉強し、遊び、美味しいものを食べている、ということである。自分が実際に見た途上国の良いところ、身近に感じることができるところを子どもたちに伝え、少しでも海外に途上国に目を向けて欲しいと考える。途上国と聞くと、どうしても怖い、とかかわいそうなどと思い、世界には貧しい国もある、という考えで終わってしまいがちだ。でも、その中でも生活をしている人々の暮らしを実感と共に伝え、私がこの研修

で幸せとは何か、と問い続けたように、子どもたちにも自分の幸せの価値観について考えて欲しいと思う。これからの人生色々なところで幸せを感じてくれたらいいなと考える。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

私は、世界中の途上国の現状とともに私が実際に見てきた人の温かさや生活の知恵やルールなど、表も裏も子どもたちに伝えていきたいと考える。そして、授業参観など、親子で考えることができる機会を設けたいと考えている。算数の筆算の仕方を考えたり、音読発表をしたりするところを見てもらうのももちろん必要だと考えるが、親御さんも一緒になって途上国のことや平和のこと、異文化理解を考えて欲しいと考えるからである。そうすることで、子どもも親の考えを聞いて、考えが深まったり、親御さんも子どもの意見に考えさせられたりすることがあるのではないかと考える。そのために私は伝える時に工夫をしたいと思う。楽しく考えてもらうために、見てきたことをクイズ形式にしたり、身近に感じてもらうために石川県出身の青年海外協力隊の方に来て頂いたり、実感できるように実際のものや洋服を手にとって体験型にしたりして伝えていきたい。

5 研修に関する全般的な所感

今回の研修では、一人で旅をしたのでは決して学ぶことのできない貴重な体験や学びをさせて頂くことができた。参加をする前は、小学校訪問とホームステイが楽しみで、もっと長くホームステイができればいいな、などと考えていた。しかし、今回のプログラムで何一つ行かなくても良かった、と思った所はなかった。どのプログラムでも発見があった。また、結びつけて考えることもできた。フィジーの良いところはもちろん、問題となっていること、一緒に考えていきたいこと、フィジーで働くことの難しさ、など全てを学ぶことができたから、あらゆる方面からフィジーという国を考えることができたのだと思う。昨日疑問に思っていたことの原因が今日見つかったり、余計にわからなくなったり、日々考えるテーマを与えて頂いた。また、JICAスタッフの方々も私たちと同じ日程で行動して下さっているのに、体調を心配して下さったり、声をかけて下さったり、親身に接して下さった。とても感謝している。

6 JICA に対する要望・提言

青年海外協力隊に興味があっても、二年間と言われるとすぐに決断することができない。そんな中で今回のような短期間で様々な視点から考えることのできる研修を企画して下さい、学ぶ機会を設けて下さり、とても感謝している。短期間であると気軽に参加することができると思うし、これから還元していく内容や方法などもお互いの意見を聞いて多くのことを学び合うことができる。ぜひこれからも多くの先生方に参加できるようにして頂きたいと考える。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

どんな小さいことでも自分が思ったこと、考えたことを周りの方と共有したり、つぶやいたり、質問したりして欲しいと考える。私は、毎回の振り返りの時に先生方が話してくれることやバスの中で話したこと、中間発表に向けてグループで話し合ったことが、とても勉強になった。自分の考えを深めることもできるし、新たな視点で物事を考えることもできるからである。皆さんはこんなこと思っていないだろうな、ということでも話してみると思いも寄らず、共感してくれて、とても嬉しかったことを覚えている。参加者の皆さんと対話することが自分の学びにつながることを実感した。

日本のエンジニアに求められること

氏名	千徳 英介	学校名	福井工業高等専門学校		
担当教科	機械工学	実践教科	イングリッシュ・カフェ(12/12)		
時間数	30分	対象学年	本科生、専攻科生、教職員	人数	40名

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

- ・海外の日本とは異なる文化や考え方に興味を持ち、認識し、受け入れることの大切さを理解する。
- ・このような理解を通して、日本のエンジニアとして将来的に活躍するために求められることを考えられるようになる。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	海外の文化や考え方に興味を持つことができる。
(イ) 思考・判断・表現	エンジニアとして海外へ出ていく際に、どのようなことを意識しなければいけないかを考えることができる。
(ウ) 技能	
(エ) 知識・理解	日本とは異なる文化や考え方があることを認識し、それらを認め、受入ることの大切さを理解できる。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

(1) 学生観

授業は、英語教員が主体となり英語や海外について興味を持つ学生を集めて定期的に行っている講演会であるイングリッシュ・カフェにて実施した。カフェへの参加者は、1年生から専攻科2年生(大学2年相当)の英語や海外へ興味を持っている学生が中心であるが、3年生の英語授業の一環ともなっているため、それほど英語や海外へ興味を持っていない学生も見込まれる。その他、国際交流委員をはじめとするグローバル人材育成に携わる教職員も参加予定である。

(2) 教材観

授業では、前半では海外、国際理解、国際協力への興味喚起、後半ではエンジニアとして国際社会に出ていく時に求められることの提示を行える教材とした。特に、直感的にフィジーの雰囲気を感じられる写真を示して、フィジーの様子を想像できるように配慮した。

(3) 指導観

本校の学生は、卒業後に海外に生産拠点を有する企業に就職し、海外へ出張したり赴任する者も少なくない。そのため、授業を通して、まずは海外や異文化への興味を持ってもらうために楽しさを強調して伝え、その後グローバル人材に求められることを海外研修で直接見聞きした事柄をもとにして伝えたいと考えている。さらに教職員や保護者にとっては各自のグローバル人材像の確立の一助となるものにしたいと考えている。

04 | 展開計画 (全 0.5 時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	フィジーを通して日本のエンジニアに求められることを考える。	スライドを使ったプレゼンテーション 内容: 1.フィジーの紹介(文化、食事、幸福度) 2.フィジーで考えたこと 3.日本のエンジニアに求められること 4.国際協力について	パワーポイント 自作教材【資料1】

05 | 本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	1.フィジーの紹介 ○基本情報を学習する ・フィジーの概要 ・フィジーの歴史・文化・生活	・人口やGNIなどの数字を、身近なものと比較して伝える。 ・文化と歴史が密接につながっていることに気づくようにする。	パワーポイント 自作教材【資料1】
展開 (10分)	2.フィジーで考えたこと ○現地で見たことを共有して、異文化理解すること受け入れるということについて考える。 ・フィジー人の考え方 ・日本人の受け入れ方 ・考えたことのまとめ	・自分の疑問や迷いを表現するにとどめて、どのように異文化を理解し、受け入れたら良いかを考えさせるようにする。	
まとめ (10分)	3.日本のエンジニアに求められること ○日本のエンジニアに求められることを考える。 ・異文化理解を積極的に行う。 ・Co-Creationの意識を持つ。 ・粘り強くより良い道を模索する。 4.JICAについて ○JICAの活動の紹介を通じて国際協力について考える。 ・JICAの使命と活動の紹介		

≫ 授業実践の様子



授業の様子

学生たちは、授業中の問いかけにも積極的に回答するなど、興味を持って聞いていた。

06 | 本時の振り返り

授業内容の概要紹介では、フィジーが幸福度世界1位であることを全面に出して、授業内容に興味を持ってもらうことにした。その結果、予想よりも多くの学生がイングリッシュ・カフェに参加してくれたことは良かった。

授業の冒頭にフィジーという国を知っていますか?という問いかけをしたが、ほとんどの学生が知らないという回答のため、授業計画通りに実施した。授業では、フィジーと日本の違いについて、海外研修で体験したり、見聞きたりしたことを中心に紹介した。この際に、ただ違いがあるだけで、違いに良い悪いがあるわけではないということを特に強調した。最後に日本人エンジニアに求められることとして、違いを認め、受け入れながら新しいものを共に創る意識が大切であることを提案した。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

現段階での具体的な変容を示すことはできないが、本授業がきっかけとなって留学や海外インターンシップに積極的に挑戦する学生が増えることを期待している。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

フィジーという国の存在を知らない学生が多く、国名を聞いたことがあっても「東南アジア」の国だと認識している学生もいた。また多くの学生は、企業の行っている海外進出について意識したことがあっても、国が行っている途上国支援や国際協力について考えたことが無いようだった。

(授業後)

授業内で示したフィジーの様子を見て、「フィジーに行ってみたい」や「楽しそう」という感想があり、フィジーへ興味を持つ学生がいた。また、国際協力について「日本がどのように支援をしているのか知らなかった」や「良い支援を行うのは難しい」などの感想があり、国際協力について考えるきっかけを作ることができた。

08 | 自己評価

1 苦労した点

あらかじめどのような学生が参加するかがわからない授業だったため、どの学年に焦点を合わせた内容にするか決定するのが難しかった。また事前に同様の授業を別の報告会で実施していたため、参加者の様子を見て発表内容を変えようと考え、たくさんのスライドを用意したが、授業で十分に活用できなかった。

2 改善点

エンジニアに求められることとして、自分たちとは異なる文化や考え方を持つ人々と「共に創る」ことを意識する必要がある事をしっかり伝えたかったが、少し駆け足になってしまった。青年海外協力隊の活動やJICAの技術協力プロジェクトの内容や、そこで活躍する日本人の考えを詳しく紹介できるとより「共に創る」という考え方が伝えられたと思う。

3 成果が出た点

自分自身がこれまで全く興味関心を寄せていなかった国際協力について、事前学習や海外研修を通して知り、興味を持てたことが良かった。また海外研修は、途上国や支援について肌で感じ、自分で考えることが求められる内容であったため、フィジーについて学生に話す時に自信を持って伝えることができるようになった。

また海外の面白さを学生に伝える際に、日本とは遠く、対象的な国民性を持ちながらも、親しみやすいフィジーという国を題材にできることで、学生の海外への興味を喚起する効果が大きかったと感じている。

4 備考（授業者による自由記述）

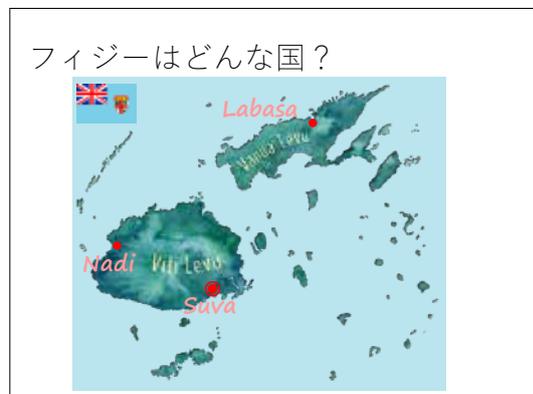
その他、下記のように授業を行った。

- ・ 100名程度の学生、教職員を集めた海外研修報告会においても同様の内容で講演を行った。
- ・ 担当授業の終わり5分程度を使ってフィジーや国際協力についての説明を数回行った。

また国立専門学校機構主催の国際交流関連のワークショップの中で理事長から、これからは高専教育にSDGsを取り入れていかなくてはならない、という言葉があるなど、工学教育の分野においても、途上国支援や開発を意識することが非常に重要視されるようになってきている。一方で、このような途上国支援や開発について教員が学ぶ場や時間が用意されていないのが現状であり、本教師海外研修が貴重な場として今後ますます重要になると感じている。

【添付資料】

パワーポイント自作教材(一部抜粋) 【資料1】

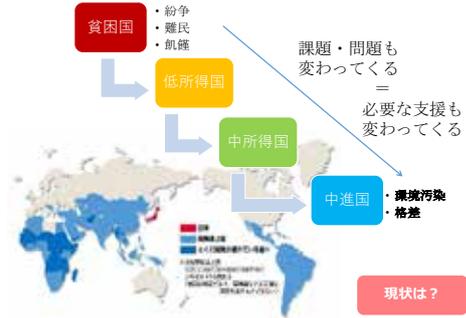


途上国の分類

～所得階層別分類（国連及び世銀の分類による）～

所得段階	一人あたりGNI (平成22年)	国の例
LDC (後発開発途上国)		アフガニスタン、ウガンダ、エチオピア、カンボジア、コンゴ民主共和国、シエラレオネ、ソマリア、タンザニア など49ヶ国
貧困国	US\$ 1,005以下	ケニア、シンバブエ、タジキスタン など
低所得国	US\$ 1,006以上 US\$ 1,915以下	インド、ガーナ、カメルーン、コートジボワール、ナイジェリア など
中所得国	US\$1,916以上 US\$3,975以下	イラク、インドネシア、ウクライナ、エジプト、エルサルバドル、ガイアナ、カーボヴェルデ、グアテマラ、グルジア、コンゴ、コンゴ共和国、シリア など
中進国	US\$ 3,976以上 US\$ 6,925以下	イラン、エクアドル、グレナダ、コスタリカ、コロンビア、ジャマイカ、タイ、中国、チュニジア、ドミニカ共和国、パラオ、ヘルマン、南アフリカ など

開発途上国でも発展度合いには大きなレンジが存在する



スバの町並み



日本車いっぱい！プリウスいっぱい！



フィジーの人々

・明るく朗らか！幸福度世界1位！



	Fiji	Japan
Unweighted Base	912	1161
Weighted Base	912	1161
Very happy	14.2	14.9
Happy	32.5	33.8
Neither happy nor unhappy	39.1	39.2
Unhappy	9.2	10.1
Very unhappy	2.9	3.9
Happy	46.7%	48.7%
Unhappy	12.1%	14.0%
Do not know / No response	-	8.4
	7%	7%

85 percent or lower score on

2016年世界幸福度調査結果

大きな家族



何も問題はないよ！



大黒レストラン



【参考資料】

ギャラップ社による2016年幸福度調査結果、

http://www.wingia.com/en/services/end_of_year_survey_2016/10/

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

私が所属する高専は、エンジニアを育成しており、卒業後に海外勤務に就く学生が多くいる。本研修には、エンジニアとして国際社会に出ていく学生たちに、世界の実情や日本に求められている役割などを知り、グローバル人材像を確立できような経験を期待して参加した。特に、フィジーの人々がどのような生活を送り、どれくらいの生活水準を持っているのかに興味を持っていた。その現状に対して、青年海外協力隊の隊員を始めとする日本人がどのように活動しているのかに主眼をおいた。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

スバの街を見たときは、正直拍子抜けをした。自分が住む街よりも高いビルが立ち並び、少し運転は乱暴だがピカピカの日本車が走り回り、最後までイマイチ見方がわからなかったが歩行者信号があり、街のあちこちでスマートフォンを片手に電話をしている。あまりに日本と変わらぬ風景に途上国とは何かと？まず疑問に思った。しかし、研修が進み色々なお話を聞いたり、場所に伺ったりする内に日本から遠く離れたフィジーという国の風景が日本と変わらないというのは不自然なことだと考えるようになった。そう考えて周りを見てみると、自動車はトヨタ、日産、スバルなどの日本の製品、スマートフォンは中国、台湾、韓国の製品、スーパーマーケットに行けばニュージーランドなどで作られたお菓子が並んでおり、ランバサ病院では医療機器は日本製もあるがコストで勝る中国製が多いと聞いた。この国には国外の製品が多くメイド・イン・フィジーのものが非常に少ないことに気づいた。このことは、日本と同様にフィジーもグローバルな市場に飲み込まれていることを示している。日本のようにある程度の国際的な競争力を持った上で、グローバル市場に参加しているならばお互い様ということもあるだろうが、途上国がこのような市場に飲み込まれてしまうと、国外から次々と安くて良いものが手に入り、自国でもものづくりをする力が阻害されてしまっているように思う。そして、日本企業もそれに加担していると言えるのではないかと思う。一方で、JICAをはじめとする国際協力または支援を行っている団体は、ドネーションを国家予算に組み込んでしまい、いつまで経っても自立できない国にならないように自立を促すような協力を目指していると聞いた。

国の自立という意味では、正反対のベクトルを持つように見えるグローバル市場と国際協力を日本としてどのように両立するのか非常に難しい問題があると感じた。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

自分の成長に繋がったことは、日本に住む自分達を客観視することで、改めて日本の強い所と弱い所を認識できたことである。フィジーにいる間、日本ならこうであるとか、日本人ならこうするとか、常にフィジーと日本の比較を行っていたように思う。フィジー人の明るい笑顔や自己肯定感の高さは、自分には非常に眩しく、自分も含めて日本人はなぜこのように生きられないのだろうかと考えて、また自分の自己肯定感の低さを実感したりした。一方で、大黒レストランの林さんや海外青年協力隊の皆さんのお話からは、共通して日本人の責任感の強さと粘り強さを感じた。加えてJICA北陸の武田さんの海外赴任の経験談やJICAフィジー事務所スタッフのお話や姿から自分の中でのグローバル人材像が確立できたと考えている。

学生達には、私がグローバル人材に必要なと考える以下の点を伝えたい。

1. その国の文化や歴史を理解し、異なる文化を持つ人々の生活や気質などをよく知ること。そのためには、実際に行ってみないとわからないことが沢山あることも伝えたい。

2. "Co-Creation"という考えを持つこと。これは、JICAフィジー事務所の塙水尾次長が述べられた言葉であるが、日本人が国外に出て、何かを成す時は、その国の人々とともに成長し、ともに作り上げる必要があることを伝えたい。また上記したように、自分たちの強い所と弱い所を認識して、さらに相手国の強い所と弱い所を認識できれば、互いに補い合うような関係を築くことが出来る。それを目指して欲しいと思っている。

3. その上で、今回私が研修で感じたような豊かさとは何か、グローバル市場はどのようにあるべきか、国際協力とはどうあるべきか、などの問題意識やジレンマを感じながらも、粘り強くより良い道を模索できることを伝えたい。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

本研修で得られた知見は、学生に対してと教員に対しての2方向に発信していきたいと考えている。

学生に対しては、報告会だけでなくイングリッシュカフェのような定期的なイベントや担当授業や日常会話を通して、国の生活習慣、宗教、政治などの体験的な話をしたい。また、日常の風景の写真を多く載せたポスターを作成したりし、掲示することで国外への興味を喚起して行く。その他、年度始めに行う海外インターンシップの説明会などでも、この研修で得た、国外に出て実際に目にする事の大切さを伝え海外インターンシップへの参加者を増やしたい。

また教員に対しても、報告会を開き本研修の体験を共有することで、教員側の海外への意識を高められると考えている。この報告が次年度以降の本研修への参加のきっかけを作り、学校全体としては国際理解教育・開発教育およびグローバル人材育成を行っていく雰囲気醸成に繋がるようにしたいと考えている。

5 研修に関する全般的な所感

研修最終日の報告会の発表内容をまとめるに当たり研修全体を振り返った時、絶妙なプログラムだなと感じた。前半は、学校訪問やホームステイなどを通してフィジーの朗らかで温かな人々と出会い、なんて幸せな国なのだろう、と思わせるような明るい部分が強調された内容であったが、後半は、大黒レストランの林さんのお話や青年海外協力隊の隊員のお話などからフィジーの問題やフィジー人の気質の負の側面(日本人から見ればですが、)などが強調された内容であり、参加者に自ずと国際協力や支援に対する迷いや疑問を抱かせるようになっていたと感じた。

また1日ごとに振り返りの時間が設けられていたり、追加での情報共有をしていただいたり、常に研修と向き合う雰囲気が作られており、密度の濃い時間を過ごせた。さらにチームごとに報告会を行うことになり、校種も年代も違う参加者間で自然と対話が生まれたのも非常に刺激的だった。

6 JICA に対する要望・提言

プログラムの計画から先方とのアポイントメントなどJICAの方々には多大な労力を割いていただき感謝の言葉しかない。個人的には、研修の充実度も然ることながらJICAスタッフの国際協力への思いや含蓄に富んだ経験談が、非常に印象深いものとなった。高専からの参加ということで、他の参加者やJICAの思惑とは少し視点がズレていると思われる点があるかもしれないが、私の力不足ということでご容赦いただき、今後も高専から応募があった際は、是非に採用していただきたい。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

- ・2度の事前研修があり、それなりに勉強をしたつもりであったが、もっとフィジーについて勉強しておくと思いたいの解釈がより深いものとなったと思う。
- ・報告書の正確を期するためにいろいろなお話をICレコーダーなどで記録しておくのと良かった。メモだけでは曖昧なところが出てしまった。
- ・ホームステイ先では、家族の写真が喜ばれた。
- ・10万円程度フィジドルに換金すれば、おみやげなどを買ってちょうど良いくらいだった。
- ・JICA事務所の近くのJacks(店名)とスーパーに行けば、だいたいのお土産は揃った。
- ・カヴァはパッケージになったものが売っている。帰ってから意外と飲んでみたいと言われたので、買えたら買って帰るのが良い。

見つめよう 世界との絆 ～幸せとは～

氏名	金曾 涼子	学校名	金沢市立森本小学校		
担当教科		実践教科	総合的な学習の時間		
時間数	5時間	対象学年	6年2組	人数	32人

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

- 自分を見つめ、自分の身近な人々や自然とのつながりを大切に。同時に広く世界に目を向けて、いろいろな国の人々の生活・文化・自然に興味を持ち課題に取り組む
- フィジーの生活の様子、現状を知り、幸せとは何かを考える
- 自分のこれからの生き方を考える

02 | 単元の評価規準例

(ア) 課題設定力	自分を見つめ、自分の身近な人々や自然とのつながりを大切に。同時に広く世界に目を向けて、いろいろな国の人々の生活・文化・自然に興味を持ち課題に取り組むことができる
(イ) 問題解決力	自分で選んだ国のテーマについて計画的に調べ学習を行い、交流活動の中で相手の方との関わり合いを深め、自分の想いや考えを伝えることができる
(ウ) 表現力	表現の仕方や構成を工夫し、まとめ、調べたことや考えたことを、適した方法でまとめることができる
(エ) 実践力	自分の変化や成長をよく見つめ、より広い視野に立ってこれからの自分の生き方を考えることができる

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

(1) 児童観

本学級の児童は国際理解について興味・関心が高く、海外のことについて知りたいと思っている児童が多い。6月に1ヶ月間オーストラリアからの転校生と共に、日本とオーストラリアとの言語や文化の違いを学んだ。自分達と同じ歳の転校生が学校でどのような生活をしているのか大変興味があったようだ。また、10月には中学校のALTを招いて金沢のよさや森本小学校のよさを英語で伝えることができた。その際にはALTの出身国であるアメリカに興味を持ち、スポーツや食文化について質問する姿もあった。さらに11月にはニュージーランドからの大学生と英語で話したり聞いたりする時間もあった。しかし、世界の貧しい国に住む人々がどのような生活を送っているのか、どのような状況にあるのか、現状を知る児童は少ない。

(2) 教材観

本単元は総合的な学習の時間「見つめよう 身近な絆・世界との絆」を受けて設定した。広く世界に目を向け、いろいろな国の人々の生活・文化・自然に興味を持ち調べたことや考えたことをもとに自分を見つめ、自分の身近な人々や自然とのつながりを大切にすることをねらいとしている。そのためまず、自分を見つめ身近な人々との関わりを振り返る。

【個人】次に、世界に視野を広げ関心をもったことについて深く考える。【世界について】さらに世界の様子を知り、学んだことを生かして自分には何ができるかを考えるという“個人→世界→個人”の視点で学習す

る。世界には貧しい国があるということを知ることにとどまらず、自分と関わらせて考えることで問題を解決しようとする力や、自分の課題を設定する力を育成するのに適した教材である。

(3) 指導観

本単元では現在の自分や周りの環境に目を向け、自分はたくさんの人に支えられていることに気付かせる。さらに身近な関わりから、世界には様々な国があることを知り自分の置かれている状況と比べることで、社会の一員としての役割を考えるきっかけとしたい。

04 | 展開計画 (全5時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<p>「見つめよう 自分のこと」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の自分を見つめ、どんな人々にお世話になっているかを考え、目指す自分を考える ・自分から家族、クラスなど身近な関わりのことを考え、さらに世界に目を向けて、自分との関わりを考えようとする 	<p><今の自分を見つめよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のよさは何か考える ・学校の最上級生としてどのように行動していくかを考える <p><もっと広い視野で見つめよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分→家族→地域→金沢…世界と自分が関わっている範囲を広げて考える 	<p>「ぼくがラーメンたべてるとき」 長谷川義史</p>
2,3	<p>「調べよう 世界の国々」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で選んだ国のテーマについて計画的に調べ学習を行い、交流活動の中で友達との関わり合いを深め、自分の想いや考えを伝える ・世界には様々な国があることを知り、それぞれ多様な文化があることに興味をもつ ・表現の仕方や構成を工夫してまとめ、調べたことや考えたことを、適した方法でまとめる ・国が抱える問題についても調べることで、自分の国の抱える問題と比べて考える 	<p><世界の国やテーマについて調べよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・行ってみたい国はどこかを考え、調べたい国を決める ・自分が関心をもった国について人口や面積、言語や服装、文化などについて図書室やインターネットで調べ、分かったことを新聞にまとめる  <p>一人ひとりがPCで調べ学習をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が調べた国についてグループで紹介しあい、世界にはたくさんの国があり、いろいろな文化をもっていることに興味をもつ ・新しく知ったことやさらに知りたいことをグループで交流する 	<p>「体験取材!世界の国々 フィリピン」 ポプラ社</p> <p>「体験取材!世界の国々 カンボジア」 ポプラ社</p> <p>等、他40冊 (児童が調べ学習に使用)</p>

調べた国について
グループでまとめた新聞

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
4	<p>「世界がもし100人の村だったら」</p> <p>自分の変化や成長をよく見つめ、より広い視野に立ってこれからの自分の生き方を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界の中で貧しいとされている国のことについて知り、世界の中の日本のことを考える 自分ができることは何か、また自分の生き方を考える 	<p><途上国について知り、考えたことは></p> <ul style="list-style-type: none"> 世界には貧しいとされている国はいくつぐらいあるのか知る クイズを通して世界のことを知る 写真から考えたことをペアやグループで話し合い交流する 日本がたくさんの食べ物を廃棄していることを知り、自分たちができることは何かを考える  <p>板書に位置づけた前時の学習の掲示</p>	<p>パワーポイント1 ワークシート1</p>
5 本時	<p>「知ろう フィジーのこと」</p> <p>自分を見つめ、自分の身近な人々や自然とのつながりを大切にする</p> <p>自分の変化や成長をよく見つめ、より広い視野に立ってこれからの自分の生き方を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師の体験談を聞き、フィジーという国について興味をもつ 	<p><フィジーという国について知り、幸せとは何か自分の考えをまとめよう></p> <ul style="list-style-type: none"> 途上国の一つであるフィジーはどこなところかを知る 担任の体験談やクイズを通して、フィジーの文化に興味を持つ 前時の学びと関連付けて本時での「幸せとはどういうことか」という問いに対する自分の考えを持つ グループで話し合い考えを深める 話し合ったことをもとに再度自分の考えをまとめる JICAスタッフに質疑応答  <p>JICAスタッフ(武田さん)との質疑応答の時間</p>	<p>パワーポイント2 ワークシート2</p>

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時を振り返り、どんなことを考えたか感想を言い合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で学習したパワーポイントの資料を黒板に掲示し児童が学習内容や自分の想いを思い出せるようにする 	<p>掲示資料</p>
展開 (30分)	<p><フィジーという国について知り、幸せとは何か自分の考えをまとめよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ○フィジーの国旗は? イギリスの国旗があることに着目させ、理由を解説する ○面積は?人口は? ・途上国の一つであるフィジーはどこかを知ることかを知る ○何をしている映像でしょう(カヴァの儀式的動画) ・担任の体験談やクイズを通して、フィジーの文化に興味を持つ ○学校の様子の写真より気付かせる(靴を履いていない児童、笑顔いっぱい遊ぶ児童、広場で木の板と空き缶で遊ぶ児童) ・前時の学びと関連付けて本時での「幸せとはどういうことか」という問いに対する自分の考えを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ形式の導入により児童に関心を持たせる ・カヴァの儀式的動画では何をしているのか予想をたてて楽しみながら異文化に触れる ・子どもたちに身近な衣食住に関しての写真を見せ、自分たちとの違いや初めて知ったことなどを自由に話す ・1枚の写真より、靴を履いていない児童がいることに気付かせる ・前時を振り返り、「幸せとは何か」をもう一度考えさせる 	<p>パワーポイント2 ワークシート2</p>
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで話し合い考えを深める ・話し合ったことをもとに再度自分の考えをまとめる ・学習の振り返りを書く ・全体で交流し、考えを深める ・JICAスタッフに質疑応答 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な意見を認め、児童が自ら行動に移したいと考えたことを大切にする ・本時の学習で考えたこと、疑問に思ったことなどをワークシートに書かせる 	

06 | 本時の振り返り

教師が思っていた以上に児童は幸せについて深く考えていた。「幸せとは」という大人でも答えの出ない難しいテーマや内容ではあったが児童一人ひとりが自分なりの答えを見つけたり、友だち同士で考えを深めたりする姿があった。

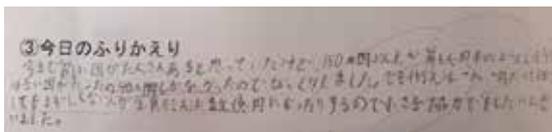
JICA北陸のスタッフでフィジーに同行した武田さんへの質問では多くの児童が挙手し、途上国のことについて、世界のことについて、JICAという仕事のことについて質問した。児童が自分の将来について広い視野を持って考えることができた。実際にゲストティーチャーのような形で教師以外の人から生の声を聞くことは大切であると感じた。

この授業を通して児童に異文化理解、国際理解を促すことができたと感じた。年間を通して、オーストラリアからの転校生との授業など国際理解や異文化理解の機会が多く与えられていた児童だけに、本時を通してより多くのことを考えてくれたように思う。

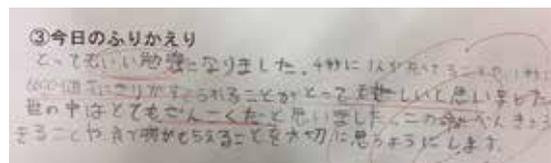
07 | 単元を通じた児童生徒の反応 / 変化

児童の振り返りより

- 1時間 自分が身の周りの人の支えによって生きていることを感じた。「ぼくがラーメンたべてるとき」では、今まで気にして過ごすことはなかったけれど地球の裏側にいる人々のことを考えた。
- 2,3時間 調べ学習では自分の気になる国について詳しく調べることができた。グループで新聞を集めるともっとたくさんの国のことが分かった、その国が抱える問題は調べるのが難しかった。
- 4時間目 とてもいい勉強になった。4秒に1人が命を落としていることや1秒に8600個のおにぎりが捨てられていることがとても悲しいと思った。小さなことでも協力をしていきたい。

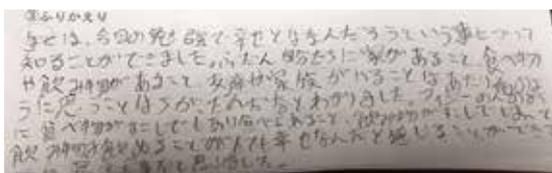


4時間目 児童の振り返り①



4時間目 児童の振り返り②

- 5時間目 今日の勉強で幸せとは何だろうということについて考えた。自分たちに家があること、食べ物や飲み物があること、友達や家族がいることは当たり前のようにおもうのは違ったんだなと感じた。フィジーの人のように食べ物が少しでもあり、食べられること、飲めることがとても幸せなんだと感じることができることが最高のことだと思った。



5時間目 児童の振り返り③

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

- ・途上国というところがあるということは知っているけれど、詳しくは知らない
- ・本で読んだり、テレビで見たりしたことはある
- ・実際にどんな生活をしているのか知りたい

(授業後)

- ・途上国についてよく分かった。辛くて悲しいところというイメージだったけれど違うところもあった。
- ・ぼくは昨日の授業で貧しいということで幸せではないと考えていたけれど今日の授業をみて、貧しいから幸せではないということではないと考えました。幸せなのは笑顔だということや自分にとっての場所があるということが幸せなんだなと思いました。
- ・本当は「幸せ」という言葉にはもっと深い意味があると思いました。
- ・フィジーの人たちにとってフィジーは大切な場所だと思いました。

1 苦労した点

- ・単元の中に、何を授業として盛り込むかということを大事にした。英語や国語、他教科の中でフィジーのことを紹介することもあったが、それだけだと異文化への興味関心を持つのみにとどまりかねない。本単元では人々の幸せや笑顔、そこで暮らす人々の思いに焦点をあてたかったため、内容を吟味することに苦労した。楽しいだけで終わる授業にならないように考える場を多く設けたかった。
- ・1時間の中で児童の興味を高める場面と深く考える場面のバランスに苦労した。

2 改善点

- ・3クラスで実践を行ったが、他2クラスは途上国について等の予備知識をあまり持たせずに授業に入ってしまったため、内容が難しく感じた児童もいたようだった。また他2クラスに関しては教師の意図する思考の流れ、深さまでに至らなかった部分もあった。クラスの授業時間に応じて、異文化に興味をもつ授業(児童に身近な衣・食・住にポイントをしばったり、動画や写真を事前に多く紹介したり)などの工夫が必要だと感じた。

3 成果が出た点

- ・今回の海外研修をどのように教材にするか考えることによって、学校での開発教育や国際理解教育の取り組みと教師海外派遣のつながりを考えることができた。実際に見たこと、感じたことを児童に直接語るができるのは、自分が身をもって体験してきたからだと思う。現地で考えたことを大いに児童に還元できたように感じた。今回の授業を機に海外に興味を持ったり、将来の仕事として考えた児童が多くいた。少しでも子どもたちの視野を広げて、世界に目を向けさせることができたのではないかなと思う。

4 備考（授業者による自由記述）

- ・実践授業を授業参観の日とし、保護者の方とも一緒に考える場をもうけた保護者の方からは「興味深い内容でした。実際に先生の実験したことを聞くのは楽しかったし、家に帰ってからも話したり調べたりしました。」と感想をいただいた。
- ・同教材を使用し、6年生児童2クラスで授業実践を行った。(計3クラス 100名)
その際校内で公開とし、他の先生が見にこられるようアナウンスをした。
- ・中間報告でのパワーポイントを使用し、職員会議で研修報告を行った。

【添付資料】

総合ワークシート

【参考資料】

「ぼくがラーメンたべてるとき」長谷川義史

「体験取材!世界の国々 フィリピン」ポプラ社

「体験取材!世界の国々 カンボジア」ポプラ社 他40冊(児童が調べ学習に使用)

JICA どうなってるの世界と日本

JICA北陸 「平成26年度 教師海外派遣研修報告書」

総合～見つめよう 身近な絆～
月 日 年 組 ()

今日のめあて

①初めて知ったことなど メモ

②< ?>

③ふりかえり

総合～見つめよう 身近な絆～
年 組 ()

①初めて知ったことなど メモ

②自分にできることは…

③今日のふりかえり

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

今回研修に参加するにあたって途上国とはどのようなところか実際に自分の目で確かめ、子ども達に何か還元できればという思いを持ち研修に参加した。帰国してから子ども達に伝える際には「途上国は何もなくてかわいそう」とならないように、また「日本は何でもあってやっぱりとてもいい国だ」とならないように何をどう伝えるのかをしっかりと精査した上で実践授業を行いたいと考えていた。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

スバに到着し、町やホテルの様子を見たとき自分の持っていた途上国のイメージとは少し違った。生活面や教育面等であまり日本と変わらないのではという印象を持った。しかし、研修が進むにつれてフィジーの国民性やその歴史的背景を知り、国が抱える問題点(ここでは自分達から見たフィジーの問題点であり、フィジーの人にとって本当に問題であるのかは疑問である)に少しずつ迫っていくことができた。その中で自分が特に疑問を抱いたのが、情操教育についてである。音楽・図工・体育などがどうしても軽視されてしまうと聞き、これらの教科を学ぶことは、いったい子ども達にどのような力をつけさせ将来に役立たせていくのかを深く考えるきっかけとなった。日本で自分達がしている情操教育ではその教科で目指す子どもの姿があり、つけたい力をつけさせるための方法や手段があり、ゴールが明確になっている。しかし、音楽が鳴れば体を自然に動かし、歌を口ずさむ。体格がよく、身体能力の高い人々が多い中どんなスポーツを提案してもそつなくこなしてしまうフィジーの人々にとって、そもそも情操教育に対する必要感がないのではないか、と疑問に思った。

さらに、大黒レストランのオーナー、林さんや協力隊の方々のお話を聞く中で『どうしてそうするのか』『これをしていないとどうなるのか』など原因や理由を考えないフィジーの人々の感覚にも疑問を持った。生まれながらに持つものが起因しているのか、成長の過程や教育が関係しているのかももう少し詳しく知りたいと思った。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

今まで自分の国や途上国について持っていた考えに大きな間違いがあることに気がついたことは自分の成長に繋がった。教育省の人が『自分達の国の教育システムはとてもよくできている。奨学金もあり、多くの子ども達が学校に通える環境が整っている』と教育について熱く語ってくれた時、自分が『発展途上国の教育について学びにきました』とスピーチをしたことを恥ずかしく思った。自分がどのような立場で途上国を見ていたのかを突き付けられたように思った。何を教えてあげられるのか、どんなものを伝えられるのか、日本の教育のシステムはこのようになっていて、いいところをぜひ取り入れてみてください。そんな思いで研修に参加していた自分が大きな勘違いをしていたのだと気付いた。フィジーの人々も自分達と同じように子どもに対して深い愛情を持ち、自信を持って教育活動を行っている。目の前の子ども達の可能性を信じ、子どもの成長を心から喜ぶ姿は国境を越えても同じであった。

考えを大きく揺さぶられた場面は村でのホームステイでもあった。テレビゲームがなくても子ども達は広場で空き缶と木材で時間を忘れるほど遊んでいた。自分達の持ってきた折り紙や紙風船、竹とんぼなどは刹那的な楽しみを生み出すことはできるが、壊れてしまえばゴミになるだけである。村では自給自足をし、ゴミになるものといえば生ゴミだけである。庭に捨てておけば肥料となり、また豊かな作物を育てることができる。そのため、ゴミをゴミ箱に捨てるという習慣がない。私たちの持ってきたもののほとんどが土に返らないものであり、いずれ飽きて捨てられてしまうものばかりである。日本から持ってきたお菓子のゴミが美しい村に捨てられている様子を目の当たりにした時、いったい自分は何をしにきたのだろうととても辛く思った。本来ならあるはずのないものを持ち込み、村の環境を損なう手助けをしてしまったのではないかととても悩んだ。

自分達の持っているものを見せたり与えたりすることが相手にとって本当に嬉しいことなのか。知らないこと食べたことのないものを体験させたいという気持ちは自分の自己満足にすぎないのではないか、と。ホームステイ先で日本の料理を作って初日の夕食に出させてもらった。しかし、もしかしたらホストマザーは

一晩だけのディナーを私のためにふるまいたかったかもしれない。自分の持ってきたものを披露したいという気持ちだけで、ホストマザーのもてなしたいという気持ちを踏みにじってしまったのではないだろうか。自分のしていることはいったい誰のためなのかということは何度も考えることとなった。

研修を重ねるうちに思い悩むことが多くなり、自分が何のために来たのかが分からなくなった。しかし、プレゼン資料の作成のためメンバーで話し合いを進めていく中、同じ思いを持つ人がいることが分かり、今自分が考え悩んでいることを共有することができた。校種や年齢も様々な人と話をすることも大きな成長に繋がったと思う。

子ども達には、世界に目を向けること、自分は広い世界の中の一人であることを伝えたい。上で述べたような思いを、自分達がそのような場面に直面したときにも同じように思い、悩んで欲しいと思う。自分がそうであったように、実際に経験して考えたことは人から伝え聞くよりも深く心に残るだろう。私ができることは子ども達の世界を広げ、興味を持ってもらうことだと思う。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

研修が終わりに近づくにつれて、自分のすべきことは決められた日本の教育に対して自分が自信をもって行うことであり、子ども達に多くの視点や広い視野を与えることではないかと考えるようになった。フィジーの人々が幸福感をもって生活しているように、日本の子ども達にも自分達が幸せで可能性が沢山あるということを感じてもらいたい。

今後、様々な場面で国際理解教育・開発教育を進められるように、今回学んだことにとどまらず、勉強を重ねて自分の知識や経験を増やしていきたい。

5 研修に関する全般的な所感

充実したスケジュールの中、多くの経験をする事ができ、大変勉強になった。1日の内容がとても濃く、教育だけではなく、環境・医療・企業など様々な視点からフィジーという国をみることができた研修内容となっていた。

はじめに学校訪問・ホームステイがあり、自分達が直接体験できる機会が多かった。到着してからの数日で見えたもの感じたことを吸収し、そこから考えたり自分のスイッチを入れたりするきっかけとなった。後半の研修では自分達が思い悩んでいる部分を協力隊の方々や林さんが少しずつ導いてくれているようであった。前半の体験により、フィジーをみる視点が定まってきたため、講義を聞く際に共通した視点で考えることができた。

6 JICA に対する要望・提言

スタッフの方々の温かい励ましやサポートのおかげで充実した研修を送ることができた。毎日の振り返りやJICAの方々との交流の中で自分の思いが救われたり、答えのようなものが見つかったりすることが多々あった。また、武田さんがすぐに通訳をしてくださったおかげで、言語の問題で内容理解についてとまどうということがなく、本当に自分達が知りたいこと、学びたいことを聞くことができた。JICAの方々には本当に感謝している。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

- ・虫よけ対策
- ・自分が食べなくなったときの日本食(お菓子や緑茶など)
- ・ビタミン剤
- ・お土産の吟味(でも実際に持って行って感じたほうが良いかもしれません)
- ・何を学びたいか、何をしにいくのか ある程度考えを持っておく

実際に見て、感じて、考えることが自分にとっての大きな財産となる。メンバーの人とも思いを打ち明けたり、迷いを話したりすることができれば充実した日々を過ごせるはず。

おいでよ!フィジーまつり! ~フィジーはかせになろう~

氏名	奥井 千里	学校名	高岡市立能町小学校		
担当教科		実践教科	道徳、学活、国語、図工		
時間数	12時間	対象学年	第一学年	人数	30人

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

- ・フィジーについて知ることによって世界の多様性を感じ、異文化に興味・関心をもつことができる。
- ・フィジーの生活の現状を知るとともに、自分たちの生活について考える。
- ・世界で活躍している人々について知る。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	フィジーについての学習を通して、他国の言葉、食べ物、衣服、遊びに興味をもっている。
(イ) 思考・判断・表現	フィジーを紹介する準備をする中で、友達と相談したり、自分なりに発表方法を工夫したりすることができる。
(ウ) 技能	フィジーについて調べたことをポスターに分かりやすくまとめることができる。
(エ) 知識・理解	フィジーの文化や世界で活躍している人について知る。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

(1)教材観

本単元では、国際理解の第一歩として日本とは異なる外国の生活や文化について、できる限り本物に触れ、体験的に学べるようにする。現地で撮影した写真や動画、集めた衣装や硬貨などを使用して異文化に親しむことができるように設定した。実際に自分が触ったり、遊んだりする体験を通して、日本とフィジーの共通点や相違点について、理解することを目指す。また、この学習を通して、子供たちが世界の多様性を感じ、異文化に興味関心をもってほしいと考えた。

(2)児童観

本学級の児童は、明るく何事に対しても興味をもち、意欲的に取り組む。国旗に関心を示している児童や、英語に興味をもっている児童など外国に興味をもつ児童がたくさんいる。意欲的に外国の事について調べる子供がいる反面、フィジーを国として認識することができない子供や日本との相違点に気付いていけない子供もいる。

(3)指導観

- ①世界地図や地球儀を活用することで、世界に目を向けるようにした。
- ②毎回、ワークシートを用意し、学習課題のテーマを書き込みながら、同じ学習形態で学習を積み重ねた。
- ③衣装や民芸品が置いてあるフィジーコーナーを設けることで、体験的に理解することができるようにした。

04 | 展開計画 (全 12 時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	フィジーってどんな国?(事前学習)	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジーのあいさつ、地形、文化を知る。 ・フィジーについて知りたいことを考える。 ・世界の国について知る。 (アメリカ、カンボジアの紹介) ・フィジーの子供達にプレゼントを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・折り紙
2	世界のことを知ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の食事を知る。 【写真1 世界の食卓を知る子供】 ・絵本「せかいのひとびと」の読み聞かせ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各国の食卓の写真 ・絵本「せかいのひとびと」
3~8	フィジーのことを知ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・Google earth を利用して、フィジーの町や村の様子を知る。 ・フィジーの地形や学校、言葉に関するクイズを通して、フィジーについて知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント
		<ul style="list-style-type: none"> ○フィジーの物を実際に触ったり使ったりして、体験する。 ○動画や写真を観て、フィジーの文化に触れる。 ・フィジーと日本の食生活の違いを比べる。 ・フィジーと日本の学校の違いを比べる。 ・フィジーと日本の生活の違いを比べる。 ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジーの民芸品 ・フィジーの衣装 ・ワークシート 【資料1フィジーとにほんのちがいをみつけよう】
		<ul style="list-style-type: none"> ○フィジーの文化を体験する。 ・ダンスの体験【写真2 ダンスの体験】 ・フィジーのゲームの紹介 ・フィジーの生活を体験 【写真3 スルを着る子供】 ・振り返り【資料3 授業の感想1】 【資料4 授業の感想2】 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート 【資料2 じゅぎょうをふりかえって】 ・CD
9	フィジーで頑張っている日本人と交流しよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・青年海外協力隊員の高野さんにフィジーの様子を教えてもらう。 【写真4 高野隊員とスカイプ通信】 	<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプ通信 ・ワークシート
10~11	伝えよう!フィジーまつり! (フィジーについて学んだことを伝える準備をしよう。)	<ul style="list-style-type: none"> ・伝える相手、伝えたいこと、どのように伝えるのかを話し合う。 【写真5 フィジーまつりに向けて話し合い】 ・伝えたいテーマごとに分かれて、準備をする。(食べ物、植物や動物、暮らし、服装、硬貨、地図、踊り、乗り物、学校、言葉) 	<ul style="list-style-type: none"> ・模造紙 ・ワークシート 【資料5しらべよう!フィジーのこと】
12本時	おいでよ!フィジーまつり! (フィジーについて学んだことを伝えよう。)	<ul style="list-style-type: none"> ・別学級、保護者にフィジーのことを伝える。(各ブースを設ける。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・招待状 【資料6 招待状】 ・付箋

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	①時の学習のめあてを確認する。 ・遊ぶ時の約束、役割を確認し、活動の見通しをもつ。	・グループでまとめて、用具を準備しておく。 ・本時の活動の流れを確認し、活動への意欲付けをする。	・ポスター ・フィジーの衣装 ・フィジー民芸品
展開 (35分)	<p style="text-align: center;">調べたことを分かりやすく伝えよう。</p> ②ポスターセッション方式で各テーマのグループに分かれて、発表する。 (テーマ) ・食べ物 ・植物や動物 ・暮らし ・服装 ・硬貨 ・地図 ・踊り ・乗り物 ・学校 ・言葉 (発表者) ・聞き手を意識して、分かりやすく発表する。 ・ポスターを指しながら、発表する。 ・質問には丁寧に答える。	・安全に活動できるように、遊ぶときの約束や役割の確認を行う。 ・子供が思い切り活動できるような広い場所(音楽室)で行う。 ・聞き手は、スタンプラリーを持参して、ブースを回る。	
まとめ (5分)	③本時の学習を振り返る。		

≫ 授業実践の様子



写真6 たべもの

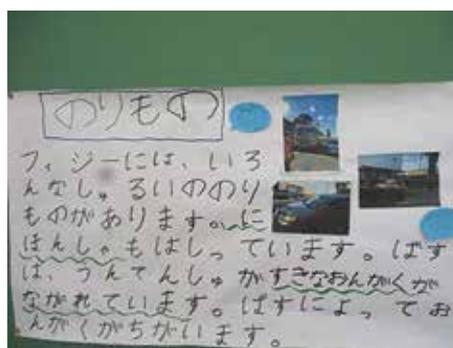


写真7 のりもの

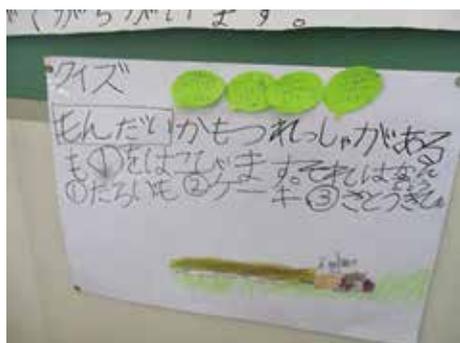


写真8 のりものクイズ



写真9 フィジーはかせたち

06 | 本時の振り返り

本単元では、子供たちがフィジーのことを知るだけでなく、伝えることをねらいとしていた。「フィジーがいぎ」では、誰にどのように伝えるのかを話し合う様子が見られた。これまでのフィジーの学びを生かし、子供たちが主体となって「フィジーまつり」を作り上げた。

今回の授業では、視覚的に見たり実際に触れたりしながら体験的に学ぶことで理解を深められるよう、実践を行った。そのために、各ブースでは、フィジーの服やお金を置いたり、ポスターに絵を描いたりするなど工夫した。また、ポスターセッション方式で発表することで、気軽に質問するなど相手と近い距離で対話することができていた。

子供たちは、堂々と発表しており、ポスターに書いていない質問にも答えることができていた。他学級の子供は、初めてフィジーの文化に触れるにも関わらず、しっかりとフィジーを国と理解して質問したり、楽しみながら文化に触れたりすることができた。感想には、「フィジーの服装は、かわいい」などフィジーのよさに気付いている子供が多かった。

今回は、授業参観で「フィジーまつり」を行い、保護者の方々を招待した。保護者の方は、「参加型の授業で楽しく分かりやすかった」と話していた。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

時	小単元名	学習のねらい	感想
1	フィジーってどんな国?(事前学習)	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィジーの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィジーのがっこうってどんなところなんだろう。 ・ フィジーの人ってどんなかんじなんだろう。
2	世界のことを知ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世界の地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ せかいのことをするのがおもしろかった。 ・ せかいのくにのたべものをたべてみたい。
3~8	フィジーのことを知ろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィジーの物を実際に触ったり使ったり体験する。 ・ フィジーの暮らしや文化、学校の様子を知り、世界には多様な文化や価値観があることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィジーのたべものをたべてみたい。 ・ フィジーのたべものと日本のたべものはちがう。 ・ 日本とちがって、フィジーでは、いろいろおかねをつかっているんだね。 ・ ぶたとにわとりをそだててたべているから、びっくりした。 ・ ぼくもフィジーのいえにすみたい。 ・ どうしてそとにキッチンがあるのかなあ。 ・ フィジーにいったくなりました。フィジーの人ともどもだちになってみたい。
		<ul style="list-style-type: none"> ・ フィジーの物を実際に触ったり使ったり体験する。(ダンスの体験、フィジーのゲームの紹介、フィジーの生活を体験) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スルをきることができ、うれしかった。 ・ 男の人がスカートをはいているなんてしりませんでした。ぼくもおおきくなったら、フィジーにいきたいとおもいました。 ・ フィジーの人のあそびは、とてもたのしかった。

時	小単元名	学習のねらい	感想
9	フィジーで頑張っている日本人と交流しよう。	・ 青年海外協力隊員の高野さんとスカイプ通信をすることで、世界で活躍する人を知る。	・ フィジーにはみどりいろのさかなが いるなんてびっくりしました。 ・ もっとフィジーのことしりたくな ったよ。
10~11	伝えよう! フィジーまつり! (フィジーについて 学んだことを伝える 準備をしよう。)	・ フィジーを紹介する準備をする中で、友達と相談したり、自分なりに工夫したり することができる。【写真10 フィジーかいぎ】	
12 本時	おいでよ! フィジーまつり! (フィジーについて 学んだことを伝え よう。)	・ フィジーについて調べたことを分か りやすく伝えよう。	(発表者) ・ じょうずにつたえることができよ かった。 ・ フィジーのことをつたえるのがたの しかった。 ・ わかってもらえて、うれしかった。 (聞き手) ・ おどりをして、たのしかった。 ・ ふくのもようがうみみたいできれい だった。そのふくをきて、おどれて うれしかった。 ・ フィジーのことばがおもしろかった。

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

単元を通して、異文化に対する興味関心が高まっていった。子供たちは、フィジーの授業になると、目を輝かせ、「これは、何?」「フィジーの人は、どんな食べ物を食べているの?」とたくさんの質問をしていた。

「フィジーまつり」を開催するにあたって、どのように伝えたら相手に分かってもらえるかなど子供同士が話し合っ、主体的に発表の仕方を工夫している姿が見られた。授業以外の場面でも、教室にある地球儀や世界地図を使って、国の場所を友達に伝え合う姿が見られた。

家庭学習でも大きな変化が見られた。自主的に世界地図を書いてくる子供【写真11 せかいちず】やフィジーの国旗を書いてくる子供、兄弟や家族にフィジーのことを伝える子供の姿が見られた。中には、フィジーの料理【写真12 フィジーの料理】や学校など興味をもったことを詳しく調べている子供もいて、嬉しく感じた。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

テレビなどメディアの影響から世界の国や国旗を知っている子供もいた。しかし、多くの子供は、世界の国について、知識があまりなかった。

(授業後)

授業では、日本とフィジーを比較しながら、学校や食べ物、文化について学習した。「フィジーのケーキは、日本のケーキよりも大きいサイズなんだね」「フィジーには、大きい体の人がたくさんいるね」と反応を見せた。子供たちは日本とフィジーを比べることで、それぞれの国のよさに気付くことができた。また、世界の食卓の写真を使った授業では、世界の国の食文化を知り、楽しみながら学習する子供が多くいた。授業を通して、異文化に関する新しい発見を喜び、もっと知りたいという気持ちが高まっていった。

1 苦労した点

対象学年が1年生だったため、当初は「世界ってなに?」「フィジーってフィジーという人?」などと話していた。世界の国々を教えることやフィジーを国と認識させることから始めないといけなかった。そのため、難しい言葉を簡単な言葉に言い換えたり、スモールステップで簡単なことから理解を促したりするように工夫した。また、教室に地球儀や地図を置くなど、世界の様々な国について興味や関心を示すようにした。

2 改善点

今回は、対象を1年生や保護者に絞ったが、他学年にもフィジーで学んだことについて紹介する場を設ければよかった。

3 成果が出た点

ダンスをしたり、フィジーの遊びを体験したりするなど活動も取り入れることで、楽しんで学習することができた。子供たちは、フィジーを知ることで、異文化に興味関心をもつことができた。また、「いつか世界に行ってみたい」という子供や「フィジーに行くことが家族の夢になった」「これからのグローバル化を生きる子供にとって大事なことを学ばせてもらえた」という保護者など多くの人が異文化に興味をもち、国際理解教育の大切さに気付いてもらえた。

【添付資料】

- 資料1 フィジーとにほんのちがいをみつけよう
- 資料2 じゅぎょうをふりかえって
- 資料3 授業の感想1
- 資料4 授業の感想2
- 資料5 しらべよう!フィジーのこと
- 資料6 招待状

【参考資料】

- ・Pスピアー(1982)『せかいのひとびと』評論社
- ・ピーターメンツェル・フェイスダール(2006)『地球の食卓』TOTO出版
- ・JICA北陸『平成26年度 教師海外研修報告書』
- ・JICA北陸『平成28年度 教師海外研修報告書』
- ・JICA地球ひろば『国際理解教育 実践資料』 <https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/case/index.html>

フィジーとにほんのちがいをみつけよう！

なまえ ()

テーマ: _____





○じゅぎょうのかんそうをかこう。

フィジーとにほんのちがいをみつけよう

☆じゅぎょうのかんそうをかこう。

さくみ ()

- ・おもったこと
- ・わかったこと
- ・もっとしりたいとおもったこと
- ・ぎもんにおもったこと



じゅぎょうをふりかえて

☆じゅぎょうのかんそうをかこう。

さくみ ()

- ・おもったこと
- ・わかったこと
- ・もっとしりたいとおもったこと
- ・ぎもんにおもったこと

すごくおもしろかったです。

おとこのいよの「スカート」

をはいている人てりあせんで

いよのいよのきものがいいの

かしたいとおもいました。

くもあおさくらたら、

いよのいよのきものがいいの

いよのいよのきものがいいの

いよのいよのきものがいいの

いよのいよのきものがいいの



授業の感想1

☆じゅぎょうのかんそうをかこう。

さくみ ()

- ・おもったこと
- ・わかったこと
- ・もっとしりたいとおもったこと
- ・ぎもんにおもったこと

きょうのフィジーのじゅぎょうは

たのしかったです。おとりの

がすごくたのしかったです。

からで「スカート」の

はきまいた。いよのいよの

いよのおもしろかったです。

した。フィジーのいよのいよの

いよのいよのいよのいよの

いよのいよのいよのいよの



授業の感想2

しらべよう！フィジーのこと！

なまえ ()

テーマ: _____

○テーマのことについてしらべてわかったことをかこう。



しらべよう!フィジーのこと

🌸

スタンプカード

ふく		こっせ	
たべもの		くらし	
がっこう		おかね	
ことば		のいもの	
スポーツ・おど		どうぶつ・しよくぶつ	

招待状

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

フィジーの学校教育制度に興味をもった。フィジーの学校の様子や文化を学び、日本の子供へ伝えたいと思い、参加した。研修では、フィジーの学校の実態を知れてよかった。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

○フィジー人のあたたかさ

どこへ行っても、「ブラ!」と明るく挨拶してくれるフィジーの人達に心が和んだ。英語があまり話せない私にホームステイのお母さんは、優しく接してくれた。私の伝えようとする気持ちを受け止めようと話し終わるまでゆっくり待ってくれる温かさを感じた。フィジーの人は、困っていることがあると、すぐに助けてくれたり、どんな質問も優しく答えてくれたりした。町を歩いた時、目が合うと、にっこり微笑み返してくれるといったフィジーの人たちの人柄に強く惹かれた。日本に帰った時、優しさが溢れていたフィジーとのギャップに気付いた。帰りの電車では、疲れ切った人、俯いている人、偶然かもしれないが、フィジーで見た光景と全く違う光景がありフィジーが恋しくなった。「世界の裏側には、自分の存在を受け入れてくれる人がいる」と感じた。狭い世界しかみていない自分にフィジーの人はたくさんのことを教えてくれた。相手のことを思いやって行動していきたいと思うきっかけになった。この素晴らしい出会いに感謝したい。

○林さんから聞いたフィジー人の現状

林さんの話を聞く前までは、フィジーの人の良い部分しか見えてなかった。林さんは、日本と異なるフィジーの人達の文化や習慣に向き合い、店員としての心構えを伝えようとしてとても感動した。例えば、店員としてのマナーを言葉ではなく、絵で分かりやすく説明するなど、様々な工夫が施されていた。ルールを守らないフィジー人に向き合い、日本のやり方を突き通す自分を曲げない林さんの侍魂が素敵だった。フィジー人の文化を受け入れるが、日本の文化も伝える姿勢、へこたれない林さんの精神力の高さに驚いた。林さんの話を聞いて、教育と似た部分があるなと感じた。私自身も発達障害を抱えた子供やうまく意思疎通ができない子供と接するときがある。なかなか思いが伝わらなくて投げ出しそうになるときがある。しかし、林さんの話を聞いて、伝わらなくても、何らかの工夫をしていかに相手に伝えるか、諦めずに継続していこうと胸に刻んだ。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

○言葉より大切なもの コミュニケーションのあり方

研修では、ホームステイ先で村の子供達と交流する時間があつた。子供達は、突然来た日本人をすぐに温かく受け入れてくれた。そこには、言葉は必要なかった。ただ動作と表情がほとんどだった。子供達に誘われ、鬼ごっこやネットゲームをした。他にも、日本ではやったことがないゲームを教えてくれたり、日本のゲームを教えてほしいと言ったのでハンカチ落としをしたりした。そこには、たくさん笑顔があふれていた。コミュニケーションは、相手がいること、伝えたい気持ち、手段があるだけでコミュニケーションがとれることを心の底から感じた瞬間だった。同時に、子供が日本のゲームを紹介してほしいと言ってくれたことがとても嬉しかった。支援をするときは、まずは相手と信頼関係が大事だと思った。相手が自分のことを受け入れてくれた後、相手が必要とするそのレスポンスに応じること、それもボランティアのあり方だと思った。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

○外国から来た子供への接し方

近年、グローバル化により日本に移住する外国人がいる。現在、私が勤める学校にはブラジルから転入してきた子供がいる。その子供は、言葉が通じなかったり、日本の風習になれなかったりして困っている。同時に、周り

の子供達も意思疎通がうまくいかず困っている様子が見られる。私は、フィジーで学んだことを活かして、子供たちに日本という基準で言動を判断するのではなく、世界には様々な文化や習慣があることを知り、日本で生活する外国人の考えを受け入れ、関わっていくことのできる子供を育てたい。まずは子供達に世界を知ってもらうことが必要だと思う。そのためにフィジーに関わるクイズを出したり、服装や食べ物など具体物を提示したりするなど文化に触れさせたい。今後は、発達段階に応じて、幸せとは何か、私たちができる支援は何かなど、世界には先進国だけではなく、発展途上国があるなど世界が抱える問題を深く追究していく授業を展開していきたいと考えている。インターネットや本で調べただけでは分からない、実際に行ってみただけからこそ分かることを伝えていきたい。

5 研修に関する全般的な所感

○支援のあり方

ボランティアは、相手の必要に応じて支援することが大切だと思った。エゴではなく、相手が今何を必要しているのか何を欲しているのか相手のことを第一に考えなくてはいけないと感じた。

今回は、一人ではなく、様々な校種の方と接することで同じものを見ていても、違った視点で意見を共有することができた。多面的な考えを吸収することができ、考える幅が増えたと思う。班の人とフィジーで学んだことを共有したとき、「幸せ」とは何かを話し合った。自分が思っていた幸せ以外の幸せをたくさん知ることができた。また、最終日の報告会では、違う班から「揺さぶり」というテーマで発表があった。全く違う観点で、自分達がしてきた支援は、正しかったのかと疑問に思った。フィジーの人のことを思って折り紙を教えてあげたり、日本の物をプレゼントしたり、日本の有名なものを教えたりしてきた。しかし、それは彼らが望んでいたことなのか、フィジーの人の気持ちをしっかりと考えていたのか、心の中で何度も自問自答した。

○幸せって

研修を通して、「幸せ」って何だろうと考えることがよくあった。日本のようにたくさんの物があふれていたら幸せなのか、お金があれば幸せなのか疑問に思うようになった。フィジーには、たくさんの幸せが溢れていた。ホームステイでは、家族がいる幸せを感じた。私が過ごした家は、親戚とみんなでご飯を食べる機会が多くあった。みんなで作って食べるご飯は、とても美味しかった。村では、初対面の人もみんな「ブラ！」と挨拶してくれたり、カバを飲むために集まったりするなどみんなで集まる場面がよくあった。村のみんながみんなで生きている、共存している、地域のコミュニティが素敵だと感じた。

また、村にはブタやニワトリを飼う家があったり、タロヤココナッツの木が植えてあったりして、自給自足の生活を目にした。ご飯を食べた後、食器を洗う機会があった。日本とは異なり、3つのたらいを使って食器を洗うやり方だった。節水を重んじたやり方だった。家にいる時、停電した。ホームステイを通して、物の大切さを感じた。電気がつくこと、蛇口をひねると水が出ること、お湯が出ること、トイレが流れること、当たり前な幸せに気付くことができた。村の人々は、私の目から見たらぼろぼろの服、汚れた布団など使っていた。日本では汚れたら捨てるなど、使わなくなることがよくある。日本の

学校でもたくさんの残飯を見てきた。「もったいない!」「物を大切にしよう!」と強く思った。

○自分自身の心の変化

今回の研修を通して、「人のために何かをしたい」という気持ちがさらに高まった。実際に海外ボランティアをしに行くこともあるが、日本の子供達に世界の現状を伝えることで問題意識をもつこともあるだろう。今回研修で目にしたことを還元できるように努めていきたい。

6 JICA に対する要望・提言

充実した日々を過ごすことができた。しかし、後半のランバサ渡航は、体力的にきつかったように感じる。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

寒かったので、羽織るものを持って行くといいと思う。虫よけ対策はしていくべきだと思った。

フィジーをたんけんしよう

氏名	倉 さくら	学校名	白山市立東明小学校		
担当教科	特別支援学級(自閉・情緒)	実践教科	生活単元学習・道徳		
時間数	8時間	対象学年	3・4年	人数	4名

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

- ・フィジーの学校生活、家庭生活を疑似体験させ、共通点、相違点について知り、考えさせる。
- ・食べ物や遊びなど、身近なものを通して、フィジーや世界に興味をもたせる。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	フィジーの子どもや生活、遊びに関心をもって、共感的な態度で、異文化への理解を深めようとしている。
(イ) 思考・判断・表現	フィジーの伝統や文化のよさに気づき、大切にしている。
(ウ) 技能	フィジーを身近に感じ、話し合いながら授業に参加したり、感想を書いたりすることができる。
(エ) 知識・理解	フィジーと日本の共通点と相違点、フィジーにある日本に気づく。フィジーには、異なる伝統や文化があることを知っている。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

【児童観】

自閉症・情緒特別支援学級には、3年生と4年生あわせて4人の児童が在籍している。彼らは一人でいたり、特定の子と遊んだりすることを好み、住む世界が限られているようにも思える。彼らにとって、さらにフィジーなどの外国は遠い世界である。発展途上国に生まれた子どもたちも、違う意味ではあるが、住む世界が限られている。

3年A児:昆虫や鳥など生物分野に興味があるので、図鑑をよく読んでおり、生息している外国の名前に詳しい。自分の話したいことを話し続けたり、話の流れと違うことを発言したりすることができる。

3年B児:ローマ字が得意なので、外国語に関心がある。食べることも好きで、料理の名前に詳しい。会話でのコミュニケーションは難しいが、問いかけと同じ言葉で答えたり、態度や短い言葉で表現したりすることができる。

3年C児:いろいろなことに好奇心旺盛で、ニュースで見た海外の情報などを意味が分かっても、話すことがある。全員の中では知識が多い方である。自分の思いを素直に話したり、他の児童の気持ちを想像したりできるので、発言が的確である。

4年D児:興味のある範囲が限られていて、外国にあまり関心がない。気持ちが落ち着いているときは、話の内容を理解して、自分の考えを話したり、他児童の気持ちを想像したりすることができる。

【教材観】

本単元では、フィジーと日本の共通点や違いを比べながら、フィジーに興味関心をもつことをねらいとしている。まずは「異文化」に興味をもち、「同じ」「似ている」感覚から入り、「面白い!」「楽しい!」を主軸として展開し、子どもがフィジーという外国に興味をもつきっかけを作りたい。そのために、日常生活に身近なものから発展させたい。

子どもたちにとって、学校や食事など、生活に関係した内容は関心が高く、両国を比較する素材としてぴったりである。そこで、フィジーの子どもたちを身近に感じられるように教材を工夫する。そうすることで、見た目や言葉、文化が違った国でも、日本と同じように人々が集まり、生活しているということを理解することができる。この学習を通して、世界への関心を高め、この世界には自分たちが当たり前だと思っている文化だけでなく、多様な文化があり、その中で生活をする人々が存在することを感じてもらい、それぞれの文化によさを感じ、異文化を受け入れる素地を養っていききたい。

【指導観】

実際に私が見てきたフィジーの学校の子どもたちの生き活きとした様子、ホームステイした村のあたたかさなど、多くのよいところを児童に伝えるために、環境作りを行い、教材教具に工夫をした。

まず、教室に地球儀と世界地図を置き、フィジーや世界を意識できる環境を作る。授業開始には、毎回「小さな世界」を歌い、学習する雰囲気作りをすることで、児童の気持ちの切り替えを促したいと考えた。

具体的な教材は、お菓子などの実物、フィジーの写真や映像など視覚的に分かりやすいものを使う。提示する題材は、食べ物や学校、家など生活に結び付けて学びやすいものにする。その際、クイズやゲーム形式にしたり、棒グラフで示したりすることで、彼らの理解を助けたい。また、単元開始時に「フィジーたんけんパスポート」と題したスタンプカードを配付し、見通しをもって取り組めるようにした。

04 | 展開計画 (全8時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<p><世界をたんけんしよう></p> <p>世界には国がたくさんあることに気づき、外国や次からの学習について関心をもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 夏休み期間にフィジーのはがきを送っておく。 テーマソング「小さな世界」 たんけんパスポートをプレゼント。 「せかいのひとびと(Pスピアー)」読み聞かせ。 知っている国を挙げて、Google earthで探す。(自宅の場所を確認後、世界の国の位置を調べる。) フィジーの基本情報をクイズする。(場所・人口・日本からの距離など) <p>写真1 フィジークイズ</p>	<ul style="list-style-type: none"> CD パワーポイント 絵本「せかいのひとびと」 フィジークイズ用紙
2 (本時)	<p><フィジーの家をたんけんしよう></p> <p>フィジーを身近に感じ、話し合いながら授業に参加できる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> テーマソング「小さな世界」 写真と動画で説明。(村や家族の様子・家の構造など) あいさつゲームをする。(音楽がかかっている間は歩き回り、止まったらあいさつをする。) <p>写真2 あいさつゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> タロイモチップスを食べる。 <p>写真3 チップスクイズ</p>	<ul style="list-style-type: none"> CD パワーポイント 写真 タロイモチップス 写真、動画
3	<p><フィジーの服を着てみよう></p> <p>フィジーを身近に感じ、話し合いながら授業に参加できる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> テーマソング「小さな世界」 布を見せて、何に使うものかを考える。 スルを着ているフィジーの人々の写真紹介。 スルを一人ずつ着る。ペアを作って、着る役と写真を撮る役に分かれる。 <p>写真4 スル体験</p> <p>資料2 学級だより(スル体験)</p>	<ul style="list-style-type: none"> スル スルチャンバ タブレット

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
4	<p><フィジーの学校をたんけんしよう></p> <p>日本とフィジーの学校や小学生の共通点と相違点、いいところ、フィジーにある日本に気づく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事前にフィジーの小学生にとったアンケートと同じ内容のアンケートをして集計しておく。 (質問項目…好きな食べ物・動物・スポーツ・科目・将来の夢など) ・ アンケート結果を棒グラフにし、パワーポイントを使って、ランキング形式でフィジーと日本を交互に発表する。 <p>自作PPT 資料1 フィジーの小学生とにている?ちがう?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 写真や動画で説明(写真を見せて同じところ・違うところを見つけたり、いいところを探したりする。) ・ フィジーで見つけた日本紹介。(日本料理・日本車など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ CD ・ アンケート ・ パワーポイント ・ 写真 ・ 写真、動画 ・ フィジーの教科書
5~6	<p><フィジーの台所をたんけんしよう> 調理実習</p> <p>フィジーの料理を身近に感じ、料理を作ることができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭室で実施。 ・ フィジー料理を作る。 (ロティ・レトルトカレー・バナナ) ・ 砂糖の多い紅茶を体験。 ・ カヴァ(モノランゲージ) ・ たらいを使って、限られた水での皿洗いをする。 <p>資料3 ロティ作りのふりかえり 資料4 学級だより(ロティ作り)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ CD ・ ロティの材料 ・ 紅茶(砂糖多めに用意) ・ たらい3つ(皿洗い用)
7	<p><世界のごはんをたんけんしよう> 道徳(国際理解)</p> <p>世界の国の食生活に関心をもつこと。今後も世界の様々な国について関心をもっていこうとすること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマソング「小さな世界」 ・ 事前に、自分の家の食べ物を調べる宿題を出しておく。 ・ 自分の家にあった食べ物を発表。 ・ 国当てクイズ(「地球の食卓」から抜粋した4か国とフィジーの写真を見て、国名を選ぶ。) ・ 第3位までのランキングをそれぞれが考えて発表する。①1週間住みたい国 ②家族が仲良しの国 <p>資料5 地球の食卓ワークシート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ CD ・ 「地球の食卓」 ・ アメリカ・チャド・中国・インド・フィジーの食卓の拡大写真
8	<p><フィジーをたんけんしてどうだったかな></p> <p>フィジーを身近に感じ、話し合いながら感想を書くことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマソング「小さな世界」 ・ これまでの写真を見る。 ・ ふりかえりを書く。 <p>資料6 フィジー全体ふりかえり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ CD ・ パワーポイント ・ ふりかえり用紙

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1. テーマソング ○「小さな世界」を歌う。	・ 担当が、スルチャンバを着たり、歌を歌ったりすることで、フィジーの学習が始まる雰囲気作りをする。	・ スルチャンバ ・ CD

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
展開 (30分)	<p>2. フィジーの生活をクイズで体験</p> <p>○「世界のあいさつ」の読み聞かせをして、各国のあいさつを紹介。フィジーのあいさつや人種について補足説明をする。</p> <p>○あいさつゲームをする。</p> <p>○このお菓子は、何でできているかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本「世界のあいさつ」(長新太著)を読み聞かせする。 ・ あいさつゲームのルール <ol style="list-style-type: none"> ①音楽の間、教室を自由に動く。 ②音楽を止めた人が、国の名前を言う。言われた国のあいさつを近くの人とする。 フィジー…「ブラ!」と言い合う。 モンゴル族…だきあってにおいをかぐ。 ニュージーランド マオリ族…舌を出す。 ・ 音楽を聞いて、体でリズムを感じながら楽しむ。 ・ タロイモチップスを食べてみて、材料が何かを考える。その際、タロイモ、さつまいも、じゃがいもの写真を見せて、その中から選ぶ。 ・ 正解発表後、ホームステイしたときの写真を見せながら、食文化の補足説明をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本「世界のあいさつ」 ・ “We Are Fiji” (フィジーの国歌をポップスにアレンジした曲)のCD ・ あいさつを絵や写真で示したカード ・ タロイモチップス ・ 写真
まとめ (15分)	<p>3. まとめ</p> <p>○フィジーのいいところを発表。パスポートにシールを貼る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人ひとりが、今日見つけたフィジーのいいところを発表する。 ・ フィジーパスポートにシールを貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィジーたんけんパスポート

≫ 授業実践の様子



写真5 「世界のあいさつ」読み聞かせ



写真6 音楽に合わせて、あいさつゲーム



写真7 タロイモについて説明



写真8 本時の板書

06 | 本時の振り返り

実践した10月12日は、授業参観だったため、4人の児童全員の保護者も参加することができた。授業参観を通して、保護者にも伝えられることができるよい機会となった。

導入で毎回歌うようにした「小さな世界」の間奏には、世界中の音楽の要素が含まれており、今から外国の学習が始まるという教室の雰囲気作りができた。保護者からは、歌詞を改めて聞くと『世界はせまい』というフレーズがあり、「世界は広い」だと思っていたため驚いた。」という意見があった。

本時の主要な活動は、あいさつゲームとフィジークイズの2つであった。あいさつゲームは、世界中の様々なあいさつをわかりやすい挿絵で紹介している絵本「世界のあいさつ」を読み聞かせした。最初から最後まで読むと長いので、こちらが選んだ国を中心に読み聞かせした。絵本にフィジーは載っていないので、読み聞かせ後、フィジーにはフィジー系、インド系、中国系の人々が暮らしていること、言語はフィジー語と英語が話されていることを、ホームステイ先のフィジー系の家族の写真、訪問したインド系の小学校の写真を見せながら説明した。

その後、取り組んだあいさつゲームは、体を動かすことが好きな児童が多いので、保護者を交えて、教室中を動き回って楽しくやることができた。モンゴル族の抱きしめ合う挨拶を保護者としている児童は、恥ずかしそうな子もいたが、とても嬉しそうだった。あいさつゲームの時に、流した「We Are Fiji」という曲は、フィジー訪問時に会った高野勝郎隊員に教えていただいた、フィジーで人気の音楽である。外国の音楽を実際に耳や体で感じられるよい経験になった。

次のフィジークイズは、チップスの材料とスルの使い方を当てるクイズ2問を予定していたが、タイムマネジメントが十分でなく、1問しかすることができなかった。クイズは、袋を見えないようにしてチップスを児童や保護者に食べてもらったところ、最初は普段食べているポテトチップスと違うため、恐る恐る食べていたが、口々に感想を言い合いながら楽しく体験できた。食べた後は、3択クイズにして、フィジーで実際に食べたゆでたタロイモとキャッサバ、児童が1学期に育てた経験のあるじゃがいもを候補に入れたところ、一生懸命考えていた。正解発表後にホームステイで食べた食事や、調理方法を写真や動画で見せたところ、席から立ち上がって近くで見たがる児童がいたほど興味関心を示した。全体の場面を通して、児童に興味関心をもたせるためには、実物、写真や動画などの有効性を感じた。

07 | 単元を通じた児童生徒の反応 / 変化

全体を通して、全員が意欲的にフィジーの学習に取り組めた。第1時が終わったあとに、C児は家にあった「はじめての国旗えほん」を持ってきてくれた。フィジーを含めた興味のある国のページに、姉に付箋をつけてもらっていた。世界に目を向け、興味が広がったことが分かる。

特に、C児とD児の素直さに驚かされることが多かった。例えば、カヴァの慣習について話した際、断りづらくて何回も飲んだとD児に話すと、「そういうことは言った方がいいよ。言わなきゃだめだよ。」と自分の気持ちを表現する大切さを伝えてきた。また、調理実習で、普段食べているものとはにおいや見た目が違うカレーを準備したところ、躊躇して食べない児童もいたが、C児はぱくぱく食べて、すぐに異文化に適應していた。また、水資源の大切さを学んだ。本学級では、調理実習を何度もしているため、水道を使った皿洗いを経験していた。そのため、水の量を制限してやると、他の児童は「フィジーのやり方がやだです。(A児)」「めんどくさい。水道水を使った方がいい。(C児)」と不自由を感じていたが、一方「たらいで水をお皿あらいでキレイでタオルでふきふきました。楽しかったです。(B児)」「たらいをつかうのがおもしろかったです。水をためるのが好きだからです。(D児)」と、水がない状況を楽しんでいることが伝わってきた。彼らにはどうしても譲れないこだわりといわれる価値観もあるが、先入観や差別のない彼らの方が異文化と共生できるのかもしれないと感じた。

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

第7時で、「地球の食卓」を使って国際理解の授業を行った。5か国の写真を最初にクイズで提示した。先進国の例としてアメリカと中国、開発途上国としてチャドとフィジー、インドは前時にインド料理を作ったので、候補に入れた。食べ物が多く載っている写真を児童は興味津々に見つめ、アメリカには黒人がいることや、中国人に顔が似ていることなどを発言していた。中国の説明をしたときに、「知ってるよ!○○のお母さん、中国人やもん。」とA児がつぶやいた。フィジーのように遠い国を異文化と思いがちだが、自分の身近なところにも異文化があることに気づけていた。

児童には、「1週間住みたい国」と「家族が仲良しの国」のランキングを考えさせた結果、児童の多くが物質的な豊かさを魅力的に感じている印象を受けた。「1週間住みたい国」のランキングは、4人中3人がアメリカを一位に選んだ。理由は「マックや缶が多いし、アメリカは金持ちだから。」「ポテトを死ぬほど食べたい。」と、物の多さを理由に挙げていた。同時期に、学校で児童会によるユニセフ募金が行われ、アフリカの飢餓の印象が強かったことも、ランキングに影響したと考えられる。次に、「家族仲がいい国」のランキングを考えたときは、意見が分かれた。普段あまり自分の意見を言わないB児が、他の意見に流されず、「フィジーは、えがおでなかよくしている。」と発表したことが、今までの授業でのフィジーの様子が、彼に伝わっていたようで嬉しかった。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

あまり外国の話題が出ることは少なく、外国について聞く言葉の多くは、「ミサイル」「北朝鮮」など、よく理解せずに否定的に言っているものが多かった。さまざまなニュースが世の中にあふれているなか、海外ニュースの割合が少ないことや、否定的な内容が多いからかもしれない。研修出発前に、フィジーの場所を地球儀で教えたときは、全員がフィジーを知らなかったので「遠い!」と素直に驚いていた。

(授業後)

単元が始まってから、教室にフィジーの場所にシールを貼った地球儀を一つ置いておいた。すると、始めはくるくる回しているだけだったが、単元が進むにつれて、他の教科でも地球儀を使いたがるようになった。例えば、国語の授業で「3年とうげ」を勉強したときに韓国を調べようとしたり、A児は好きな昆虫の生息場所を説明するときに地球儀を使ったりするようになった。C児は、北朝鮮に対して知っている言葉を言っていただけだったが、場所や情勢について私に質問するようになった。単元の最後は、全員が異なった「行きたい国」をそれぞれ挙げていた。

さらに、保護者から嬉しい反応が2つあった。一つは、授業参観後の連絡帳に「しきりに、B児が『行きたい!』と言うので、連れていける気は全くしません、どこかわからなかったので検索してみました。勝手に発展途上国なのかな?と思いましたが、そうではないのですね?子どもたちは興味をもって授業を聞いているように感じました。楽しそうでした。」と書いてあった。そこで、フィジーが途上国の中でも中進国であることなどを伝えることができた。児童に教えるには難しいことも、保護者の方に伝えられたことがとても嬉しかった。また、ロティとカレーがおいしくて、感想文に「おいしかった。インド系になりたい。」と書いたA児の保護者からは、インド料理店に行ったことを聞いた。ロティを作ったこと、授業で扱った肥満の問題について家族に話し、「ナン(ロティに似ている)も食べたい。」と母親に言い、家族で食べに行ったことを聞いた。確実に、外国に興味をもち世界が広がったことを感じ、嬉しく思う。

1 苦労した点

本単元では、フィジーの開発途上国の部分についての伝え方に気がつけた。安易に伝えると、フィジーを下に見るような危険性があると思ったからだ。砂糖の取りすぎなど食事の影響による肥満の問題や、皿洗いを通して水の大切さを伝えた。実際に実習では、紅茶を飲んだだけで太ると勘違いして、準備した紅茶に口をつけない子がいたが、砂糖を入れすぎることが健康によくないのだと伝えた。そのため、彼らの成長に合わせて、途上国の抱えている問題や日本がフィジーにどのような支援をしているかなどを、3学期に本単元を設定し、伝えたいと考えている。

フィジーを「たんけん」しようという言い方にしたこと、実際にフィジーに行けるとD児に勘違いさせてしまったことがあった。フィジーは遠くてお金がかかることなど、行けない理由をD児に説明したとき、「行けないなら勉強する意味がない。」とやる気をなくしたことが一度あった。代わりに私が行ったことを一生懸命伝えようと、ようやく納得してくれたが、特別支援学級の児童に伝える難しさを感じた。

2 改善点

今年度は特別支援学級の生活単元学習の実践だったが、今後通常学級で実践するための改善点は2つある。一つ目は、単元計画をしっかりと立て、総合的な学習などの領域に位置付けることである。ねらいをもち、時数の確保をしていかねばならない。

二つ目は、学年で実施できる内容に変えることだ。教師海外研修を経験した教員だけができる内容だと、学年全体で取り組むことができない。フィジーについての写真や授業内容を記録しておくこともできるが、フィジー以外の外国でも同じような内容ができると思う。例えば、ALTの先生と連携し、欧米の生活の様子を知ったり、実際の食品を手に入れたりすることもできる可能性がある。留学生や国際交流員の方をゲストティーチャーに呼んで、数か国提示し、自分の興味がある国を選んでもいいかもしれない。

3 成果が出た点

今年度は、特別支援学級だからこそ成果が出たことが多くあったのは、生活単元学習の存在と学級の人数の少なさが理由である。タロイモチップスを食べることや民族衣装の体験、調理実習の作業など、少ない人数だからこそ、児童が体験的な活動を多くすることができた。また、学級だよりを書くことで、児童だけでなく保護者にも開発教育について理解していただけたことがよかった。

資料1・3 学級だより

4 備考（授業者による自由記述）

フィジーの単元を始めるにあたって、テーマソングを「小さな世界 It's a small world (訳 岩谷和子)」にした。曲を探すときに、同じメロディで「子どもの世界 (訳 小野崎孝輔)」という別の歌詞があることを知った。ただ歌詞が、前者は「世界はせまい 世界はおなじ 世界は丸い ただひとつ」とあるのに対して、後者は「すてきな世界 すてきな世界 すてきな世界 子どもの世界」となっている。原曲の同じ部分は、「It's a small world after all」の繰り返しだったので、学習のねらいに合わせて、私は「小さな世界」を選んだが、「子どもの世界」の方は、4年生の音楽の教科書にも載っている。訳によって伝わる印象の違いを面白く感じた。

【添付資料】

- ・資料2 学級だより(スル体験)
- ・資料3 ロティ作りのふりかえり
- ・資料4 学級だより(ロティ作り)
- ・資料5 地球の食卓ワークシート
- ・資料6 フィジー全体ふりかえり

【参考資料】

- ・Pスパアー(1982)『せかいのひとびと』評論社
- ・長新太(1981)『世界のあいさつ』福音館書店
- ・Wise100doors『We are Fiji (feat. Suzy Vulaca)』
- ・ピーターメンツェル・フェイスダルージオ(2006)『地球の食卓』TOTO出版
- ・JICA地球ひろば(<https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/case/index.html>)

ほかほかレター 自由校立東海小学校
あすなろと学級だより

月 日 () さん

今日の学校生活の様子 (年 組)

期	読書・プリント・()	明日
1	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単
2	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単
長休み		
3	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単
4	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単
給食	全部食べた (残した)	
昼休み		
5	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単
6	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単	国語・書写・算数・社会・理科・音楽・ 図工・体育・道徳・学活・英語・総合・生単

明日の授業参観の様子

- ・学校だより
- ・学年だより
- ・保健だより
- ・給食献立表
- ・集金だより
- ・その他

明日の下课時刻

- ・2 : 45 (5 限)
- ・3 : 45 (6 限)
- ・2 : 30 (特別日課)

〇席指

〇持ち物

- ・体操服

担任より

資料2 学級だより (スル体験)

ほかほかレター 自由校立東海小学校
あすなろと学級だより

授業参観、懇話会のご参加、ありがとうございました！

1枚の布!? スルを着てみました！

フィジープロジェクト

先日の授業参観の続きを、昨日の生活単元学習で行いました。2 回目のあいさつゲームも、音楽にのびながら楽しかったです。その後に、国旗作製の体験をしました。お友達、役員役(スルを着せるお手伝い)、カメラマン役(懐かしの写真撮影)に分かれて、交代してやりました。

ダンボールカッター 初登場！

ダンボールのみつさちプロジェクト

授業参観でも、子どもたちが自主的に動いているダンボール秘密基地作りです。先週は、ダンボールカッターの使い方を確認して、キャタピラーを全員で作りました。

今週金曜日に、あすなろ2 名員で大人数に必要なダンボールをいだけに行きます。お店で正確しくふるまえるように練習していきます。

1 2 月 1 2 日 (火) 名 前 ()

フィジーのインド料理 ロティ作り

作った感想

食べた感想

皿あらいの感想

担任より

資料3 ロティ作りのふりかえり

ほかほかレター 自由校立東海小学校
あすなろと学級だより

ロティを作ろう！ (フィジープロジェクト)

小栗粉と水、塩、オリーブオイルを混ぜてこねておぼす。

両面を焼く。

フィジーのインド系の方は、ナンより手軽に作れるロティを、カレーをはきんでほぼ毎日食べているそうです。(現地の海外協力隊員より)

これまで、フィジーの生活、学校などを紹介してきました。今回は、実際にフィジー料理を作りました。フィジーで問題になっている肥満の原因の砂糖の取りすぎや、水不足について考えてもらいました。

フィジーでは、3つのために水をためてあらいをしました。水道はありますが、水を大切に使っています。

資料4 学級だより (ロティ作り)

フィジープロジェクト『世界の食たく』
 <世界の家の食べ物をたんけんしよう>

★国当てクイズをしよう!

	
①	②
	
③	④
	⑤
⑥	日本

★ランキングをつけてみよう!

しつもん1

第 1 位	
第 2 位	
第 3 位	

しつもん2

第 1 位	
第 2 位	
第 3 位	

資料5 地球の食卓ワークシート

フィジープロジェクト

(1) 一番心にのこったたんけんにも、○をつけましょう。
 グーグルアース・あいさつゲーム・フィジークイズ・
 小学生ランキング・ロティ作りと皿あらい・世界の国の食べ物など

わけは、

(2) フィジーと日本が、にているところはあったかな?

(3) フィジーのいいところは?

(4) フィジーや外国に行ってみたい?行くとしたら、どこの国?

資料6 フィジー全体ふりかえり

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

フィジーの人々に、私ができることは何か探すことに主眼をおいた。それは、大学3年生時に、カンボジアの孤児院を訪問する学生対象のボランティアツアーに参加したことがきっかけである。孤児院の子どもたちとバレーボールで遊んだり、日本の歌を一緒に歌ったりしたことは、とても楽しかった。ただ、私たちが日本からもってきたプレゼントや再利用できるものが片付けられた部屋がちらりと見えたときに、他の団体が以前に置いていったものがたくさん目に入った。そのとき、相手にとって必要でないものを置いていくことは自己満足ではないかと、ボランティアについて疑問に思った。すると、慌ただしく1日だけ訪問する日本の大学生に対して、笑顔で遊んでくれた子どもたちに対して申し訳なく思えてきた。当時は、大学生だったので、子どもたちに伝えたいこと、私ができることは何もなかった。教員になって4年目になり、子どもたちに伝えたいことができた今なら、何か見つけられるのではないかと考えて参加した。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

視察の中で、途上国への支援についての価値観が2回揺らいだことがあった。

1回目に揺らいだのは、フィジーの人々のゆるやかで幸せな生活をたくさん目にした時だ。フィジーの人々に何かしたいと思って参加したが、フィジーの人々は、現状に満足していて、大きな問題を感じていなかった。訪問した学校の先生と話す、子どもや仕事に対しての熱意を感じたし、教育省の幹部の方もフィジーの教育に問題はないと話されていた。それならば、私ができることはないし、周りがあれこれ言う必要はないと思った。後進国ではなく、フィジーのような中進国といわれる国への支援は何であるか分からなくなった。

次に揺らいだのは、日系企業で働かされている林氏の話聞いた時だ。林氏は19年間、フィジーでフィジーの人々を雇って、日本食レストランを経営されている。林氏は、世界に通用する人材を育てるために、日本式の接客を教えておられた。ビジネスの視点から捉え直すと、フィジーの国民性は全く違って見えた。おおらかさは、だらしなざになり、身だしなみの乱れや無断欠勤につながる場合もあるのだ。でも、日本式の教育をするには、その人自身が世界に通用する人材になりたいかどうか確かめる必要があると感じた。実際、大黒レストランを1年未満でやめる人は20~25%いると話されていて、それはその人に合っていなかったのだと思った。20年続けて働いているシェフの作った、その日の昼食の弁当はとても美味しかったし、従業員の接客態度もとても気持ちよかった。林氏が根気強く指導してこられたことが、伝わってきた。

2回の揺らぎを通して感じたのは、途上国に対する本当に必要な支援のあり方である。フィジーで過ごす最終日、バスの運転手さんと話す機会があった。彼は、フィジーのバスの運転と、オーストラリアの大型トラックの運転と2つの仕事をしているそうだ。フィジーで働くのは、オーストラリアが冬で寒い期間だけだという。詳しく聞くと、オーストラリアの給料の方がいいので、いずれは家族全員でオーストラリアに移住すると話していた。“Fiji is no future.”と理由を答えた言葉が印象に残っている。また、協力隊の坂口隊員が働くランバサ病院には、ラグビー選手を目指している男性がいた。彼は、日本でプレーをしたいけれど、十分な費用が足りないので行けないのだという。彼らのように、経済的な理由で希望の職業に就けない人に対しては、経済的な支援が必要である。同じ問題は、日本にも起こっている。適切な支援をするためには、対象となる人や環境の現状を十分に把握すること、「ともに」課題に取り組んでいくことが大切だとわかった。JICAが目指している“cooperation(協力・協同)”の意味を理解することができた。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

今回の研修は、自分自身の成長にとってもつながった。特に、マリスタシャンペーンセカンダリースクールのシスターの“Before teach them, love them equally.(生徒を教える前に、平等に愛せ。)”という言葉が、強く心に残っている。日本でいう発達障害の生徒が対象の学校で、先生たちは毎日、生徒との関わりを楽しみ、生徒の小さな成長を見つけながら仕事をしてられるようだった。その熱意は、日本の先生と同じで、日々の忙しさに忘れていた自分の仕事のよさ、楽しさを改めて気づかされるきっかけになった。児童を「平等に」愛することは、難しい。けれど、これからの教師生活で決して忘れてはいけない言葉だと思った。

子どもたちに伝えたいのは、「世界は狭い」ということだ。出発する前、現在シニア海外協力隊で活動されている居村隊員から、「世界は狭いというふうに感じられたらいいですね。」と言われて、不思議に思いながら出発したが、今ならなんとなく分かる。今のクラスで、外国について聞く言葉の多くは、「ミサイル」「北朝鮮」など、よく理解せず、否定的に言っているものが多い。さまざまなニュースが世の中にあふれているなか、海外ニュースの割合が少なく、あったとしても否定的な内容が多いのかもしれない。だからこそ、実際に私が見てきたフィジーの学校の子どもたちの活き活きとした様子、ホームステイした村のあたたかさなど、多くのよいところを子どもたちに伝えたいと思っている。日本で暮らす私達と同じように、世界の多くの国にたくさんの方が生活していることを、実感をもって教えたい。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

今年度は、特別支援学級(自閉・情緒)を担当しているため、生活単元学習でフィジーでの学びを伝えようと考えている。今後は、現在担当していない社会や総合学習、外国活動の授業、学校全体で取り組む国際理解教育、平和教育に活用していきたいと考えている。

特に青年海外協力隊について、子どもたちに伝えたい。どの科目でも実践できる可能性はあるが、社会科で、世界の中での日本の役割を、青年海外協力隊やNGOなどの活動を通して学習する 때가ぴったりだ。3年生、4年生で自分の住む町や市などについて勉強してきた児童にとって、世界について想像するのは難しいかもしれない。教える側の私にとっても、同じく難しかった。けれど、青年海外協力隊の生き生きと働く様子を見たり、一生懸命に仕事に取り組む話を聞いたりしたことで、子どもたちに伝えたいことが今はたくさんある。また、教科書などの多くは働くやりがい、喜びについて書かれていることが多いが、実際は、外国で日本人が働く苦勞が数多くある。どちらも伝えることが大事だと思った。そして、できるならば、今回の研修で出会えた石川県出身の協力隊の方をクラスにお呼びして、お話を聞かせていただきたい。私自身、高校時代に青年海外協力隊に行かれた先生の話は今でも覚えている。子どもたちにとって、実際の協力隊の方の生の声は何よりの学びになると思う。

5 研修に関する全般的な所感

毎日の研修がとても充実していた。フィジーの現状について学習し、ホームステイや隊員の職場訪問などを通して、実際にその学びを自分の目で確かめることができた。そして、その学びを、毎日のように参加メンバー同士でふりかえりをできたことが、とても力になった。今回のメンバーは、校種も年齢も様々だったので、話し合うと新しい視点が増えて、自分の意見が整理されることが何度もあった。自分の思いを周りに話すことは勇気のいることだが、ふりかえりを何回も繰り返すことで、アウトプットすることに慣れることができた。自分の意見を言うことへの抵抗よりも、アウトプットしたことで新たな学びができると実感できた。話し合いを繰り返して完成した中間プレゼンテーションを終えた時は、達成感があった。

今回の研修では、私が子どものころからの夢を叶えることができた。途上国の子どもと関わる仕事をしたい、一緒に勉強したいというのが、私の夢だったので、訪問した小学校とホームステイ先の村の子どもたちに折り紙を教えたり、一緒に全力で遊んだりすることができたのが、本当に幸せだった。子どもたちと一緒に活

動した楽しさをもう一度味わいたいという新しい夢もできた。そのために、いつか青年海外協力隊に小学校教諭として参加したいと今は考えている。

6 JICA に対する要望・提言

今回の研修で、小学校と特別支援学校を訪問し、子どもたちの様子を知ることができて、とても有意義だった。自分たちが授業できたのもとても有意義だったが、可能ならば、フィジーの学校の授業を参観したい。実際にフィジーの先生たちが授業する様子を見て、参観後に授業づくりなどについて話し合いできたら、お互いに勉強になると思う。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

「開発途上国」のために、何かして「あげ」よう、これを絶対になりたいという風に、気負いすぎない方がいいと思う。帰国後の授業についての考えをもって、やりたいことを準備するのは大切だ。でも、それをやることに気持ちがなくなって、その場で起こっている大切なことを見逃してしまうかもしれない。私は、小学校訪問した時の休み時間に、そう感じたことがあった。私は、日本では一般的な大なわの8の字とびを、フィジーの小中学生と一緒にやりたいと思った。ただ実際にやると、子どもの数は予想以上に多く、やり方を全体に英語で説明するのは私には難しかった。そこで、8の時跳びを諦めて、子どもたちから自然に発生した遊びと一緒にやることにした。すると、子どもたちの中から場を仕切る子が出てきて、ピンと張ったなわをジャンプして跳びこえるという遊びが始まった。8の字とび以上に参加できる人数が増え、たくさんの子が笑顔で遊ぶことができて、私もとても楽しかった。反対に、準備しておいてよかったこともある。ホームステイでは、日本から準備してもってきた福笑いやだるまおとしを、ステイ先の息子さんと一緒にやることができた。空いた時間ができたので、おそろおそろおもちゃを出してみると、私の説明を一生懸命聞いて、楽しく遊ぶことができた。その場の雰囲気にもよると思うのだが、自分のやりたいことで頭をいっぱいしないで、周りの様子を窺ったり、相手の話を聞いたりしたらいいと思う。

自分や日本、フィジーのよい所を知ろう!伝えよう!

氏名	箸本 淳也	学校名	石川県立盲学校		
担当教科	保健体育	実践教科	総合的な学習の時間、作業学習		
時間数	26時間	対象学年	高等部2年	人数	1名

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

外国の文化や生活習慣を理解し、興味関心を持つと共に、自国の良さを知ったり自分を振り返ったりして、その成果を学習や生活の中で生かす。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	フィジーの文化や生活習慣について関心を持ち、積極的に調べたり、日本や自分のことを伝えたりする。
(イ) 思考・判断・表現	自分や日本、フィジーの良い所を考え、発表する。
(ウ) 技能	相手のことを意識し、より丁寧に紙すき製品を作ったり、送ったりする。
(エ) 知識・理解	世界には様々な人々が生活しており、色々な文化や生活習慣があることを知る。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

(1) 生徒観

本生徒は、弱視・知的障害を併せ有する教育課程で学習している。教師と一对一の授業が多く、コミュニケーションを取ることが出来る同年代の友人が少ない。また、経験不足や周囲の大人への依存度の高さから、自分から言動を起こすことには消極的な傾向が強く、緊張すると言葉が詰まることが多い。生徒は、中学部での総合的な学習の時間で、他国の国際交流員との交流や他の学級の生徒と共に国際理解教育について共同学習を行った経験がある。決まった挨拶をすることは出来たが、主体的に自分のことを伝えたり、関わろうとしたりする姿は少なかった。高等部に進学してから、自分の思いを弁論大会で伝えたり、学習の成果を壁新聞やパワーポイントで発表したりする表現活動の経験が増えてきた。今後、将来の自立と社会参加に繋げていくには自分のことを相手に的確に伝えたり、相手のことを受け止めたりするコミュニケーション力の向上が必要だと考える。

(2) 題材観

国際理解教育は、子どもたちが自国とは異なる様々な文化や生活習慣、伝統に触れ、その違いに気づき、異文化を認めるとともに、自国文化についても誇りを持ち、世界各国の人々と共生していこうとする態度を養うことを目的としている。今回、フィジーの文化や生活習慣を理解したり、直接体験や手紙でやり取りを行ったりすることでさらに知りたいという探究心が育つと考えた。活動を通して、外国の文化や生活習慣に興味関心を持ち、他国や相手を尊重する心を育てるとともに現在の自分を振り返り、新たな課題を見つけることが期待される。また、手作りのプレゼントや手紙を送ることでさらに交流が深まると考え、紙すきの活動を取り入れた。紙すきは古紙をリサイクルすることができ、日本の文化、伝統の1つでもある。生徒は、昨年から作業学習の時間に牛乳パックのがき作りに取り組みできており、手順を覚え、一人で製作できるようになった。自分の作ったのがきで手紙を出すことは、自信をもって取り組める意欲的な活動になると考えた。

(3) 指導観

指導にあたって、外国の文化や、生活習慣等の課題だけを取り上げるのではなく、食物や音楽、スポーツ、遊びといった生徒の興味・関心の高いテーマを取り上げ、直接五感で体感でき、主体的に取り組めるようにする。また、一对一の授業なので、生徒の思考や理解のペースに合わせるようにし、現地の子どもたちのアンケートを紹介したりすることで、他の人たちの意見を聞いたり、比較したりする場面を設定する。さらに、生徒が作った紙すき製品をはがきにして送ったり、手紙などのやり取りをしたりすることで、人との関わりを世界に広げ、現地の人たちの考えをより身近に感じ、日本や自分について再認識出来るようにする。本単元を、生徒が異なる文化や生活習慣を正しく理解し、それぞれにある個性や良さを認め合える感覚を養う機会とする。

04 | 展開計画 (全 26 時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 (2)	「外国に目を向けよう」	<ul style="list-style-type: none">・ 外国の異なる文化や生活習慣、海外青年協力隊員の活躍について知る。	「世界がもし100人の村だったら」 「僕ら地球調査隊 (小冊子5種類)」 「学校に行きたい」 写真など
2 (11)	「フィジーの文化や生活習慣について調べ、発表しよう」	<ul style="list-style-type: none">・ フィジーの国について知る。・ フィジーの文化や生活習慣について調べる。・ フィジーの文化や生活習慣について発表する。・ フィジーの人たちや海外青年協力隊員へのプレゼントを考える。・ 紙すきでプレゼントを製作する。	写真など 製品の材料、作業の道具など
3 本時 (5)	「自分や日本、フィジーのよい所を見つけよう」	<ul style="list-style-type: none">・ フィジーの文化や生活習慣を体感する。・ フィジーの特別支援学校で行われていた「自分のよさに気づき、認める」授業を体験し、自分のよさを考える。・ フィジーと日本の文化や生活習慣について、写真や動画を比較し、それぞれのよさを考え、発表する。	フィジーの生活用品や民芸品、教材、アンケート【資料2・3】、 動画、写真など ワークシート 【資料1】 フィジーノート 【資料4】 スライド
4 (5)	「フィジーの人たちにメッセージを送ろう」	<ul style="list-style-type: none">・ フィジーの人たちや海外青年協力隊員からのメッセージを読み、お礼や応援メッセージを考える。・ 紙すきでお礼や応援メッセージ用のはがきを製作する。・ フィジーの人たちや海外青年協力隊員へお礼や応援メッセージを書き、送付する。	メッセージ 【資料5】、 写真など 製品の材料、作業の道具など
5 (3)	「学校みんなに伝えよう」	<ul style="list-style-type: none">・ これまでの学習を壁新聞にまとめる。・ これまでの学習を友だちに伝える。	壁新聞など

05 | 本時の展開

- (1) 題目 自分や日本、フィジーのよい所を見つけよう
- (2) 本時の目標 フィジーと日本の文化や生活習慣を比較し、それぞれのよさを発表する。
【思考・判断・表現】
- (3) 準備物 フィジーの衣服・お金・民芸品など、写真、動画、パソコン、付箋紙、ワークシート、黒板用シート、フィジーの子どもたちのアンケート、フィジーノート、拡大読書器

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (2分)	1. 始めの挨拶をする。 2. 本時の目標について確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「お願いします。」をはっきりと伝えるように声かけをする。 ・気付いたことや考えたことをワークシートに記録していくように促す。 	ワークシート 【資料1】 パソコン
展開① (20分)	3. フィジーの文化、生活習慣を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジーの衣服やお金、民芸品などの実物、写真、動画を準備し、フィジーの文化や生活習慣等を五感で感じられる場の設定を行う。 ・前時までに学習したフィジーノートを確認するように声かけをする。 ・お金の図柄等は、拡大読書器で拡大してみるように声かけをする。 	フィジーの衣服・お金・民芸品など 写真や動画 フィジーの子どもたちのアンケート 【資料2・3】 フィジーノート 【資料4】
展開② (18分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> フィジーと日本の文化、生活習慣を3つの場面の写真や動画で比較し、それぞれのよさを考え、発表する。 </div> 4. フィジーと日本の文化、生活習慣を比較し、それぞれのよい所を考え、発表する。 ・食事 ・スポーツ・遊び ・学校	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の興味関心がある3つを選び、提示する。 ・付箋紙にキーワードを記入し、黒板のシートに分けて貼る。 ・発表の時は、「コミュニケーションの約束」を守り、はっきりと伝えるように声かけをする。 	拡大読書器 黒板用シート 付箋紙
まとめ (10分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> フィジーと日本のそれぞれのよさを考え、発表できた。 </div> 5. 終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジーにも、よい所が多くあることや日本の進歩を伝える。 ・生徒の意見を尊重し、目標にそって発表できたことを確認し、褒める。 <ul style="list-style-type: none"> ・「ありがとうございました。」をはっきりと伝えるように声かけをする。 	

≫ 授業実践の様子

フィジーの衣服やお金、民芸品などの実物、写真、動画を触ったり、見たり、聞いたりして、フィジーの文化や生活習慣を五感で感じる。



「日本とフィジーの距離は?」



「フィジーの民芸品やお金を調べよう。」

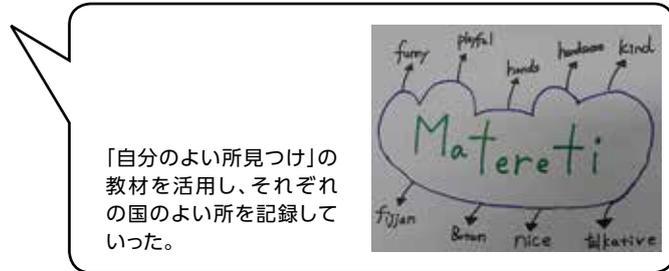


フィジーと日本の文化、生活習慣を比較し、それぞれのよさを考え、発表する

フィジーと日本のそれぞれのよさを考え、発表しよう!



「それぞれのよさって何だろう。」



「自分のよい所見つけ」の教材を活用し、それぞれの国のよい所を記録していった。



*「見えにくさ」は、大型モニターや拡大読書器を活用し、カバーした。



「村の木に実っている果物は何だろう。」



「紙幣に描かれているものを調べよう。」

06 | 本時の振り返り

本時は多くの授業参観者がいて、生徒は緊張している様子だった。しかし、普段の授業よりも積極的に前向きな姿で取り組んでいた。授業内容には、「フィジーと日本のよい所見つけ」を設定したが、違うことよりもお互いのよい所を見つけ、自己理解や他者理解を深めながら、生徒の興味関心や人との関わりを広げていくことを目指した。前半のフィジーの文化、生活習慣の紹介が長く、生徒の考える時間が短くなってしまった。また、気付いたことや考えたことをワークシート【資料1】に記録していく時間が十分に取れていなかった。教師と一対一の授業だったが、お互いのよさをよく考え、発表していた。最後に「フィジーと日本のどちらがよいか?」という質問に対して、「どちらともよい。」と自信を持って答えていたことが心に残っている。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

今回の単元では、国際理解教育に加えて生徒のコミュニケーション指導にねらいをおいた。単元を通して、「話を聞く」「自分の思いを伝える」力を向上することができた。また、コミュニケーション力を高めるには、他者理解とともに自己理解が大切だと考える。異文化のフィルターを通して、日本や自分はどうか、自己理解や自分の見つけなおしを行ってきた。「自分のよい所見つけ」では、生徒は自分のよい所をなかなか挙げるできなかった。フィジーの生徒の様子や意見を聞いているうちに、表いっばいに自分のよい所を挙げるようになった。自分の住む国「日本」についても同様で、日本らしい食物、物、遊び、場所などを考え、答えることができるようになった。十分な異文化、他者理解までは、生徒の実態から難しいが、自己理解とともにそれを意識するようになってきた。

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

食物や音楽、スポーツ、遊びといった生徒の興味・関心の高いテーマに関しては、特に主体的に取り組んでいた。さらに、現地の子どもたちのアンケート【資料2・3】を聞いたり、直接、本生徒宛にメッセージ【資料5】や手紙をもらったりした時は、とても喜んでいて、その後の活動は、学習意欲も向上し、積極的かつ自主的に取り組むことが増えてきた。また、今回、手作りのプレゼントやはがきを送ることでさらに交流が深まると考え、紙すきの活動を取り入れた。生徒にとって、昨年からの作業学習の時間に取り組んできており、手順を覚え、一人で製作できるようになった活動である。今まで、教師から提示された手順や内容で作っていたが、今回の活動では、内容を自分から考えたり、提案したりしてきた。本生徒らしい温かいプレゼントやはがきになった。



「紙すきではがき作り」



「紙すきでメッセージカード作り」

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

授業前、本生徒は他国や異文化について興味関心はほとんどなかった。知っている国名も数か国だけで、文化や生活習慣の違い等、知識もなかった。4年前、中学部の総合的な学習の時間で、他国の国際交流員との交流や他の学級の生徒とともに国際理解教育について共同学習を行った経験がある。当時は、決まった挨拶をすることはできたが、主体的に自分のことを伝えたり、積極的に関わろうとしたりする姿は少なかった。授業前、この時の内容を質問したが、ほとんど覚えていなかった。

(授業後)

世界には、色々な国があることやそれぞれの国に独自の文化や生活習慣があることが分かった。授業が終わってから、外国のニュースや2020年に開催される東京オリンピックやパラリンピックを話題にして話をするようになり、異文化への興味関心が広がった。授業後の感想文には、フィジーの文化や生活習慣だけではなく、フィジーのよさや日本のよさ、海外青年協力隊員が日本のよさを外国の人たちに伝え頑張っていること、リサイクルや手作りの製品の素晴らしさを知ったことなどが書かれていた。【資料6】

また、本校で行っているペットボトルキャップの回収、リサイクル運動でもその主旨を知り、積極的に取り組むようになった。途上国に対して、「自分ができること」を考えるようになってきた。



「壁新聞で学習発表会」

08 | 自己評価

1 苦勞した点

本校では教師と一対一の授業が多く、同年代の生徒がいないので、授業の中で生徒同士が学び合うことが少ない。今回、フィジーの人たちやJICA関係者の協力を得ることができ、現地でプライマリースクールの生徒からアンケート【資料2・3】を収集したり、直接生徒とメッセージをやり取りしたりすることができた。しかしながら、その教材準備や連絡調整等は大変だった。また、本生徒は視覚に障害があり、視覚的な手がかりに難しさがあったので、モニターや拡大読書器等を活用したり、フィジーノート【資料4】などの教材の提示等、工夫したりした。

さらに、本時の反省にもあったが、もう少し時間的に余裕をもった単元や授業構成で行えばよかった。年間の指導計画が出来てからの単元だったので、設定が難しくなってしまった。

2 改善点

本校に限らず、同年代の児童生徒の直接的なやり取りは、学習意欲につながり、効果的である。そのような環境を設定するために教師自身が積極的に研修に参加し、現地の人たちとつながる必要があった。さらに、環境づくりは年間の指導計画に入れることは難しいが、出来るだけ早く行い、余裕を持った時間設定を行うとよい。

視覚障害に関して、教材の細かい部分を観察する時には、機器の活用や教材の工夫を行った。

3 成果が出た点

生徒の変容が一番の成果だった。生徒の興味関心や人との関わりの広がり、国際理解教育のねらいだけでなく、コミュニケーション能力の向上にもつながった。まとめの時間では、壁新聞を作り、友だちや他の教師に堂々と発表することができた。

4 備考（授業者による自由記述）

今回、海外研修に参加し、授業を実践してみて実感したことは、教材研究、授業準備、環境づくりの大切さである。また、教師自身が国際社会に対する認識を新たに、自己の国際感覚を磨いていかなければいけないと感じた。さらに、研修を通して「国際理解教育」「国際協力」について改めて考えさせられた。

現地でしか得ることができない情報や磨くことができない感覚を身につけ、生徒に還元できたことがよかった。また、現地の人に限らず、JICAスタッフや海外青年協力隊員、同行したメンバーからの学びはとても貴重で、そのつながりは、これからの教育実践にもつなげていきたい。

【添付資料】

- ・ワークシート「フィジーと日本のよい所を見つけよう!」【資料1】
- ・プライマリースクール 生徒実態アンケート(アンケート用紙【資料2】、アンケート結果【資料3】)
- ・フィジーノート【資料4】
- ・ベンさんからのメッセージ【資料5】
- ・本生徒の感想文【資料6】

【その他使用資料】

- ・「フィジーを体感しよう」(授業用スライド(フィジー/作 箸本淳也))

【参考資料】

- ・池田香代子著「世界がもし100人の村だったら」(マジンハウス)
- ・「僕ら地球調査隊(「いのち、輝け!」「砂漠化する惑星」「学校に行けない世界の子どもたち その1・その2」「世界の食料」「世界の水問題」)」(JICA国際協力機構)

フィジーと日本のよい所を見つけよう!

【資料1】

【資料1】

【資料2】

Name

フィジーの子どもたちが好きな (What is your favorite ~?) 

食べ物は、 です。
food

動物は、 です。
animal

スポーツは、 です。
sports

遊びは、 です。
play

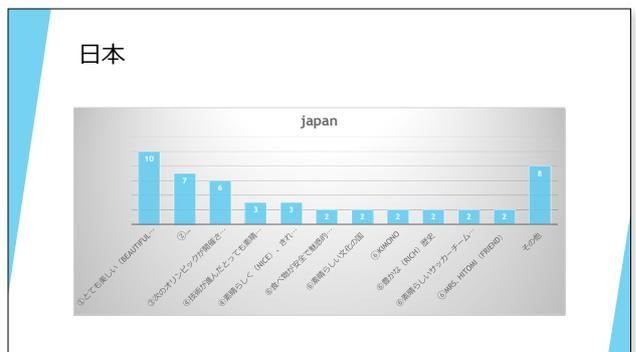
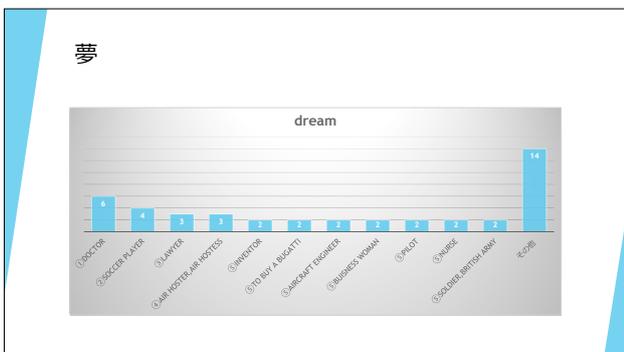
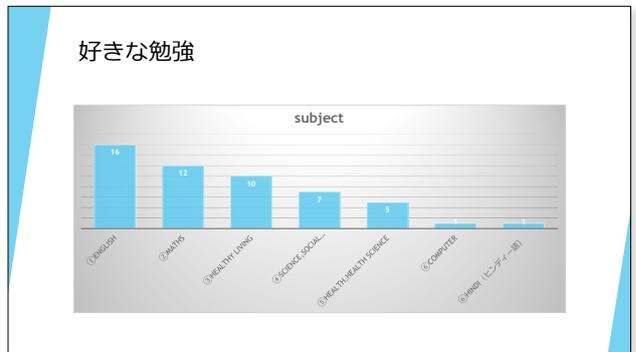
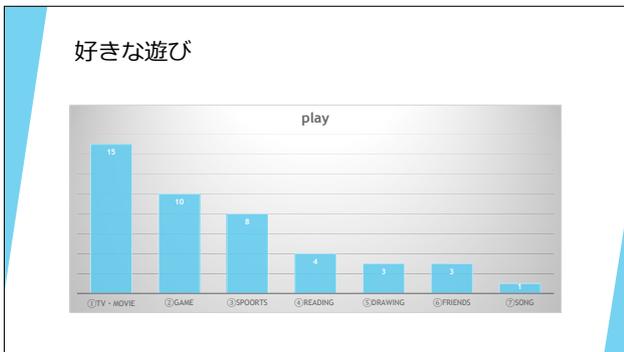
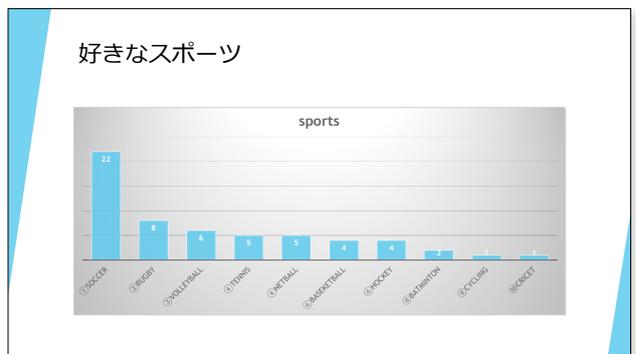
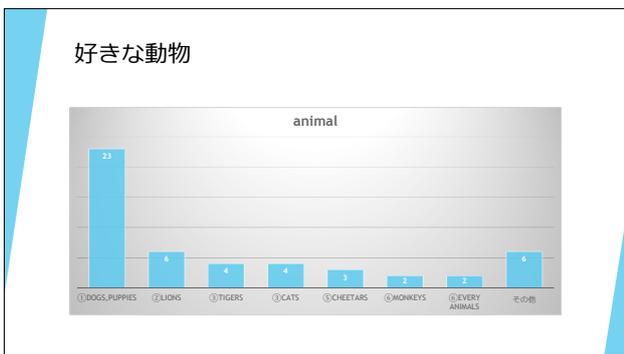
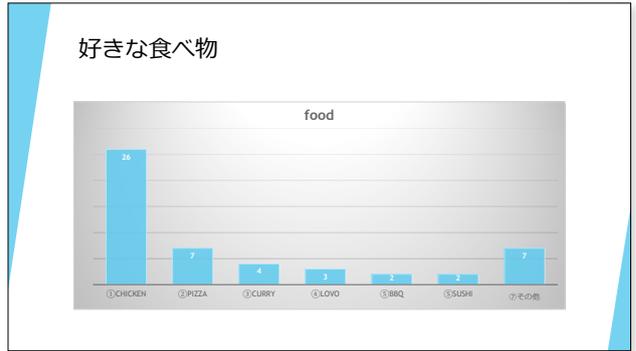
勉強は、 です。
subject

将来の夢は、(What is your future dream?) です。

日本について知っていること (もの) は、(What do you know about Japan?) です。


【資料2】

Fiji プライマリースクール アンケート



【資料3】

【資料4】



- 1 フィジーってどこにあるの？ (地図)
- 2 フィジーと日本の人口ピラミッドの比較
- 3 フィジーの先生のメッセージ (配達が必要な生徒へ)
- 4 日本からのプレゼント (メッセージカード)
- 5 SS (海外青年協力隊員の取り組み 病院の掲示物)
- 6 フィジーの「コミュニケーションの約束」 (教室の掲示物)
- 7 フィジーの子どものたちの夢 (教室の掲示物)
- 8 フィジーの子どものたちのよい所見つけ (教室の掲示物)
- 9 フィジーと日本のよい所見つけ
- 10 薬物乱用防止 (教室の掲示物)
- 11 村の食事
- 12 フィジーの硬貨と紙幣
- 13 ペンさんからの手紙
- 14 プレマリースクールアンケート結果

*「フィジーノート」は授業のポイントをしぼり、本生徒が見やすく、理解しやすいように作成したものである。ここでは、目次のみ紹介する。

【資料4】

【資料6】

フィジーの勉強から学んだこと

石川県立盲学校高等部 2年 K

僕は先生と一緒にフィジーの国について勉強しました。フィジーは日本から飛行機で14時間かかり、日本と気候が反対です。お金に困花などが描かれ、自然を大切にしています。フィジーの国の勉強の中で僕は4つのことを学びました。

1つ目は日本との違いと2つの国のよい所です。フィジーの人は、日曜日になると教会にお祈りに行きます。それは神様を信じているからだと思います。次は、フィジーの学校は日本と違って、2つの学校に分けられています。プレマリースクールとセカンダリースクールです。フィジーの国は子供が多く、元気です。

2つ目は発展途上国でくらす人々の生活です。僕は初め、発展途上国で暮らす人は貧しいと思っていました。でも、貧しくても楽しい生活を送っているのだと勉強の中で思いました。例えば、1つしかないボールをみんなで楽しく使っています。他に近所の人たちと一緒にご飯を食べたりしています。他の人と一緒に食事をするのはよいことだと思えます。食事が楽しそうだなと思いました。

3つ目はJICAや海外青年協力隊員のがんばっている姿です。この勉強の中で3人の海外青年協力隊員のがんばっている仕事を勉強することができました。まずは、竹内さんです。竹内さんは日本の老人ホームのことを教えています。次は坂口さんです。坂口さんはSSのことを教えています。SSとは整理整頓のことです。フィジーの人は整理することが苦手な人が多いです。実は、僕も整理することが苦手です。この勉強をして整理することの大切さを勉強しました。最後は高野さんです。高野さんはごみの分別のことを教えています。分別をしないと環境に悪いらす。フィジーの人にも分別のよさややり方を覚えてもらいたいからだと思います。

4つ目はリサイクルや手作りのよさです。リサイクルのよさは、環境に優しいこととごみを減らせることです。手作りのよさは、相手に喜ばれることと作っている人も楽しめることです。リサイクルは日本や海外でもあまりできていないと思います。僕もこれからは、使い続けられる物は使い、リサイクルしていこうと思います。僕は、手作りカードを作りました。フィジーの人に喜んでもらえてよかったです。ペンさんから手紙をもらいました。これから手紙の交換をしていきたいと思っています。

この勉強で分かったことは、フィジーは日本と同じでよい所がたくさんあったことです。また、フィジーの人は優しく元気なことです。僕は、フィジーの勉強をしたら、フィジーに行ってみたくくなりました。

【資料6】

【資料5】

Greetings dear friends
(親愛なる友人)

I would like to take this opportunity to kindly thank you my friends for the art you have created.
(この機会に改めてあなたが作られた温かい作品に感謝の意を表したいと思います。)

It is so creative and beautiful.
(とても創造的で美しいです。)

This shows how warmly greathearted you guys are.
(これは暖かく、寛大なあなたのことが表れています。)

I'm going to put this gift of mine at home as a memory of thanking you guys for such a group creative art.
(私は、そのような創造的かつ芸術的な作品に対して、感謝の思いをとどめておくために、自宅に置つもりです。)

To conclude, I would like to wish you guys the very best in your future creativity and I'm looking forward to exchange skills of art with you guys.
(終わりに、私は、あなたの創造力豊かな最高の将来を祈ります。そして、私はきみたちと芸術の交換ができることを楽しみにしています。)

Once again thank you so much.
(もう一度、ありがとう。)



Thank You.
(ありがとう)

【資料5】

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

私はこれまで、肢体不自由、知的障害、視覚障害のある生徒が通う特別支援学校の教諭を務め、児童生徒の実態に応じた国際理解教育を実践してきました。現在は、盲学校で視覚的な手がかりが難しい児童生徒に指導しています。盲学校の児童生徒は、人とのかかわりが少なく、経験不足や周囲の大人への依存度の高さから、自分から言動を起こすことに消極的な傾向が見られます。そのため、国際理解教育の実践にあたって、私は児童生徒のコミュニケーション力を高めることや五感を十二分に使ったアクティブな授業づくりを心がけてきました。しかし、私自身、海外での経験がほとんどなかった上に、2020年東京オリンピック・パラリンピックを迎え、オリパラ教育の推進が求められている今、私自身の学びとしても世界の文化に触れたいという思いが強くなり、本研修に参加しました。

そのような思いの中での研修で主眼をおいた点は、盲学校の児童生徒に活用できる教材を見つけ、持ち帰ること、児童生徒のコミュニケーションを広げる環境づくりをすること、他国の特別支援教育やスポーツ環境について学ぶことでした。特に、コミュニケーションの広がりについては、人とのかかわり合いの中から得られるものだと考え、研修では、積極的に取り組むようにしました。その結果、フィジーの人たちだけではなく、JICAスタッフ、青年海外協力隊員、同行した11人のメンバーなど、多くの人とつながることができました。このかかわりは、私にとっても大きな財産となり、授業の中で、児童生徒にも伝え、つないでいきたいと考えています。また、フィジーの特別支援学校の実情やスポーツ環境を知り、そこで学習し、楽しそうに体を動かす子どもたちの笑顔にも直にふれることができました。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

今まで、発展途上国と聞いた時、人々が食料不足や貧困で苦しんでいる姿を思い浮かべていました。しかし、フィジーでは、貧しいながらも衣食住に困らない生活を営み、子どもたちは楽しそうに学校に通っていました。ただ、そのような国でも、いろいろな課題があり、その1つである「生活習慣病」について実情を知った時は、大変驚きました。

また、学校に楽しそうに通う子どもたちの笑顔を見て、豊かさを感じました。見知らぬ日本人に笑顔で「Bula!(こんにちは。)」と答えてくれるフィジーの人たちのムラでは、家族みんなが集まって笑顔で食事をとる陽気な姿が見られました。モノがそろい、溢れている日本が豊かなのか、モノが足りない中でも、笑顔で過ごしているフィジーが豊かなのか、本当の豊かさとは何だろうと考えさせられました。

さらに、青年海外協力隊員から、国際協力の場では、相手国の価値観を受け入れ、理解することが最も重要で、そのことがとても難しいことであることを教わりました。生活習慣や価値観の違いを埋めていくことは大変難しいことですが、フィジーの国をよりよいものにしたいという隊員の努力は大変なことだと感じました。当初、考えていた「発展途上国」や「国際協力」とは大きなギャップがあり、先進国が行う国際協力の意義や協力・支援そのものがおしつけになっていないかなどいろいろ考えさせられた研修でした。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

今回の研修を通して、私は教育観だけではなく、人生観、世界観まで刺激を受けることができました。フィジーに特別支援学校や盲学校、聾学校、発達障害の児童生徒を対象とした学校があるということを知った驚きは盲学校の児童生徒にも伝えたいです。同じ障害のある児童生徒がフィジーでも学校に通って、笑顔でがんばっている様子を伝えたいです。そして、英語力に自信のなかった私でも、コミュニケーションができたことやフレンドリーで明るいフィジーの人たちからコミュニケーションはハートが一番大切だということを改め

て教わったことは、自身の成長にもつながりました。

また、研修では、学校現場だけではなく、医療関係の場所を訪れ、スタッフから話を聞いたことで、多方面からフィジーを捉えることができました。特別支援教育と医療機関との連携は必要不可欠であり、今回の経験は、私自身の大きな学びとなりました。

今後、授業の中で、フィジーの国や人々の様子を伝えるだけではなく、広い世界には、いろいろな考えや文化があること、それぞれの場所で精いっぱいがんばっていること、「みんな違ってみんないい」という精神を伝えていきたいです。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

今回の研修でつながった人とのかかわりを今後も大切にしていきたいと考えています。また、盲学校に限らず、特別支援学校の児童生徒たちには、もっと世界を身近に感じてもらい、「みんな違ってみんないい」という精神を伝えていきたいです。

2020年には、東京オリンピック・パラリンピックが日本で開催されます。一過性のスポーツイベントではなく、文化の祭典でもあり、オリパラ教育とそこで得られる学びは、子どもたちにとって大きな経験となります。特別支援学校で学ぶ児童生徒を含む次の時代を担う子どもたちの健全な育成がなければ、将来の世界や日本はありません。この研修を基にこれからの国際理解教育やオリパラ教育の実践を通して、グローバルな視野をもつ子どもたちの育成をめざしていきたいと考えています。

5 研修に関する全般的な所感

事前研修を含め、濃厚かつ充実した2週間でした。「Bula!(こんにちは。)」と気さくに声をかけてくれるフィジーの人たち。日本にはない(なくなった?)よさをたくさん見つけることができました。発展途上国だからなのではなく、フィジーにあって日本になくなったものもありました。フィジーから教えてもらったことが多くありました。JICAスタッフには、事前にフィジーの特別支援教育やスポーツ環境について学びたいという要望を伝えましたが、そのニーズを叶えるために、負担をかけてしまったかもしれません。ただ、自分が考えていた以上に、その環境について見学し、現状を知ることができました。

ムラで現地の人たちとともに生活をしたことも私にとってよい人生経験となりました。2日間だけの短い時間でしたが、ともに生活することで、家族の一員となって、フィジーの文化に触れることができたような気がします。そういった意味でもプライマリースクールの訪問等、各箇所での見学や体験の時間がもう少し、長かったらよかったのかもしれません。訪問客としてではなく、そのメンバーの一員となり、溶け込むことで、より深く現地の文化を知ることができるのかもしれません。

6 JICA に対する要望・提言

フィジーの人たちの大らかさから、スケジュールの調整や研修内容の企画、運営等、JICAスタッフは大変、ご苦労をされたかと思います。また、11名のメンバーのニーズを具現化しようと、最大限に動いていました。このような素晴らしい研修を受けられたのもJICAスタッフのおかげだと感謝しています。この学びは、受け持つ児童生徒に還元していきます。

このフィジーとのつながり、そして広がりを継続するためにも、数年後、またフィジーを訪問できたらと考えています。その時のサポート等があれば嬉しいです。また、この研修をぜひ、いろいろな人に紹介し、教師も世界の国々のことを知ることの大切さを伝えたいです。この研修についての情報は、現場の教師にはなかなか伝わっていないのが現状です。このような素晴らしい研修を広く、現場の教師に伝える場があればよいかと考えます。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

2週間という短く限られた時間の中で、積極的に現地の人たちとかわってください。多くの人との出会いやかかわりが大きな財産となります。毎日毎日が濃厚で学び多き研修です。それは、参加者の気持ちの持ちようでもあるかと考えます。現地で新しい発見もあります。ただ、帰国後の授業のビジョンや個人の研修の目的や主眼については、明確にし、準備をしていった方がよいかと考えます。それがはっきりしていると、研修中でも機敏に動けると思います。

また、今回、同行したメンバー11名はそれぞれ小学校、高等学校、特別支援学校に勤め、年齢にも幅がありました。そのメンバーとのつながりもとても大きなものでした。現地でも協力し合い、教育について語り合った仲間たちです。そんな素敵なメンバーにも出会える研修です。

とにかく、たくさんの出会い、人とのつながりを求めて行って下さい。現地の文化、生活習慣や価値観の違い等でとまどうことがあるかもしれませんが、「みんな違って、みんないい」精神で、たくさんの学びをつかんでください。

フィジーの果てまでイッテQ

氏名	小濱 瑤子	学校名	石川県加賀市立動橋小学校		
担当教科		実践教科	学活、道徳(生命尊重D-17)		
時間数	6時間	対象学年	2年	人数	18人

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

フィジーという国を知って、新しく知識を獲得するとともに、自分たちの生活を振り返る。
また、将来の夢について意欲を持たせたい。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	フィジーという国について関心を持つ。
(イ) 思考・判断・表現	フィジーのよさについて考えることができる。
(ウ) 技能	
(エ) 知識・理解	フィジーの暮らしや文化について理解できる。

03 | 単元設定の理由

◆ 児童/生徒観 ◆ 教材観 ◆ 指導観

とても明るく元気いっぱいのクラスである。何にでも興味を持ち、知りたい、やってみたいという気持ちが強い児童が多い。海外研修に行く前は、フィジー語やヒンディー語での簡単なあいさつや自己紹介を教室に掲示して、一緒に練習してきた。また、世界地図で、フィジーの場所を確認したり、世界中の国旗の中からフィジーの国旗を探したりした。海外のことについて意欲的に学ぶ姿勢がみられるが、自分たちと関係のない外国のこととしてとらえている。そこで、世界の現状を自分たちの生活と比べてみたり、実際に体験したりする活動を通して、自分たちの生活が当たり前でなく幸せなことであるという心情を育てたい。また、フィジーについてとりあげ、フィジー国について理解を深めさせたい。

2年生では、町探検をして自分のまちのおすすめを調べている。自分のまちのおすすめを見つけて、他県の小学生に紹介する活動をしてきた。

知っている国といっても、数少ない。3年生では、自分たちの住む市(加賀市)について調べ、4年生では県、5年生世界と、範囲を広げて学習していく。

フィジーは日本と同じような島国である。しかし、同じ島国でも、話す言葉や、暮らし、食べ物など違う点がたくさんある。フィジーのいいところを見つけを通じ、理解しあう気持ちを育てるとともに、世界について知識を広げることをねらいとする。

日本以外に知っている国は数少ない中で、フィジーという国の場所がまずは分かるように授業のたびに世界地図を掲示しておく。イメージを持ちやすいよう、写真を多く使っていきたい。また、興味を持たせられるよう、主にパワーポイントを使ってクイズを取り入れながら授業をしていく。学びを深めるために、授業中は常にどう思ったのか、疑問を考えさせる時間をとる。

民族衣装や、お金などの具体物の異文化に触れさせ、わくわく感を持たせながら世界の国について学ぶ場とする。

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 学活	<p>「世界にはどんな国があるのかな」</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界にはたくさんの国があることを知る。 フィジーという国を知り、どのような国なのか興味を持つ。 	<p>○世界にはいくつ国があるかな。知っている国を挙げてみましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 地球儀や世界地図を提示して、大体いくつ国があるか予想させる。 だいたい200の国があることを実感させるため、ブロックカードを提示する。 国名を板書し、世界地図で場所を簡単におさえる。  <p>(資料1 児童が日本とフィジーを見つけて書き込む)</p> <p>○フィジーの場所はどこかな。日本とにていることがあるかな。どんな国だと思う?(あつい?言葉?たべもの?)</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本の場所、フィジーの場所の確認をし、似ている場所を共有することで、親近感を持たせる。 <p>○写真を見ながら、気づいたこと、感想を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> どう思ったのか、何が不思議に思ったのかを発表させる。 <p>○おもしろい!すてき!もっと知りたくなった!ことなどをまとめる。</p>  <p>(資料2 学習の見通しを持たせて意欲向上につなげる)</p>	<p>パワーポイント1 地球儀 世界地図 算数ブロックカード (200個分) 写真(人、服装、ショッピングセンター、マーケット、車、食べ物)</p>
2 本時 道徳	<p>「フィジーってどんな国?①お休みの日」</p> <ul style="list-style-type: none"> クイズ形式にしたり、日本と比べたりしてフィジーの国について理解を深める 	<p>○じぶんたちは休みの日、何をしているかな? フィジーの人たちは休みの日、何をしているかのぞいてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> スルを巻いてみる 教会、マーケットの動画を見て感想を交流する。 実際にフィジードルに触れさせる。 	<p>スル 動画1教会 動画2高野さん 動画3買いのもの 写真 (教会、マーケット、お金)</p>

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
<p>3 学活</p>	<p>「フィジーってどんな国?②村で暮らそう」</p>	<p>○服装を整えましょう。 (資料3 スルをまく、あいさつをする)</p>  <p>○村に入る儀式(ココナッツのおわん)、 動画を見る。</p> <p>(資料4 子どもたちが自分たちの生活 と比べて見つけた「いいな」や「びっくり」 や「同じ」)</p> 	<p>写真 (儀式の写真) おわん、うちわ</p>
<p>4 学活</p>	<p>「フィジーってどんな国?③学校に行こう」</p>	<p>○学校につきました。何を勉強しますか? どんな学校生活をおくっているのかな?</p>  <p>(資料5 ダンスを踊っている子どもたち を見つけて「この人上手!」)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業(1クラス50人、先生は英語を話す) や昼食、グランドの写真を見せる。 ・フィジーの子どもたちがしていたあそび (こおりおに)をやってみる。  <p>(資料6 ルールだけを説明すると、「こ れ、こおりおにだ!!」)</p>	<p>写真 動画4ダンス</p>

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
5 道徳	世界のことを知ろう	<p>○当たり前かな。 ・学校に行ける ・おなかいっぱい食べられる</p>  <p>(資料7 自分たちの生活と世界とを比べて考えている様子)</p>  <p>(資料8 字が読めないことの困難さを体験) ○自分をみつめよう。</p>	アラビア語でかかれた(水、毒、薬)のコップ パワーポイント2
6 学活	発見!こんなところに日本人	<p>○フィジーの人と協力して、頑張っている人がいるよ。どんな仕事かな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大黒さんの話(従業員を育てるための教育、世界で活躍できるように) ・高野隊員の話(ゴミ問題を解決するために、したこと、考えたこと) 	写真 大黒さんの作ったマナーのプリント

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動・児童の反応	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 5	<p>○みんなはお休みの日なにをしているかな? ・ゲーム ・おでかけ</p>	・「ブラ ヴィナカ」で始める	
展開 10	<p>○フィジーの人たちはお休みの日、なにをしているかな?</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>フィジーってどんな国? ①お休みの日</p> </div>		

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
展開 10	<p>○教会でうたをうたっている動画をみてみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌が上手だ ・教会が大きいな <p>○マーケットの動画をみてみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すいかや玉ねぎなど日本でも売っているものがあるよ ・袋に入っているのは何だろう 	<ul style="list-style-type: none"> ・気づいたことや、思ったことを発表させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・気づいたことや、思ったことを発表させる。 	<p>動画1、2 (教会、高野さん)</p> <p>写真(マーケット)</p>
10	<p>○実際にお金にさわってみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の絵がかいてあるよ ・色が違うよ <p>○先生がお買い物するところを見てみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お金をはらっているよ ・ジュースがでてきたよ 	<ul style="list-style-type: none"> ・お金の写真をみせたり、コインを見せたりする。 ・気づいたことや、思ったことを発表させる。 	<p>コイン</p> <p>動画3買いもの</p>
まとめ 10	<p>○フィジーのことがわかったかな?おもしろいな、いいな、知りたいなをまとめよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を振り返らせ、次時の意欲付けをする。 	<p>ワークシート (資料12)</p>

≫ 授業実践の様子



資料 9
動画や写真を見て、「いいな」「びっくり」「同じ」を見つける子どもたち



資料 10 スルを身に着けたり、お金を触ったり



資料 11 次回の見通しをもって振り返りを行う

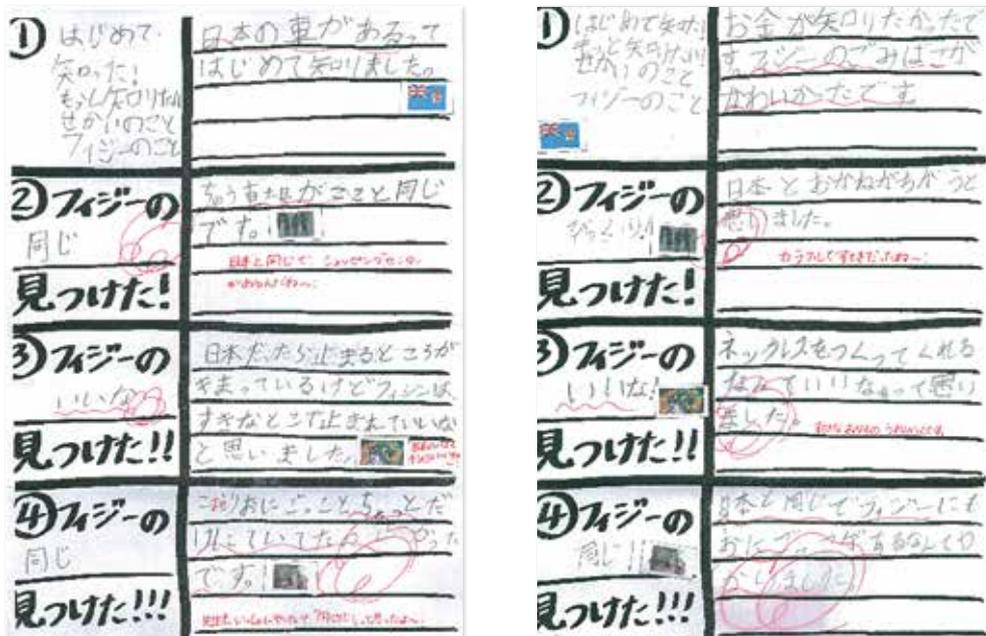
06 | 本時の振り返り

児童は最後まで興味を持って取り組むことができたと思う。単元を通して買った視点を3つ設け、ただ「おもしろかった」で終わらないような授業を目指した。「いいな」や「びっくり」、「同じだ」の視点を持たせて、写真や動画、実物を使って実践を行った。わくわく感をもって見たり、比べて考えたりすることができたと思う。また、スルやお金など実物に触れさせることでさらに興味を沸かせ、次時への意欲付けとなった。

内容を「休日編」としたが、児童の興味がいろんなところに多くあり、質問に答えることで、まとまりがないものになってしまった。「なぜバスの窓がないのかな」などの立ち止まって考える場を作り、中身を深めていければよかったと思う。

また、道徳としての授業には難しく、学活として扱っていきたいと思う。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化



(資料 12 ①②単元を通して書いた児童の振り返り)

〈児童の感想から〉

1 時間目

- ・日本と同じ車が走っているのにびっくりした。
- ・お金がどんなのがあるのか知りたいです。
- ・道にある、ゴミ箱がかわいい。
- ・ホテルがどうなっているのかを知りたいです。
- ・どうやってホテルにとまるのですか。
- ・スーパーが日本と違うのでびっくりしました。

2 時間目

- ・お金がわしの絵でびっくりした。
- ・フィジーのお金はいろいろな色ですてきだなと思いました。
- ・フィジーの同じ見つけました。お金のにおいが同じです。
- ・スーパーマーケットの野菜が同じものがいっぱいあってすごいと思いました。
- ・やさいを食べてみたいです。

- ・フィジーにもペットボトルがあるなんて面白いと思いました。

3 時間目

- ・ココナツのからでできたおわんをつかっているなんてびっくりしました。
- ・ほうちょうではっぱを切るなんてはじめて知りました。
- ・ジャングルみたいなのがなんでか知りたい。
- ・つくえのないところで食べるなんておどろきました。

4 時間目

- ・遊ぶ道具（遊具）がないのに、こおりみたいなのであそんでいるのがすごいと思った。
- ・(小学校では) ティーシャツの色がきまっていたびっくりしました。かつてに色がきめられていたらぼくはこまっていたとおもいます。
- ・日本のごおりおにとにしていた。また休み時間にやりたい。
- ・こおりおにが日本と同じでした。

5 時間目

- ・学校に行けない子どもがいるのをはじめて知った。
- ・友だちとあそべないのはかわいそうだと思った。
- ・字が読めなかったけどクイズが楽しかった。
- ・当たり前だと思っていたけど違った。

6 時間目

- ・フィジーにも日本人がいて働いているんだなと思いました。
- ・日本人がフィジーを助けているのがすごい。
- ・フィジーでもマナーがあるってわかりました。
- ・フィジーに日本人がいるなんて知りませんでした。
- ・フィジーにもこまっていることがあるんだなと分かりました。フィジーに日本人がいてびっくりしました。
- ・フィジーには日本のきょう力があるってはじめて知りました。
- ・しょうらいこまっている国があったら助けたいです。

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

台湾へ、出張で行かれた方が、世界地図で台湾を示し、飛行時間や言語などについての授業をしたところ、児童は「フィジーより近い。」「でも、3時間かかるよ。」「英語とかフィジー語とかじゃなくて漢字だ!」という視点を持っていた。

世界の国について興味をもち、世界について書かれた本を読んだり、日本語でない言語に興味を示したりするようになった。

授業のはじめは、「先生、今日はモンゴルのあいさつにしよう。」と世界中のあいさつに興味をもって、視野が世界へと広まったように感じる。帰るときは、「モゼ(さようなら)!」とフィジー語を使ってくれている。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

- ・フィジーについてなにも知らなかった
- ・どんな国なのかな
- ・お金はどうなっているのかな

(授業後)

- ・フィジーの学校の先生になってみたいと思いました。
- ・フィジーにはいろんな人がいるのだなと思いました。
- ・いろいろなお店、おうち、学校を見ただけで、わたしもフィジーに行きたいと思いました。
- ・フィジーのいろんなことを学んだからフィジーに行ってみたいと思いました。
- ・フィジーのはてまで行ってQは6回しかなかったけど、フィジーのことをいっぱい知れてうれしかったです。
- ・もっとフィジーのことを知りたい。

08 | 自己評価

1 苦労した点

見てきたこと、学んだことや考えたことなどを、学習内容として整理するのが難しかった。なかなか指導内容に合わせた授業にならず、2年生を対象としては、難しいものとなってしまった。また、道徳としての授業も行ったが、登場人物に共感するという場面が難しかった。

2 改善点

あまり欲張らずに、学年のレベルに合わせて授業をしていく。低学年の場合は、自分たちの生活に近いもの(家、スーパー、食べ物、乗り物、学校など)を提示することで、興味をもって学習に臨むことができる。お金を触ったり、衣装を着たりなど具体物を見せることが効果的。

中、高学年の場合は、社会や英語と関連して授業を行うことができそうだ。授業のねらいをしっかりと定めて、準備していくべき。

3 成果が出た点

道徳としてどのように授業をするか、どのようにして興味を持ってもらうかなど、教材とじっくり向き合い、吟味する時間ももてた。研修中に学んだことが、自分の中で整理することができた。

子どもたちに、「本物に触れさせる」体験が多くでき、視野を広げてあげることができた。

4 備考 (授業者による自由記述)

パワーポイント1を使って、職員会議、隣のクラス(同2年生 19人)での報告も行いました。

【添付資料】

パワーポイント2(JICAパワーポイントを基に作成した自作パワーポイント資料)

【参考資料】

- ・世界のあいさつ 作:長 新太(福音館書店)
- ・はじめてのせかいちずえほん(パイ インターナショナル)全国学校図書館協議会選定図書
- ・こどもがはじめてであう せかいちず絵本 作・絵:とだこうしろう(戸田デザイン研究室)
- ・地図で知る世界の国ぐに(平凡社)
- ・ジュニア 世界の国旗図鑑(平凡社)
- ・学校に行けない世界の子どもたち(JICA資料)
- ・どうなってるの?世界と日本(JICA資料)



学校にいけない子どもたちがいます。
せかいで6.700万人

- 日本はほぼ 0人
- アフリカ やく5人に1人

こまることは、ありますか？

国際協力機構

もし、世界が100人の村だったら

読み書きができない人たち 20人
(うち13人は女性)

今、せかいの大人のおよそ6人に1人は読み書きができません。

出典: 特定非営利活動法人 国際教育協会/DEAR

文字が読めないということ

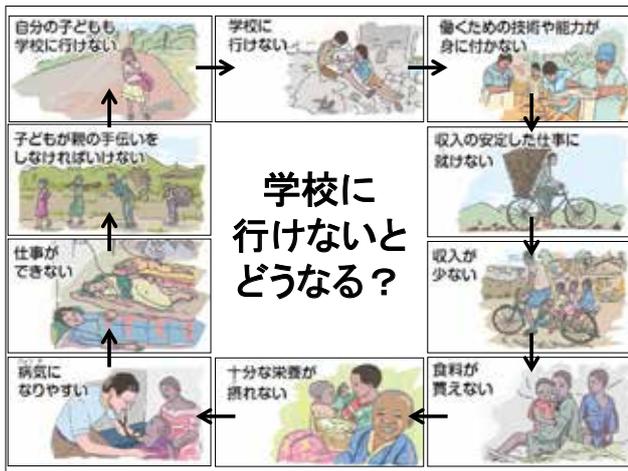
おなかがいたくなってきました。くすりはどれでしょう？

① 毒(どく)	② 水	③ 薬(くすり)
विष	पानी	औषधि

出典: 特定非営利活動法人 国際教育協会/DEAR

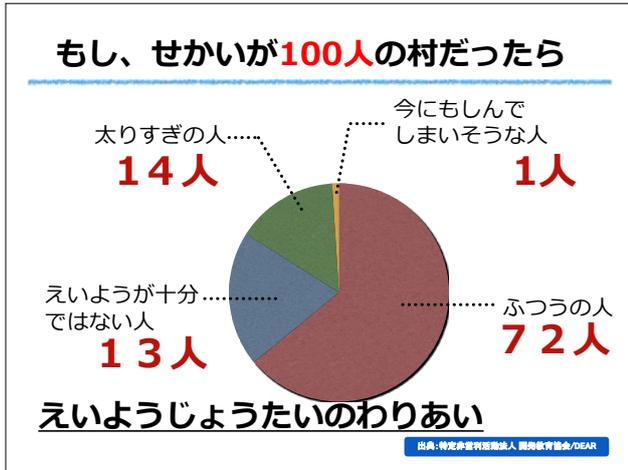
学校にいけない子どもたちはなにをしているのかな？





1日に120円（いか）
で生活している人たち
4人に1人

120円で
どんなものが買えるかな
？



5さいまで生きられない人

日本 1000人中 3人
 アフリカ 79人
 フィジー 24人

パワーポイント2 (JICA パワーポイントを基に作成した自作パワーポイント資料)

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

今年で教員歴3年目となったが、子どもたちに教えてあげられる内容がまだまだ少ない、子どもたちの世界を広げてあげたい、と思っていた。その思いから、まず自分の引き出しを沢山持っていたいという気持ちがあった。フィジーとは、どんな国なのか。研修に参加するまではどこにあるのかさえ知らなかった。子どもたちに伝わるよう、子どもたちにとって一番身近で分かりやすい『衣・食・住』に特に焦点を当てて見たいと思っていた。なので研修中は日本との相違点はどのように違うのか、何がそのような状況・環境にさせているのかをずっと考えていた。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

フィジーの人たちは、日本人と同様にスマートフォンを器用に使う。町にはショッピング施設があり、大型テレビが売っている。日本とはそんなに大差がないと思ったこともいくつかあった。しかし、行き届いていない教育がやはり気になった。

第2言語の英語で授業が進められているということも、教育の行き届かなさの背景にある。第2言語を用いた授業では、内容を理解できる児童が多くはない。

ランバサのホテルに行った時のことである。ホテル代85ドルを105ドル出した。おつりは……。ホテルマンは電卓を何度もたたいていた。JICAの方が「20ドル カム バック」と言って、やとおつりがきた。

坂口隊員のいる、医療機器メディアセンターでは、社員と共に「5S」を実践しているという話を聞いた。整理、整頓、清掃、清潔、しつけ。生活態度における基礎基本が、ここでは2年間ずっと継続して指導されているという。

そして、気になったのが、誰もが「フィジー人は、幸せです。足りないものはありません。みんなうまくやっていて、非常にエクセレントだ。」と口をそろえて言っていたことである。この言葉の意味をメンバーと毎日話して、本当にこの現状に支援は必要なのだろうか、支援とは一体何だろうかと深く考えさせられた。

また、「ここが問題だ。このように解決していきたい。」と物事を突き詰める人が本当にいないのかということも気になった。もし、その問題が解決したら、もっと効率よくなる。もっと楽になる。と考える人がいるのはやはり、「問題解決能力」とうたう日本だからなのか。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

援助って？支援って？を改めて考えて、じっくり向き合うよい機会になった。お金がない、それならお金をあげます、では根本的に解決しない問題がある。いろいろな要因が複雑に絡み合いながら成り立っている中で、じゃあどういった支援・援助が有効なのか。相手に寄り添い、根気強く考え続けていくというのは、教育現場も同じだと思った。原因を突き詰めていろいろな可能性を視野に入れて支援を考えるということ。本当に相手のためになっているのかの思慮・配慮。自分はどうかだろう、と見つめ直すことが多々あった。新しい知識が欲しいと思っていたが、日を追うごとに今できることをしっかりやろうという考えが強くなっていった。

もう一つは、当たり前の幸せについてである。お湯が出るありがたさをこの研修ではかみしめた。水は何もなかったら水であり、水でシャワーが当たり前の村だってある。今回の研修を終えて、何気ない日常がありがたく、そして幸せだと感じた。

特に子どもたちに伝えたいことは、みんな違って、みんないい。ということである。世界には約200の国があり、日本はそのうちの一つである。当たり前が当たり前ではないことだってある。幸せは人、国それぞれで違うけど、それがいい。それでいい、と言って、世界に目を向けられる子どもを育てたい。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について（構想）

みんなちがってみんないいを伝え続けていきたい。また、給食がある、水がきれいなど、当たり前の幸せについても考えさせたい。

また、情操教育にも力を入れ、根気強く、マナーやルールなどを身につけさせ、世界に通用する人材を育てたいと思う。その際には、世界で活躍する仕事があることにもふれ、子どもたちの視野を広げたい。

5 研修に関する全般的な所感

人々のあたたかさに触れる機会が沢山あった研修だった。この研修に参加したメンバーは、校種それぞれで専門分野も違い、とても刺激を受けた。毎日充実した学びがあり、正直多すぎて吸収しきれないものもあったと思う。開発援助というものは未知の世界だった。様々な体験を通して、開発援助に関わる人やもの、考えなどを学ぶことができた。本当に勉強になった。日本に帰ってきて、少しずつ消化して、自分なりに吸収し、アウトプットし続けていきたいと思う。

6 JICA に対する要望・提言

2週間、本当にありがとうございました。このプログラムを終えて、感謝の気持ちでいっぱいです。いろんなスケジュールを無理をして組んでくださったことを知り、とてもありがたく思いました。おかげで沢山の学ぶ機会をもつことができました。また、細かなアナウンスのおかげでスムーズに動くことができました。体調面などでも気を遣っていただき、本当にありがとうございました。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

- ・ダニが多いので、蚊よりもダニ対策を。ダニシートや虫よけリングがあると便利。
- ・日本は7月だが現地は冬なので、寒い。フィジーオフィス内も寒いことがあるので、温かい上着があるとよい。
- ・立ったまま話を聞くことも多いので、小さいメモ帳があるとすぐにメモができる。
- ・水着はいらない。
- ・荷物が増えることがあるのでマイバックを持っていくと便利。(プラスチック袋の有料化対策)
- ・レストランでもおしぼりがないことが多いので、ウェットティッシュがあると便利。
- ・行きの荷物(手荷物?スーツケース?)がお土産や、物品で重くなるので、家の体重計で測ってくるとスムーズ。

世界の中の日本

幸せの国フィジー ～きみのためにできること～

氏名	武原 義典	学校名	金沢市立中村町小学校		
担当教科	学級担任	実践教科	社会科・総合的な学習の時間		
時間数	全5時間	対象学年	第六学年	人数	23人

実施概要

01 | 単元のテーマ・目標

- ・国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくために異なる文化や習慣を理解し合うことの大切さを理解するとともに、異なる文化や習慣を尊重しようとする。
- ・フィジーの現状を知ることで、学習問題を見だし、調査したり、地図や地球儀、各種資料を活用したりして調べたことをノートなどにまとめるとともに、文化や習慣を比較することを通じて、今フィジーに必要なことを考えることができる。

02 | 単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度	<p>①我が国と経済や文化などの面をつなぐりの深い国の人々の生活の様子に関心を持ち、外国人や外国での生活経験がある人に進んで話を聞いたり、関連する資料を収集したりして意欲的に調べている。</p> <p>②文化や習慣を比較することを通じて、異なる文化や習慣を尊重しようとしている。</p>
(イ) 思考・判断・表現	<p>①我が国と経済や文化などの面をつなぐりの深い国の人々の生活の様子について、学習問題や予想、学習計画を考え、表現している。</p> <p>②我が国とつながりの深い国の文化や習慣を比較することを通じて、それぞれに大切にしている文化や習慣があること、外国の人々とともに生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であることについて考え、適切に表現している。</p>
(ウ) 技能	<p>①我が国と経済や文化などの面をつなぐりの深い国の人々の生活の様子に関心を持ち、外国人や外国での生活経験がある人に進んで話を聞いたり、地図や地球儀、各種資料を活用したりして必要な情報を集め、特色のある文化や習慣、我が国とのつながりなどを読み取っている。</p> <p>②調べたことを白地図や作品、ノートなどにまとめている。</p>
(エ) 知識・理解	<p>①我が国と経済や文化などの面をつなぐりの深い国の人々の生活の様子や、それぞれの国には現地の人々が大切にしている文化や習慣があることが分かっている。</p> <p>②外国の人々とともに生きていくためには、異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であることが分かっている。</p>

<児童観>

本学級の児童は、男子9名、女子14名と女子が多く、男女が比較的仲の良い学年である。学習に対する意欲も高く、前向きに学習に取り組む一方、自分の考えや思いを主張することにはまだまだ自信がもてていない様子が見られる。

これまでに児童は歴史の学習から先人たちの努力によって今の日本があることを学び、これからの社会をよりよくしていかなくてはならないという公民的資質の基礎を身に着けている。しかし自分たちがどのように社会に貢献できるのかというイメージははっきりとしていない。中学・高校と段階を踏みながら徐々に自分自身と向き合い、なおかつ社会の現状や課題を知った時、自分に何ができるか、自分が何になりたいかという明確なイメージを獲得していくであろう。とはいえ小学校6年生の現段階において、日本とつながりの深い国々について学習することは、より広い視野と興味を持つことにつながり、これからの可能性を広めるキャリア教育へと生かされる内容だともいえる。

夏休み前に児童に事前アンケートを行った。「世界には「発展途上国」と呼ばれる国があることを知っていますか。」という問いに知っているとした児童は14%だった。一方「世界の人々が今どのようなことで困っていると思いますか。」という問いに対してはすべての児童が何らかのことに困っているとした。1. 食べ物 2. 着るもの 3. 住むところ 4. 環境 7. 医療の5つに関しては85%以上の児童が問題意識を持っているということが明らかになった。発展途上国という言葉や概念は知らずとも世界の国々の中には問題を抱えている国があることは不明確だが把握しているように思える。しかし、5. 電気や道路などの設備 6. 教育 8. 防災 9. 人間関係 といった項目では「困っている」と回答した児童は半分前後もしくは半分以下になっており、認識にばらつきがみられた。

これらのことから世界の国々の現状や国際社会における我が国の役割を知り、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さを理解することが、世界へと視野を広げることにつながると考える。

<教材観>

本単元の学習では5つの国を取り上げて学習を行う。その内の一つとして中進国であるフィジーを取り上げる。発展途上国と呼ばれる国ではあるが、経済成長を遂げ、今まさに国の発展が過渡期を迎えているフィジーもまた支援を必要としており、オーストラリアをはじめ日本からも多くの経済的・人的支援を受けている。そして今その支援の在り方が問われている。支援とはただ単に何でも持ち込み、与えればいいというものではない。現に多くのプラスチック製品が持ち込まれたフィジーでは、ごみが土に還らないという認識が薄く、多くのごみが道に落ちている様子も見られた。ごみがあふれることが社会問題へとつながったりするという認識には日本との温度差が感じられる。支援したつもりでも、日本人が安易に持ち込んだ物が後々路上のゴミになってしまう可能性がある。また、植民地時代の影響から大量の砂糖やインスタント食品をとるようになったフィジー人にとって、生活習慣病が大きな問題となっている。ここにも日本人との温度差が感じられ、どのようなアプローチでこの問題を解決していくかは、フィジーの人の身になって考える他ない。これらのことからよりよい関わり方を学習するのに適した教材であると言える。

また、フィジーという国やフィジー人は常に前向きで、一緒にいて笑顔の絶えない人々である。一方現地で働く日本人はフィジー人と働くのは苦勞すると言う。その楽観的でマイペースなところが仕事という部分では弊害となっている部分がある。そんなフィジーとの共通点や相違点、長所と短所を知ることでフィジーに何が必要で、何が不必要なのかを考えることができる教材になると考える。

そしてフィジーには2017年9月現在、石川県出身の青年海外協力隊員が2名派遣されている。現地の人と触れ合い、現地で四苦八苦しながら支援の在り方を考えてきた人の話や姿はよりよい関わり方を考える上で有効な教材であるといえる。また、授業で紹介するフィジーの青年海外協力隊員は石川県出身ということで子ども達もより身近に自分たちの将来について考えることができるであろう。

<指導観>

本単元では、導入に世界の現状について、パワーポイントを使って学習する時間を取る。世界の全体像を知ること、それぞれの国が世界においてどのような立ち位置にあるのかを知ることができるからである。

そこで代表的な国を5つ提示し、そのうちのひとつとしてフィジーを取り上げて指導する。5つの国の学習は共通した流れで行う(1. 調べ学習、2. 集団学習で考えを深める、3. 日本とのつながりを考える)。フィジーに関しては教科書に載っていないので、自作資料を使う。教師からのプレゼンや体験活動を通して学習を進め、具体的なイメージを持ちやすいようにしたい。まずはフィジー人の幸せの秘密を探るため、フィジーについて現状を調べる。各々が調べたフィジーの現状やフィジーの人の特徴を板書で分類し整理することで、日本との共通点や相違点に気づくであろう。そこで日本とフィジーとのよりよい関わり方について考えを深める。フィジーからもらえるものや学べることがある一方、日本からできることは何か考えることができるであろう。また実際にフィジーで活躍する青年海外協力隊員の方に授業に登場してもらい、自分たちの考えを伝えたり、隊員さんの話を聞くことで、よりよい関わり方に気づいてほしい。この機会が、自分たちが将来何をすべきかを考える材料になることを願う。

04 | 展開計画 (全5時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<p><フィジーの人々はどんな生活をしているのだろう></p> <p>【関】フィジーの生活や文化に関心を持ち、日本と比較して考える。浮かんできた二国間の違いや問題点から学習計画を考えようとしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジークイズ(衣食住) ・実物体験(試着) ・モノランゲージ、フォトランゲージ(町に落ちているごみの写真やごみ処理場の写真、大量の砂糖の写真) <p>《フィジーの人はなぜ幸せなのだろうか》</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント【資料1】 ・フィジーの正装(スル、ブラシャツ) ・ココナッツクッキー、キャッサバチップス試食
2	<p><フィジーってどんな国なのかな></p> <p>【技】各種資料を活用したりして必要な情報を集め、特色のある文化や習慣、我が国とのつながりなどを読み取っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の興味関心を「衣食住・文化・教育・健康・環境・外国との関係」に分類し、それぞれの観点で調べ学習を行う。 <p>○日本と違うこと、一緒なことはあったかな。新たな疑問は生まれたな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を交えた6つの分野の自作資料【資料2】
3	<p><フィジーと日本を比べてわかることは></p> <p>【知】フィジーの人々の生活の様子や、それぞれの国には大切にしている文化や習慣があることを理解している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調べたことを分野ごとにまとめ、共有する。 ・新たに生まれた疑問を現地で活躍する日本人に直接質問することで解決させる。 <p>○幸せの国フィジーっていいところばかり?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・青年海外協力隊高野隊員とスカイプを使って交流する。
4	<p><フィジーがもっと良い国になるためには></p> <p>【思】フィジーが抱える問題点に目を向け、原因について考え、対策や支援の在り方を考えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フィジーの抱える問題の原因に目を向け、解決していこうとする。 ・今行われている対策や支援について知る。 <p>○どのように関わっていけばよいのだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・青年海外協力隊員や現地で活躍する人に関する資料
5	<p><フィジーと日本がよりよく関わっていくためにはどうすればいいだろうか></p> <p>【思】自分なりのよりよい関わり方を考える。外国の人々とともに生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であると考え、適切に表現している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの付き合い方を考え交流する。 ・共有した考えが本当にフィジーの人のためとなっているのか支援の例を出しながら考えさせる。 ・考え直した案を坂口さんに聞いてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボクのお父さんはボランティアというやつに殺されました(宮崎大輔) ・青年海外協力隊坂口隊員からの講評

05 | 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の学習を振り返る。 <フィジーと日本はどのように関わっていけるだろう> ○自分たちが考えたよりよい関わり方を青年海外協力隊の坂口さんに聞いてもらい、よりよい関わり方を教えてもらおう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時に考えた対策を板書に位置付けることで、よりよい関わり方(できること・もらえるもの)、という視点を持ちやすいようにする。 ・ 実際にフィジーの人と関わった青年海外協力隊の坂口隊員によりよい関わり方を聞いてもらうことで、必要感を持って考えられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 青年海外協力隊 坂口隊員
展開 (20分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 甘い物を食べ過ぎて、生活習慣病になるとどうになってしまうのか学校で教えたらいと思う。(教育) ・ ゴミが分別できるように、地域の人に教えて回ったらいと思う。(環境) ・ 一緒に仕事をしていて、失敗した時に、厳しく教えてあげたらいと思う。(文化) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6つの分野に分けて板書し、それぞれの対策に対して自分ができることを整理して考えられるようにしていく。 ・ 物の関わりや人の関わりで。出にくかったところは、教師側から提案し、その是非を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既習の掲示 (自作資料・板書・写真)
深め (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援の意味をもう一度考え直す。 ・ 持ち込むことが必ずしもフィジーの人のためにはならないことを考えさせる。 ・ 考えの変容を自覚させる。 ・ 現地で働いていた人の立場から、本当に必要な支援について話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○フィジーの人はなんて言うだろう。 ・ 持ち込むことに注目し、同じ考えを同じ色で囲み可視化する。与える支援の多さを知る。 ○考えが変わった人はいるかな。 【思】自分なりのよりよい関わり方を考えることで、外国の人々とともに生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であると考え、適切に表現している。(発言・ノート) ○坂口さんから話を聞こう (子どもたちの考えについて感想) ・ 私が働いていたときは、フィジーの人にとって何が必要か考えながら仕事をしていました。そこで思いついたのが物の整理整頓です。もし私がいなくなっても、整理整頓ができるように、ポスターを作ったり、やってあげるのではなく、自分でできるように伝えたりしました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボクのお父さんはボランティアというやつに殺されました (宮崎大輔) ・ 必要に応じて、グループで考えを交流する時間を設ける。 ・ 坂口隊員の感想、活動中大切にしていたことの話
まとめ (5分)	<p>フィジーとよい関係を続けていくために、自分たちがなんでも持ち込むことやしてあげたりすることは支援ではない。フィジーの人の身になって考えることがより良い関係を築いていく。</p>		

≫ 授業実践の様子

本時の導入部分では、前時に考えた問題点や改善策について振り返った。その後、ゲストティーチャーとして、元青年海外協力隊員で、フィジーで医療技術関係のボランティアをされていた坂口涼子さんを紹介した。実際にフィジーの人々と生活し、関わりがあった坂口さんに、自分たちの考えを聞いてもらうことで、よりよい関わりを目指すことができたと思う。(写真①)第一発言者の女子児童は、坂口さんに「フィジーには野菜ジュースはありますか。」と質問した上で「ないのであれば野菜ジュースのように甘いものが好きなフィジーの人でもおいしく野菜を食べることができる商品を持ち込めばいいと思う。そうすれば生活習慣病の対策にもなる。」と発言していた。現地を知る人との関わりから、現状を踏まえた上で、フィジーの人のことを考えた関わりを考えることができていた。



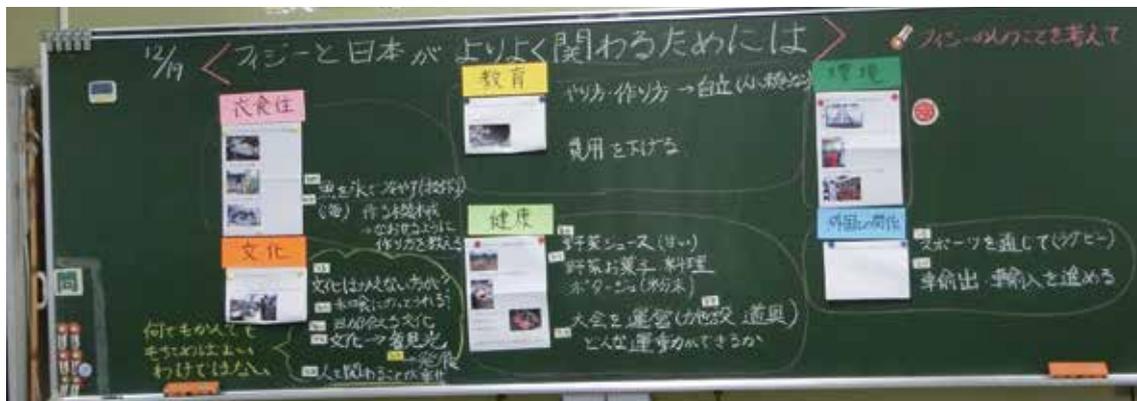
写真①ゲストティーチャー坂口さん

前時のノートでは具体性に欠けた思考の児童が多かったことから、全体で交流する前に、日本人にできる関わりをより具体的に考えさせる必要があると感じていた。そこで、導入場面においてグループメンバーにまずは自分の関わり方を伝え、その上でよりよくするための話し合いの時間を設けた。(写真②)友達から意見やアドバイスをもらうことで、児童の思考はより具体的になり、様々な視点から支援の在り方や協力の仕方考えられるようになった。前時のうちにグループで考える時間を設けることで、本時の全体での交流の時間がより確保できたと思われるのでこの点は今後改善したいと思った。



写真②導入でのグループ活動

展開の場面では、個人の考えを全体で交流した。児童の意見を今までの学習と同じように、6つの分野に分けて板書することで、何に対する関わりなのか思考を整理しやすいようにした。(写真③)思考が整理されることで、自分の考えた分野での関わり方以外にもよい関わり方はないのかと多角的に考えることができた。スポーツを通じた関わりや、輸出入の関わりなど、フィジーや日本にとってどのように良い関わりなのか分かりづらい時には、補足し、具体例を挙げながら確認した。フィジーの今後を考えて、物を支援するのではなく、技術や方法を支援すべきだという意見が多かった。板書の中で、ただ分類するだけでなく、指導案にあったように物の関わりや人の関わり、また技術の関わり、と種類が見えるように、色分けしたり囲んだりする必要があった。



写真③板書での分類

考えを深める場面では、追加資料で考えを深めるのではなく、ある男子児童の意見を全体に広めることで考えを深める活動を行った。「僕は、文化はあまり変えない方がいいと思う。日本の文化を持ち込んでしまっ

たら、フィジーの良い文化が失われてしまって、植民地のようにになってしまうのではないだろうか。」この考えはフィジーの良さを十分に感じていないと出ない考えである。それと同時に、今までは変えることや与えることばかり考えていた児童の思考が揺さぶられた瞬間でもあった。その後グループで考える時間を持つと、それぞれが自分なりの考えを持ち、考え直す姿が見られた。その後の発表でもどの児童も文化は変えない方がフィジーの人にとって幸せなのではないだろうかと思っていた。追加資料がなくとも、自分たちで関わり方を見直せたことは大きな成果だったと思う。

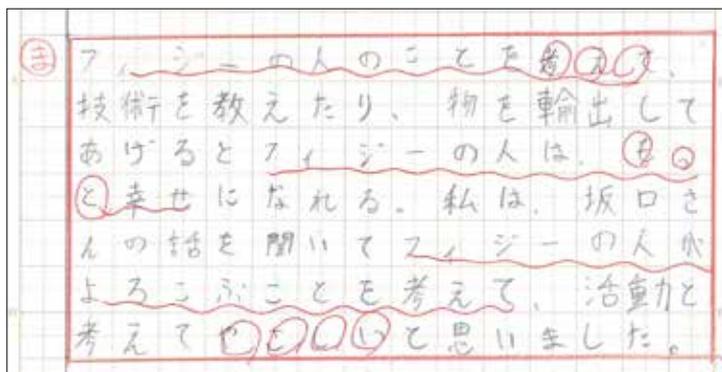
終末場面では、坂口さんに授業を参観していただいた感想と自分が行ってきた関わり方を伝えてもらった。自分たちの考えが称賛され、肯定されることで、大きな自信へとつながった。また、坂口さんの関わり方から、「フィジーの人が何を必要としているのか考えて」というキーワードを見つけ、まとめることができた。まとめる際には、「フィジーにおいてはなんでも持ち込めばよいというわけではないかもしれないが、他の国では、すぐ食べ物を持ち込む必要がある国だってある。だからその国についてよく知る必要がある。そしてその国の人の気持ちを考えて関わる必要がある。」と話し、授業を終えた。

06 | 本時の振り返り

今回の授業では、フィジーに行って自分が一番考えさせられたフィジーとの関わり方(支援の在り方・日本人が学べる事)を、少ない情報量の中、本物を見ることができない児童にどのように分かりやすく考えさせることができるか挑戦した。自作資料を自分の興味のある所から読ませたことで、意欲的に調べる力がついた。また、関わり方も一つではないのだと感じることができたと思う。自作資料は考えるための根拠となるため、良さや問題点の両方に気づくことができる資料を目指したが、今回の児童の反応を見て、改善し続けていかなければならない。

フィジーとの関わり方を考えていく上で、日本から、上から目線で支援してあげるという見方に陥らないかが心配であった。そのために単元の前半でフィジーの幸せな面をたっぷり扱い、その上で「よりよくしていくため」という視点で学習を進めた。本時の課題が「どのように関わればよいか」としたのもそのためであったが、児童には抽象度が高く、課題を明確につかめない児童や、支援という目線中心になってしまった児童もいたように思う。それは単元の構成であったり、教師の声かけを工夫していくことで今後改善に努めたい。

本時の学習に入るまでは、児童の考えは、してあげるという視点や物を持ち込むといった物的支援に偏ると予想した。しかし、児童は想定以上に深く考えており、ただ物を持ち込むではその後続かないということに目を向け、方法や技術を持ち込むという考えが多かった。このことから、先を見据えた関わり方を考えられていると感じた。また、追加資料を用いなくとも、文化という視点から、自分たちでよりよい関わり方に目を向け考えることができたことにも感動した。日本にいる小学校6年生が真剣にフィジーで暮らす人々について考え、よりよい関わり方を考えることができたと感じた。



物の輸出を中心に考えていた児童。技術を教えることの大切さに気付くことができています。また、坂口さんの話から現地の人と関わる大切さを感じている。

① フィジーのことを考え、いろいろな技術を教ればいい。でも、なんでもかんでももちこめばよいわけではない。なぜなら国によって感じる幸がちがうから。

中国籍の日本に来て3年目の児童。日本とフィジーを比べて考えることで、同じことでも幸せに感じられたり、幸せに感じられなかったりすることに気づくことができる。フィジーから幸せの秘密が学ぶことができたのであろう。

② フィジーと日本がよりよく関わるには、フィジーの人々のことを知る、何でもや、てあげるばかりでなく、フィジーの人々が感じるのことを大切だと思っ

③ すべて日本が正しいというわけではなく、フィジーはフィジーなりに、大切して幸せになられるようにしているから、何でもや、てあげればいいというわけではなく、このことが分かりました。

児童の多くがそうであったように、発展途上国なのだから、何かに困っていて、何かをしてあげなければならないと単元の初めは思っていた。しかし、学習を進めていくうちに、日本にないフィジーの良さをたくさん学ぶことができた。それ故「日本が正しいというわけではなく」という振り返りに至ったのであろう。フィジーの人たちが今後よりよい国になっていくためには、自立していくことが必要であると本時の中でも語っていた。

④ フィジーと日本がよりよく関わるために、フィジーの人々のことを知ることが大切。そして日本とフィジーの感じ方などがちがう生活を変えたいと望んでいるわけだから、一番は相手の気持ちを分かることが大事だと思う。

人と人との関わりでもそうであるように、国と国との関わりでも、感じ方が違うことに気づくことができる。大切なのは何を望んでいるのかしっかりと把握することなのだと思った児童は、自己満足な関わりは決してしないだろう。

① フィジーの人のことを考え、フィジー人が、なっとくするようなことを教えてあげることが大切。けれど、何でもあげたりするのはよくなく、国によって、それ

それらがうから、しっしっその国にあって考えを覚えていきたいと思いました。

フィジーの学習を通して、その他の国とも「国にあった考えを考えていきたい」とグローバルな視点を持つことができている。今回の学習は3学期以降も続き、人生の様々な場面においても続いていく。児童にとっていつまでも追究していきたいくなる課題になればと思う。

07 | 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

≫ 単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

まだ学習を終えたばかりで、これからの様々な学習の場面でどのような成果が見られるか、今後になってみないとわからないが、人生のどこかで今回の学習のことを思い出す日がきたらよいと思う。児童は今回の学習を非常に楽しんでくれた。それは遠く離れ、普段は出会うことができないフィジーの人々を身近に感じ、関わることでできたからだと思う。卒業文集のクラスページに「もし一日だけ世界のだれかと入れ替わることができるとしたら」という質問に、ある女子児童が「フィジー人」と答えていた。今回の出会いが忘れられない経験となったことを願う。

≫ 途上国・異文化への意識の変容について

(授業前)

発展途上国は困っていることがあり、助けたり、支援してあげたりすることが必要。日本よりも幸せではない。そんな国が世界の多くを占めるとは思っていなかった。

異文化については、世界には様々な国があり、文化が違うことは何となくは分かっているが、具体的にどのように違うのかは分かっていない。特にその国の人の人柄といったところは、会ったことも見たこともないのであまり知らない。

3年生の時から英語の学習を進め、6年生の秋には遠足の際に、子ども達だけで、外国人の方に金沢についてインタビューする活動を行い、コミュニケーションが取れたことを非常に喜んでいて、もっと世界の人々と関わりたいと思っていた。

(授業後)

発展途上国には、色々な発展段階があり、それぞれが抱える問題が違う。だから、その現状に合った関わり方を考える必要がある。現地の人は満足して幸せに暮らしているということもあると知れた。また、日本自身もその国から学ぶことができる豊かな部分も沢山あると知れた。大切なのは上から目線で押し付けるのではなく、その国の人のことを考えて、関わっていくこと。

異文化については、その国独自の文化が営まれており、それは国民性にも通じ、その国を上げる大切なものであると知ることができた。簡単に変えていいものではなく、そのことはその国の幸せを奪うことにつながることに気づくことができた。

これからフィジーで学んだことを生かして、様々な国について学習していくことがどう今後生きていくか楽しみである。

1 苦労した点

単元の構成を考える時に、どのような意識で単元を貫いていくか迷った。最初に問題点に気づくことができる写真資料を提示し、〈なぜ幸せなのだろうか〉と入ることも考えたが、マイナスイメージから入るとイメージが悪くなると思い今回の流れに変更した。

カリキュラムにない学習なので、どの学習と関連付けるかに苦労した。社会科の最後の単元の一部で実施することにしたが、授業の実践時期が12月までとなっていたので、それまでに社会科の学習の進度を早め、ある程度学習を終えておく必要があったことが大変であった。(12月の頭までに歴史を終わらせた)社会科の学習であるので、調べ活動をさせたかったが、教科書がないため、自作資料を作る必要があった。良い面と問題点をバランスよく入れることが難しかった。8割がよい面で、問題点は「こういう側面もある」という風に紹介した。できるだけ具体的な人物が出てくるようにし、児童に身近に感じてもらえるようにした。6つのページに分けて作ったが作成に多くの時間を費やした。児童に渡す際は、「これは先生が見てきたフィジーの一部です」と断り、なるべく客観的な事実を中心に記載したつもりではあったが、改善していく必要があると感じた。

「幸せの秘密」をテーマとしたが、幸せの捉え方が難しく、深入りすると哲学のような話になってしまうため、程よく扱うことに苦労した。今回は幸福度ランキングをきっかけとしたが別のアプローチも児童の実態に合わせて考えられるかもしれない。

ゲストティーチャーとして二人の隊員さんに授業に登場してもらったが、打ち合わせに苦労した。一人はスカイプで、もう一人は実際に来てもらったが、謝礼の予算がなく、大したお礼もできず申し訳なかった。しかし、お二人とも快く引き受けてくれた。

本時の学習では、児童が具体的な関わりを考えるのに苦労した。一方的な支援だけではなく、フィジーからももらえるものがあるという視点をこちらから与えるのか、自らが気が付けるように仕向けるのかは吟味していく必要がある。本時においてもやはりフィジーからももらえる文化ややり方などがあるから日本も積極的に関わっていく必要があるという視点は持ちづらかったように思う。

2 改善点

単元の構成は、良さを学び、さらによくしていくという流れにすることで異なる文化や習慣を尊重しようとする態度を養うことができると思う。

実施する学年に応じて扱いは考えていく必要があるが、フィジーだけで完結してしまうような取り入れ方ではなく、何かの学習の一部として取り入れると、系統性がでて、ねらいもはっきりしてくるようになる。次回は実施時期の縛りはないので、子どもの実態に合った時期に実施したいと思う。

自作資料はどのページにも客観的な事実を記載するようにし、教師側の捉えを強要しないように気を付ける必要がある。児童がどう感じるのか自由に考えられる余裕を残したい。しかし、教師側の意図をもって資料を作成することも重要である。気づいてほしい良い面と問題点をどのページにもバランスよく入れていけるよう改善していきたい。また、フィジーのことを調べていくが、それに対応する日本の実情を把握できていないという実態もあったため、日本ではこうだと資料に提示したり、こちらから紹介したりする必要があると感じた。

ゲストティーチャーは児童とフィジー人とを近づけ、自分の未来の姿と重ねるためにもぜひ取り入れていきたい。そのために現地のJICA職員さんとのつながりは持ち続けていきたい。また、実際に来てもらい話を聞いたり、意見をもらったりする活動も取り入れていきたいので、年度の初めから予算を組んでもらうことを管理職にお願いしたい。

本時においては、既習の6つの分野の実情から考えを持ち、それを板書に位置付けていたが、フィジーと日本の双方向の関わり方に気づかせるためには、板書の右と左にフィジーと日本を位置づけ、どちらからどちらへの関わりなのかをはっきり示すことも、考えを整理する上で有効なのかもしれない。また、必要に応じて視点を与える追加資料も用意しておく必要がある。

3 成果が出た点

まず自分自身にとって、世界の国々との関わり方を考える機会となった。今まで漠然と世界に羽ばたく人材を育てたいという意識はあったが、具体的な姿は曖昧であった。今回の研修・授業を通して、フィジーという一つの国が多くのことを学び考えるきっかけとなった。記憶が新しいうちに作った自作資料や実践例などは今後も活用できるものになったと思う。

児童にとっては、普通に学習しては出会わない国と出会い、出会わない人と出会え、大きな経験になったと思う。学習を通し、今まで漠然と捉えていた発展途上国の幅の広さやその国ごとに抱える課題を学ぶことができた。児童がこれから世界と関わりを持っていく際も、決まりきった型通りの関わりではなく、自ら課題を設定し、解決していくような関わり方につながる第一歩になったと捉えている。

4 備考（授業者による自由記述）

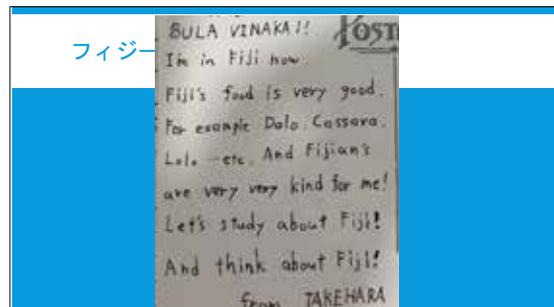
教師海外研修は、開発教育に興味があってもなかなか機会の持ちづらい教員にとって、転機となる貴重な研修であると思う。一人の教師が行った授業は毎年30人近くの児童にいきわたることとなり、それが毎年続けば30年間で1000人近くの開発支援に関心があり、学んだ経験がある人材を育てることにつながる。また、校内研修会や校外での勉強会を通して、実践を発表していくことで、さらに多くの教員へと実践が広がっていくと思う。その効果は十分に予算と時間と労力をかけるに値すると考える。もちろん、教師海外研修に行った教員がこれからも実践を続け、高めていくことが前提ではあるが、自分はそうしていきたいし、この流れを絶やさないでいきたい。研修や実践が続くように、日々の業務の中でもできること、日々の業務があってもしたくなるしなげをJICAの皆さんにはこれからも続けていってほしいと思う。

【添付資料】

自作パワーポイント（一部抜粋）【資料1】



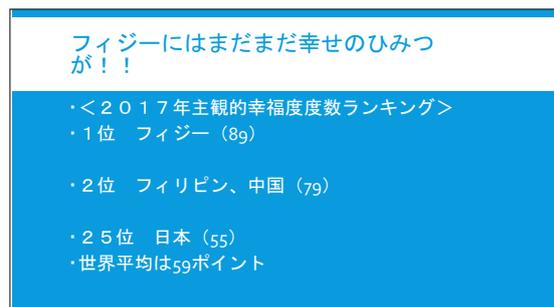
スライド 9



スライド 11



スライド 10



スライド 12

幸せの国フィジー



名前

目次

1. 衣食住
2. 文化
3. 教育
4. 健康
5. 環境
6. 外国との関係

おまけ

幸せの国フィジー資料①

衣食住

1. 衣服

洗濯機 (Tシャツ、短パン、ブラシャツ) 村では洗濯機の家もあれば、桶にためた水で洗っている家も。
足袋 (ブラシャツ、スル=巻きスカート) 一日曜教会に行くとき・仕事や学校に行くとき



2. 食事

食生活 外食に出る人も多く、中華料理やインド料理、ジャンクフードなど様々、日本食もある (普段は村と似た物) 1日食(モーニング・アフヌーンティー)
炊米化した民族料理。伝統的な食事が減ってきて、簡単で安くすむインスタント食品が食事に入ってきている。ほぼ自給自足で食事が成り立つ。



3. 住居

住居 ビルや平屋が多い、電気や水道も通っている
住居 高床の家、家によっては電気の無い家や雨水を貯めたものを使っている家もある



参考資料：地球の歩き方

幸せの国フィジー資料②

文化

1. 儀式

・歓迎の儀式**セブセブ**(カバという木の根っこを水に溶かした飲み物をみんなで飲む、踊る歓迎の儀式。フィジーだけでなく南太平洋一帯で広く行われている)
・他にも**ヌウ**(伝統音楽と踊りで構成される特別な儀式。今はショーとして演じられる)と**灰渡り**(熱く焼けた石の上を素足で歩く儀式。サウワ族のみ行われる)がある。
・分け合う文化**クレンク**=食べ物や洋服など、みんなで共有する文化。「隣のおうちから借りてきて」「みんなでご飯を分け合い食べましょう」「その洋服すてきだから着させて」ができる文化。(村では親戚が多い)



2. 宗教

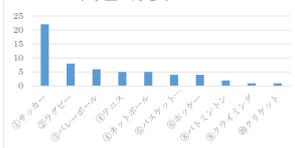
・フィジー系住民(57%)のほとんどが熱心なキリスト教徒。インド系の住民(37%)はインドウー教。宗教の考え方の違いから、政治で争うこともある。
・キリスト教は日曜に教会へ行く ↑町の教会 ↑村の教会



3. スポーツ

・リオオリンピックでセブスラグビー金メダルを取った

小学生が好きなスポーツ



4. 通貨・物価 (すべておよその値)

ジャガイモ 1kg	2ドル=100円	ビザ、カレー	20ドル=1000円
鶏肉 100g	0.9ドル=45円	焼肉 (焼肉焼込み)	50ドル=2500円
トマト 8個	3ドル=150円	映画	7ドル=350円
人参 4本	2ドル=100円	赤デール 1泊	1万円
バナナ 8本	3ドル=150円	タクシー-10分	8ドル=400円
半ラジラップ	2ドル=100円	バス 1時間	5.4ドル=270円
カバ1セット	35ドル=1750円	テレビ	25万円

教育

幸せの国フィジー資料②

- 1. 学校**
 - ①プリスクール (幼稚園、4歳~5歳) - 600か所以上
 - ①プライマリースクール (1年生~8年生、6歳の年に入学) - 731校 - 就学率100%
 - ↓統一テスト
 - ②セカンダリースクール (9年生~13年生) - 51校 - 就学率90%
 - ↓統一テスト
 - ③テリタリー (専門学校や大学、12年生を修了した時から入れる) - 2校
- 2. 授業**
 - ・1クラス25~60人
 - ・プライマリーは算数・英語・保健・社会・化学・音楽・コンピューター・体育・園芸
 - ・セカンダリーは数学・英語・フィジー語・ヒンディー語・製図・木工・金属加工・家庭経済・コンピューター、化学、物理、生物、農業、歴史、地理
 - ・午前4時間、午後2時間、朝のお祈り20分
 - ・1学期(2,3,4月)→2週間休み→2学期(5,6,7月)→2週間休み→3学期(8,9,10月) 1年度末休み(11,12,1月)
- 3. 子ども**

subject (好きな教科)

dream (将来の夢)
- 4. 先生**

	<セカンダリースクール校長ドンガナさん> 「私たちは将来国を支えるリーダーを育てていることを誇りに思っている」		村の子ども サム (15歳) 学校は大好き 好きな遊びは母と勉強すること 開発者になりたい
	<マリスタジャンベーン特別支援学校の先生> 「すべての子どもを愛している。とてもやりがいのある仕事だ」		
	<教育省のヘムさん> 「フィジーに教育の問題は何もない。私たちは自分たちの教育に誇りを持っている。」		

健康

幸せの国フィジー資料④

- 1. 病院**
 - ・3つの公立総合病院と1つの私立総合病院がある。
 - ・公立病院の医療は入院費・薬代を含め無料で受けられます。病院には気軽にたくさんの方が訪れます。(特別な治療には多額のお金がかかる)
 - ・フィジー国内で医師や看護師を育成していますが、海外転出者も多く、医療に関わる人が不足しています。医師がおりず看護師だけの診療所もあります。病状によっては、オーストラリア、ニュージーランド等に出向く必要があります。
- 2. かかりやすい病気**
 - ・フィジー人の死因の80%が生活習慣病によるもの。
 - ・3人に一人、全体の30%が糖尿病。(日本人は男性15.5%、女性9.8%)
 - ・甘いものが大好きで、砂糖をたくさん使ったものを食べている。
 - ・市場に野菜はたくさんあるけれど、あまり野菜を食べようとはしない。
 - ・身近に運動する機会がありません。
- 3. 医療の現場で働く日本人**

	竹内ゆうさん <介護施設で看護師として働く> ・日本との違いは患者との関係がフレンドリーなこと(してあげるではない) ・自分がいなくても現地のスタッフが自分の教えたことをやってくれていたのがうれしかった。		入江由紀さん <管理栄養士として健康を支える> ・減量キャンペーンを行い面接カウンセリングや運動教室を開いている。 ・学校でも年に一度身体測定を行っている。 ・イギリスの植民地の時に紅茶と甘いものを食べる文化が入ってきてしまったのが生活習慣病につながっている。
	坂口涼子さん <医療機器のメンテナンス> ・在庫を管理するためにパソコンで数を把握できるようにした。 ・もの整理整頓が身につくようにボスターを作り、5Sを呼び掛けた。 ・ものを直して喜んでもらえることがうれしい。		

外務省：世界の医療水準より www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/oceania/fiji.html

外国との関係

幸せの国フィジー資料⑥

- 1. 歴史**
 - ・最初に人が住み始めたのは、紀元前13000年頃。
 - ・1643年にオランダの航海士が発見され、外国との交流が始まる。
 - ・1871年から96年間イギリスの植民地となる。(1967年まで) それにより様々な欧米の文化が入る。このころインド人が労働者として大量に移住する。
- 2. 主要産業**
 - ・観光とサトウキビ産業が中心。観光地としてリゾート化された地域や島が数多くある。サトウキビは植民地時代に持ち込まれたもの。サトウキビをたくさん積んだトラックが走っており、工場で砂糖へと加工し使われる。
- 3. 周辺諸国との交流**
 - ・周りにはフィジーのような島国が14個ある。(大洋州諸国)
- 4. フィジーで平和食店(鉄板焼き)「大黒」**

	「大黒」ゼネラルマネージャー 林さん 日本人にしかできないことをやりたくて、フィジーで働く林さんは、日本の良さを伝えつつも、フィジーの良さを伸ばそうとしている。かっぱ巻きはあまり注文されないが、それでもメニューに入れて、知ってもらおうとしたり、箸の持ち方を客席に印刷したり工夫している。フィジーの人はまるで大きな子どものようにだけれど、できないことは求めず、だれでもやれることをききとやりましようとして声をかけている。	
--	--	--

<参考資料>・地球の歩き方 ・HIS ホームページ <https://www.hisfiji.com/>

外国との関係

幸せの国フィジー資料⑥

- 1. 歴史**
 - ・最初に人が住み始めたのは、紀元前13000年頃。
 - ・1643年にオランダの航海士が発見され、外国との交流が始まる。
 - ・1871年から96年間イギリスの植民地となる。(1967年まで) それにより様々な欧米の文化が入る。このころインド人が労働者として大量に移住する。
- 2. 主要産業**
 - ・観光とサトウキビ産業が中心。観光地としてリゾート化された地域や島が数多くある。サトウキビは植民地時代に持ち込まれたもの。サトウキビをたくさん積んだトラックが走っており、工場で砂糖へと加工し使われる。
- 3. 周辺諸国との交流**
 - ・周りにはフィジーのような島国が14個ある。(大洋州諸国)
- 4. フィジーで平和食店(鉄板焼き)「大黒」**

	「大黒」ゼネラルマネージャー 林さん 日本人にしかできないことをやりたくて、フィジーで働く林さんは、日本の良さを伝えつつも、フィジーの良さを伸ばそうとしている。かっぱ巻きはあまり注文されないが、それでもメニューに入れて、知ってもらおうとしたり、箸の持ち方を客席に印刷したり工夫している。フィジーの人はまるで大きな子どものようにだけれど、できないことは求めず、だれでもやれることをききとやりましようとして声をかけている。	
--	--	--

<参考資料>・地球の歩き方 ・HIS ホームページ <https://www.hisfiji.com/>

【参考資料】

- 外務省：世界の医療水準より www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/oceania/fiji.html
- 地球の歩き方、フィジー観光客数 <https://jp.tradingeconomics.com/fiji/tourist-arrivals>
- HISホームページ <https://www.hisfiji.com/>
- 毎日小学生新聞 地球ひろば「共につくる ぼくらの未来 フィジー」2017年7月2日

1 今回の研修参加に際し、特に主眼をおいた点

今回の研修で主眼をおいた点は3つある。1つ目は、日本と同じく島国であるフィジーとの共通点や相違点を見つけ、日本がどう関わっていくべきなのかを考えること。国際協力が必要不可欠な現代において、教師自身国際理解を進めていくことが重要だと考えたからである。2つ目は、フィジーの幸福度、人気の秘密を探ることで、日本が見習うべきことを見つけることである。中進国であり、国民1人当たりのGNIは高くはないにも関わらず、国民の主観的幸福度はとても高く日本とは正反対であり、そこに日本が学ぶべきものがあると考えたからだ。特に子どもたちが将来やこの国の未来についてどのように考えているのかに興味があったからだ。3つ目は、子どもたちを含めた現地の人々や同じく研修に参加した人たちとの交流を通して、自分の思いや考えを交流し、考えを深め合うことである。これからの持続可能な開発のために、共に考え高めあえる仲間づくりがしたいと思ったからだ。

2 視察を通して見つけた途上国の姿、疑問に思ったこと

最初に認識を改めたのはフィジーが大洋州諸国において中核的存在にあり、経済発展がすさまじいという現状である。周辺諸国へ対する南南協力を行い、COP23の議長国としてリーダーシップをとっている。首都であるスバの市内を歩くだけでもその活気は伝わってきて、町のいたるところで車が走り、工事中のビルが立ち並んでいた。それと同時に、治安への不安もうかがえた。一方、町を少し離れると一気に景色が変わり、開けた土地と自然が広がっていた。現住系の人々の土地へのこだわりが多く土地をそのままにしているからである。そのことは土地の開発を遅らせている要因の一つであるとも考えられている。全土の8割がそのような先住系の土地で多くが未使用なまらしい。土地の問題は政府との関係にもつながり、過去にはクーデターなどが起きるほど重大な問題となっている。発展が進まない理由はほかにもあり、移行期における急激な変化・基本の欠如・天災への脆弱性などが挙げられる。

ではフィジーの人々は将来についてどのような展望を抱き、どうなっていきたいのだろうか。ここまで進んだ文化が入ってきてしまったので、伝統的な暮らしだけではやってはいけなさそうである。しかし、これ以上の発展を、すべてのフィジー人が求めているのかは疑問である。開発援助はそのようなすべてのフィジー人の立場や考えを組んだうえで行っていかなければならない。

教育に関して、訪問したセカンダリースクールでは、先生は足りていても教室が足りていない現状だった。教室を見ても日本と比べると黒板や机は傷だらけであるし、教科書はみんなまで共有し、図書館の本も十分とは言えないそうである。特に特別な支援の要する子に対する字の大きな本など個別の教材はまだ不足しているようだ。しかし現地の先生たちは自分たちの教育に自信を持ち、将来のリーダーを育てていることを誇りに思っていた。プライマリースクールでは、子どもたちの笑顔や学ぶ姿勢は日本にない素晴らしさを感じた。特別支援学校では先生が子どもたちに対する深い愛情をもって教育にあたっていた。それ以上に何が必要なのだろうか。物や道具は本当に必要なのだろうか。慎重に考えていかなければならないと思う一方、日本が持っていないたくさんの良さを感じることができた。一方でフィジーの子は日本と違ってなれない英語から色んなことを学ぶことが挑戦だとNGO・FENCの代表のTUIONOさんは言っていた。器具がそろっていて、給食など食事が充実していて賢い日本の子どもたちがうらやましいと話していた。では、フィジー政府はどこまでこの現状を把握し、対策をとっているのだろうか。教育省の方との話から、全国共通のカリキュラムを作り全ての学校で実施したり、無償教育に力を入れていたり自分たちの教育に自信を持っているように見えた。しかし、学校や村で見た子どもたちの様子からは道具や支援の面で改善の余地があるように感じた。

環境の問題に関しては、ごみは従来、土に還るものばかりだったフィジー人にとって、ごみを分別したり集

めたりするという概念はなく、路上に捨ててしまうことが深刻な問題となっているらしい。今はごみ処理場の技術譲渡や4R(リターン)の推進をしているようだ。町や村の中には確かに多くのごみが落ちていた。ごみ箱の中を覗いても分別されている様子はあまり感じなかった。土地の問題やランニングコストの問題でごみ焼却場は作ることができず、基本は埋め立てている。しかし、現地の人は、ごみは道に捨てず集めない、という概念は持っているし、リサイクルなども始めている。それが一部の人の意識となっていないか、その知識が全体へ広がっているのかが疑問である。

医療・健康に関しては、生活習慣病(NCD)が大きな問題になっており、死因の80%が、NCDが原因となっている。その背景には変化した食生活と運動不足にある。せっかくマーケットには日本と同じくらい野菜が豊富に並ぶが、調理する時間がない・調理の仕方がわからない・わざわざ買ってまで食べないなどの理由から簡単に早いファーストフードやインスタント食品などに偏ってしまう。料理を学ぶ場はないのだろうか。流通の進化はみられるのだろうか。運動する機会を作ることはできないかと疑問に感じた。

3 研修を通して、自身の成長に繋がったこと、子供達に特に伝えたいこと

フィジーという国の認識を改めることで、今フィジーの人が何を必要としているのか主観だけでなく客観的に考えられるようになった。先進国として物や道具、文化は与えればよいという安易な考えは、その国が大切にしているものを壊してしまう外来種になりかねないということが分かった。子どもたちにもそのような支援の在り方について、相手の立場を考えることを指導していきたいと思った。

また、フィジーの人々の温かさに触れ、見返りなど考えない無条件な優しさがお互いを助け合い、居場所を作っていることを学び、自分もそんな人でありたいと思えるようになった。そんなフィジーの友達のためにも、今当たり前にある日本の生活に慣れるのではなく、SDGsに掲げられている様な世界の問題・課題の解決に繋がる行動から、自分に出来る日々の一日一善まで実践していきたいと思えるようになった。子ども達にも授業を通して、自分たちの生活を振り返ってほしい。

そして、フィジーという国を通して世界各地の国に思いをはせることができた。それぞれの国がそれぞれの問題や課題を抱え、支援を求めている。何が必要なのか考えられない場合もあるかもしれない。世界から気づかれぬまま苦しんでいる人がいるかもしれない。子どもたちには自分たち日本のことだけを考えるのではなく、世界に思いをはせられるようになってほしい。そして、自分たちが持つ使命に気づき行動していけるよう、世界でがんばる青年海外協力隊の日本人について伝えていきたいと思う。

4 今年度だけでなく、今後の教育指導への活用について (構想)

どの学年においても国際理解教育は必要であると思う。また、どの教科においても実践することができると思う。大切なのは単一的な指導にとどまらず、各教科での実践を通して、継続的に国際理解教育や開発教育を行っていくことである。もちろん学年に応じて発達段階があり、指導内容を吟味していく必要はあるが、その都度世界に目を向けることができる教育を行っていききたい。その際、やはり教師が自分の目で見えたことを伝えられることは子どもたちにとって大きな影響になると思われる。積極的に今回の研修での経験や国際理解の話をしたい。

自分一人で行っていたのではその学年だけでしか実践されず、効果も薄くなってしまいかもしれない。各学年で実施していくためには自校のカリキュラムに活用事例を位置づけることや、誰でも実践できるよう教材化する必要がある。これから授業実践する際に作った資料や使ったデータは共有できるように残していきたいと思う。できるだけ多くの先生に国際理解教育や開発教育に必要感を持ってもらえるように授業実践をしていきたい。

自分自身に関しては、フィジーの先生に負けぬくらい担当している自分の子ども達を愛し、子ども達に誇りをもてるように教育にあたっていききたいと思う。今回の研修での出会いを忘れず、フィジーの人々に恥ずかしくない教育をしたい。そしていつかまた教育について語り合いたいと思う。

5 研修に関する全般的な所感

今回の研修を通して、本当に行ってよかったと思うし、周りの先生たちにもぜひ参加してもらいたいと思った。その理由は大きく3つある。1つ目は、自分自身の見方・考え方に変化があったからである。自分の目でフィジーという国を見ることを通して、世界の国々の抱える問題や課題、良さやそこで暮らす人々について考えるきっかけとなった。2つ目は、フィジーの人々や一緒に行った先生方と交流することができ、意見を交換することができたことである。それぞれの思いに触れ、自分の思いを伝えることで自分になかった考えをたくさん得ることができ、持っていた考えを深めることができた。これは自分一人ではできなかったことである。3つ目は、子どもに伝えたい、考えたいと思えることがたくさんできたことである。子どもの頃に受けた影響は将来を大きく左右すると思う。世界に羽ばたく子どもを育てたいという自分の教育観にとって今回の研修は必要不可欠なものであったと言える。

6 JICA に対する要望・提言

ぜひこれからも教師海外研修を続けてほしいと思う。今回の日程はフィジーという国について様々な分野から学ぶことができた。そのことで一方面からフィジーという国を見るのではなく、多角的に国を知ることができて本当によかった。観光の時間はこれ以上必要ないので、このような研修の在り方を続けてほしいと思う。メンバーもベテランから若手までいることでとても活発な意見交流になったと思う。ぜひベテラン層の人にも参加しやすい研修にしていってほしいと思う。しいて言うならば成果発表の準備の時間が十分に取れず、休息の時間を削って準備したため、体調に無理がかかった人もいたように思うので、どこかで時間が保証されていてもよいのかもしれない。

7 今後の本研修参加者へのアドバイス

すべてのことに積極的にすればするほど得られるものがある。ただ注意しなければならないのは現地の人や一緒に参加しているメンバーに迷惑をかけてはいけないことである。言語が通じなくてもどンドン話しかけてみるといい。職員さんも暖かく助けてくれると思う。写真は自分の写っているものを意図的にとるようにすると、後で子どもに見せやすい。

JICA 開発教育支援事業案内

学校で活用頂ける JICA プログラムのご紹介

国際理解教育に取り組む皆さん!

JICA北陸の国際理解教育 支援プログラムをご活用下さい!

JICA北陸では、国際協力が当たり前で身近に感じられる社会を目指し、

- ① 開発途上国に関する「知見の還元」
- ② 自分に何が出来るかを「考える機会の提供」
- ③ 地域での国際理解教育推進のための「橋渡し役」

を3本柱に、以下の支援プログラムを行っています。

》》国際協力出前講座

開発途上国の状況や、国際協力の現場の様子などをJICA職員や青年海外協力隊などのボランティア経験者が皆さんのところへ出向いてお話しします。

申込方法などの詳細はJICA北陸のウェブサイトでご確認下さい。
まずは「JICA北陸 出前講座」で検索下さい。



》》教師海外研修

教師海外研修は、教員を対象にした実体験型研修プログラムです。開発途上国がおかれている現状、日本との関係、国際協力の実情などを約10日間の海外研修を通して直に学び、その学びと体験を帰国後、実践授業を通して児童・生徒に伝え還元します。

北陸3県からの参加状況

	研修国	参加者の校種
2013年度	エチオピア	小学校3名、高校4名、特別支援校1名
2014年度	サモア	小学校3名、中学校2名、高校2名
2015年度	サモア	小学校4名、中学校1名
2016年度	サモア	小学校3名、中学校1名、特別支援校1名
2017年度	フィジー	小学校6人、盲学校1人、高等学校3人、高等専門学校1人

》》JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

毎年開発途上国や国際協力をテーマに中学生・高校生を対象にしたエッセイコンテストを開催しています。本コンテストの歴史は大変古く、これまで中学生の部は22回、高校生の部は56回を数えます。上位入賞者には、JICAが開催する海外研修に参加する機会が副賞として贈られます。コンテストの開催概要や募集作品テーマについては毎年6月頃にウェブサイトで発表されます。

国際理解教育 指導者研修

実際に国際理解教育を学校現場などで実践していけるよう、指導者を育成する研修として年に数回実施しています。研修内容は、途上国や国際協力に関する知識の獲得・実践手法の体験・意見交換・他地域(中部地域)の取組の理解を中心にしていますが、毎年プログラムは異なります。

【2017年度の例】

- ・学校でも行えるワークショップの体験 8/26 ・地球規模の問題・課題についての勉強会 1/21
- ・名古屋で開催される大規模な教員向け研修に参加 2/10・2/11

開催日や詳細内容をお知らせする募集案内については、JICA北陸のウェブサイト(イベント情報)とJICA北陸Facebookで情報を公開します。

国際理解教育に使える教材・ウェブサイト

● 教員向け資料集 「国際理解教育実践資料集 ～世界を知ろう!考えよう!～」

世界と日本のつながりや世界に存在している課題などについて、教員向けの解説と共に、コピーして子ども達に配れる資料を沢山載せています。

● 児童・生徒向け教材 「学校に行きたい!」・ぼくら地球調査隊 小冊子5種

世界の子どもの現状を知り、また国際協力について考えるきっかけとなる教材です。「僕ら地球調査隊」(小冊子5種)は環境、感染症、教育、水、食料の問題など、私たちの身近で起こっている地球規模の課題について、楽しく学ぶことができます。

<以下教材は以下「先生のお役立ちサイト」よりダウンロード出来ます>



国際理解教育実践資料集
～世界を知ろう!考えよう!～



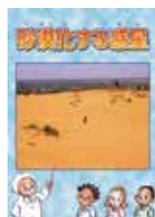
学校に行きたい!



世界の水問題



学校に行けない
世界の子どもたち



砂漠化する惑星



いのち、輝け!



世界の食料

● 先生のお役立ちサイト

JICA地球ひろばのホームページにて、授業や家庭学習で活用頂ける資料を掲載しています。

例えば、国際理解教育を実践している全国の先生方が作成された100以上の学習指導案や、授業教材として使える写真・映像・データをご覧頂けます。

<https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/index.html>

お問い合わせ

富山県の方 公益財団法人とやま国際センター内 JICA 富山県デスク 担当：富山県国際協力推進員
TEL：076-464-6491 FAX：076-464-6491
jicadpd-desk-toyamaken@jica.go.jp

石川県の方 JICA 北陸 担当：開発教育支援事業
TEL：076-233-5931 FAX：076-233-5959

福井県の方 公益財団法人福井県国際交流協会内 JICA 福井県デスク 担当：福井県国際協力推進員
TEL：0776-28-8800 FAX：0776-28-8818
jicadpd-desk-fukuiken@jica.go.jp

2017年度 教師海外研修報告書

発行 2018年3月

発行者 独立行政法人国際協力機構北陸支部(JICA北陸)

〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-2 リファール(オフィス棟)4F

TEL : (076)233-5931 FAX : (076)233-5959

E-mail : jicahric@jica.go.jp

URL : <http://www.jica.go.jp/hokuriku/index.html>

